

724  
153



\* 0053552000 \*

3

0053552-000

724-153

銀座秘録

石角春之助・著

東華書莊

昭12

AIA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

282



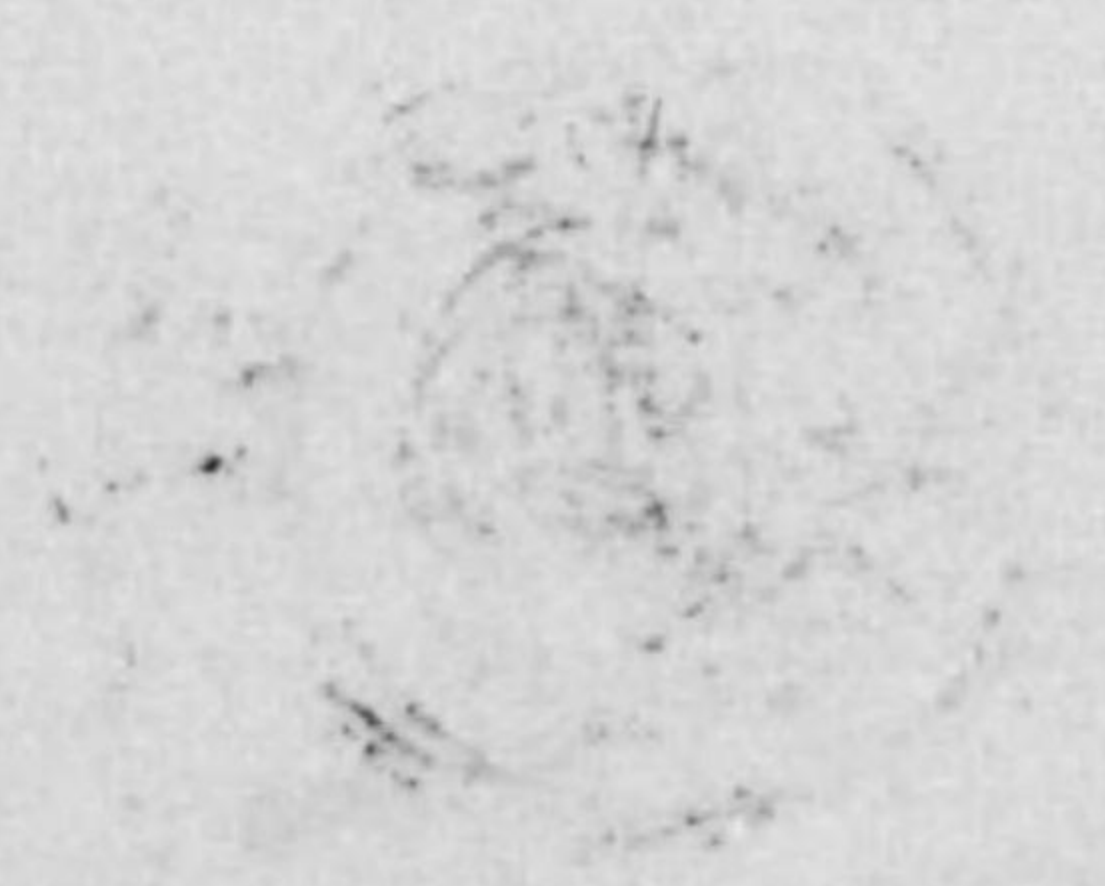
右  
解  
着  
之  
助  
著

座

秘

錄

東  
京  
東  
華  
書  
莊



724  
153

# 銀座秘録 目次

第一章 大歡樂境銀座の構成	一
第一 大歡樂境としての銀座	一
一、色彩のバラエティー	一
二、大東京の縮圖としての銀座	四
三、夜に咲く歡樂境銀座	三
第二 銀座に於ける食味大學	一〇
一、三つ巴に彩どられた銀座	一〇
二、銀座の食味大學の變遷	一四
三、銀座食道樂の大衆化	一七
第三 將來に於ける大銀座の設備	二二

一、散在主義と集合主義……………	三二
二、銀座も集劇主義への動向……………	三二
三、結合主義への一大工作……………	三七

## 第二章 歡樂境銀座の發達機構……………三

### 第一 江戸から東京への銀座界限……………三

一、江戸から東京へのモンターチュ……………三
二、築地講武所から海軍造兵廠(A)……………三
三、築地講武所から海軍造兵廠(B)……………三
四、煮豆と佃煮の由來と玉木屋……………四
五、官營商家拂下始末記(A)……………四
六、官營商家拂下始末記(B)……………四
七、築地盲啞學校の創立者……………五
八、衛生器具の元祖四ツ目屋……………五

九、出世地藏と八官稻荷……………五

### 第二 銀座が歡樂境になるまで……………六

一、明治初年の銀座八丁(A)……………六
二、明治初年の銀座八丁(B)……………六
三、明治初年の銀座八丁(C)……………六
四、明治初年の新橋界限……………七
五、薰陶小學校の廢校……………七
六、八官町の變り者と其の界限……………七
七、板新道と金春大工……………七
八、土橋際の丸屋町界限……………八

### 第三 江戸から明治への歡樂境銀座……………八

一、歡樂境銀座への第一步(A)……………八
二、歡樂境銀座への第二步(B)……………八
三、歡樂境銀座への第三步(A)……………九

四、歡樂境銀座への第二步(B)..... 一〇六

五、歡樂境銀座への第三步..... 一〇六

六、歡樂境銀座への第四步..... 一〇六

七、銅壺屋の師匠と金春藝妓..... 一〇七

八、左官から身を起した松田の主人..... 一〇七

九、歌舞伎座の建設と團十郎..... 一〇七

一〇、松竹の東京進出時代(A)..... 一〇七

一一、松竹の東京進出時代(B)..... 一〇七

**第四 銀座食道樂の變遷發達**..... 一〇七

一、銀座に於ける肉屋の普及時代(A)..... 一〇七

二、銀座に於ける肉屋の普及時代(B)..... 一〇七

三、銀座界限の蒲燒屋の變遷發達..... 一〇七

四、烏森界限の料亭の變遷..... 一〇七

五、銀座に於ける居酒屋の變遷(A)..... 一〇七

六、銀座に於ける居酒屋の變遷(B)..... 一〇七

七、銀座に於ける居酒屋の變遷(C)..... 一〇七

八、アイスとビヤホールの元祖..... 一〇七

**第五 銀座を彩る商店と會社**..... 一〇七

一、銀座の立志傳中の人々..... 一〇七

二、先覺者としての銀座の商店主..... 一〇七

三、大倉銃砲店から大倉組へ..... 一〇七

四、タイプライターの元祖..... 一〇七

五、銀座の純日本菓子屋の變遷..... 一〇七

六、銀座を舞臺として成功した會社(A)..... 一〇七

七、銀座を舞臺として成功した會社(B)..... 一〇七

八、銀座を舞臺として成功した會社(C)..... 一〇七

**第六 歡樂境銀座八丁の變遷發達**..... 一〇七

一、震災後に於ける銀座八丁..... 一〇七

- 二、銀座一丁目の機構と變遷……………一七二
- 三、銀座二丁目の機構と變遷……………一七六
- 四、銀座三丁目の機構と變遷……………一八〇
- 五、銀座四丁目の機構と變遷……………一八四
- 六、銀座五丁目の機構と變遷……………一八八
- 七、銀座六丁目の機構と變遷……………一九
- 八、銀座七丁目の機構と變遷……………一九七
- 九、銀座八丁目の機構と變遷……………二〇一

### 第三章 歡樂境銀座の種々相……………二〇六

#### 第一 マスターから見た歡樂境銀座……………二〇六

- 一、正しい認識は銀座の生命……………二〇六
- 二、カフェー戰術の二つの道……………二〇九
- 三、正宗の銘刀程の斬れ味……………二一三

- 四、喫茶店の流行を覗つた人……………二二六
- 五、五百圓の資本で叩きあげた不二家……………二二八
- 六、銀座の支那料理店主(A)……………二三一
- 七、銀座の支那料理店主(B)……………二三四
- 八、銀座の支那料理店主(C)……………二三七
- 九、學校出から見た食堂マスター……………二三三
- 一〇、趣味を事業化する小林氏……………二三三

#### 第二 銀座カフェー街の二大勢力……………二三六

- 一、カフェー戰術の類別……………二三六
- 二、紳士社交場を自任する店……………二四〇
- 三、關西式工作のマスター(A)……………二四二
- 四、關西式工作のマスター(B)……………二四五
- 五、銀座カフェー街を牛耳る者……………二四九

#### 第三 マダムから見た歡樂境銀座……………二五一

一、女ならでは世の明けぬ國……………二五二

二、星のルパンを番頭に持つ錦潟……………二五四

三、銀座喫茶店マダムのさま／＼……………二五六

四、映畫女優の酒場マダム……………二六二

五、銀座特種マダムのさま／＼……………二六六

**第四 銀座食道樂の機構と素描**……………二七一

一、銀座マンの懷中物診斷……………二七一

二、懷中物診斷の裏表……………二七四

三、婦人の全貌から見た懷中物診斷……………二七七

四、銀座食道樂の機構……………二七九

五、蕎麥の起源と銀座の蕎麥屋……………二八二

六、現在銀座の牛肉料理……………二八五

七、銀座の一般的な天麩羅屋……………二八八

八、銀座の特種な天麩羅屋……………二九〇

九、番茶流行時代の前兆か……………二九四

**第五 銀座に於ける辻君の變遷**……………二九八

一、銀座のストリートガール(A)……………二九八

二、銀座のストリートガール(B)……………三〇一

三、モダンなストリートガールの出現……………三〇三

四、ストリートガールの行動……………三〇六

五、現在のストリートガール……………三〇八

六、ボン引女給の今昔……………三三三

(完)



# 第一章 大歡樂境銀座の構成

## 第一、大歡樂街としての銀座



色彩のパラエティ

銀座は異なる二つの美しさがある。

其一つは、虚仮の笑顔のやうな美しさだ。

奥床かしの 魅力的な美でもある。

其二つは、風に吹かれるお嬢のスカートのやうな挑発的な美だ。豊感的な、いやらしさを持った美とも云へる。

勿論、第一の美は、銀座自體の持つ美しさで、所謂銀座が、紳士社交場としての場所であることを裏書きするものでもある。しかし歡樂境としての美しさは、たゞこれだけでは、決して發達する

ものではない。

少くとも銀座が、凡ゆる階級の遊び場であり、歡樂境としての存在である以上、第二の意味に於ける挑発的な、いやらしさを持った美がなければならぬ。つまり獵奇的な美しさこそ歡樂境の裏面を彩るもので、これなくば、盛り場の發達は、到底期待することが出来ない。

それは歡樂境一帯が、餘りにも平明になり過ぎてならないのと、同一理由に基づくもので、如何に銀座がスマートな美しさを、其の旗印とするものであらうとも、高尚な、奥床しさをモットーとしてゐやうとも、乃至は又、處女の眸のやうな純真さを強調しやうとも銀座が、凡ゆる階級の歡樂境である限り、そこには獵奇的な挑発美がなければならぬ。

少くとも、第一の意味に於ける美しさのみであつたら、それは餘りにも單調で凡ゆる人間の感覺を動かすに、力が微弱で、發展の可能性がない。

だがしかし、銀座が、紳士社交の場所である限り、第二の美が勝ち過ぎてはならない。

それは専ら大衆的な、民衆娛樂の中心地としての淺草邊りと異なる處で、つまり銀座が、お化粧を爲し、正しく衣紋をつけて遊ぶ場所であるからだ。そして、それはどこまでもそうでなければならぬ。即ち銀座の持つメカニズムがそれであるからだ。

歡樂境としての銀座が、全日本を代表する最も美しい場所であると云ふのも、蓋しこゝに存するのである。云ひ換ふれば、すつきりしたスマートな、そして其の辭、宏大な、とても大規模な、雄大な美こそ、銀座自體の持つ美しさで、これこそ國際的な美の表徴でもある。

だが、それは一面の表徴で、他の一面には、一般盛り場に見るやうな、しどけない、挑発的な美が介在し、而かも、それがすつきりしたスマートな美しさと溶け合ひ、獵奇的に、大衆に喰ひ入ることになるのだ。

だから銀座にも、所謂吉田御殿の存在があつたり、ギャングサービスの實演が行はれたり、乃至は又、エロ戰術、ボン引戰術、タカリ戰術などの物凄い戰法が行はれることも、銀座自體を繁昌させる上に於ては、止むを得ないことにもなるのだ。

又銀座の美しさには、相反する二つのものがある。

其の一つが、ウルトラモダンの美で、其の二が、懐古趣味的な、クラシックの美であるが、しかし、これは何れの盛り場にも、必ず併立する美であり、而かも、過渡期に於ける今日としては、殊に、それが最も顯著に表示されつゝある。しかし、銀座が、國際的な社交場である限り、他の民衆娛樂の中心地に見るそれと異なり、一層モダンな美が強調され、殆ど其の大部分を占めつゝあるの

は云ふまでもない。

これを要するに、歡樂境銀座は、大東京の縮圖であると同時に、又文明の縮圖でもあるから、凡ゆるものが併立し、こんがらがり、入り紊れ、新舊モンターチュを爲し、アラモードを彩どり、雜然混然として、絶えざる動きを示しつゝある處に、大東京の心臓としての役割を完全に果し得るのである。銀座の現代は正にそれである。だからこれを細密に分解すると、さまざま要素の下に組み立てられてゐることが、はつきりと解つて行くのである。

## (二) 大東京の縮圖としての銀座

銀座は、既に、今日ですら、凡ゆる階級の遊び場である。だから此の意味に於て、銀座は、大東京の縮圖と見ることが出来る。少くとも銀座に集る人間は、大東京の凡ゆる階級を通じた大衆である。で、其の大衆を相手とする銀座は、其の設備に於ても亦、大東京の縮圖と見ることが出来るのだ。

最も、過去に於ける銀座は、今日のそれと異なり、極く特種な、殊に、ブルジョアの散策場所であり、遊び場所でもあつたのだ。少くとも明治時代に於ける銀座は、完全な歡樂境ではなく、而か

も、其の頃、銀ぶら黨と稱せられる者は、大衆ではなくて、或る特種な階級のものに限られてゐたのだ。だから自然、其の設備も特種な階級のみを狙つたもので、演劇にしても、食道樂にしても、將又、藝妓にしても、特種な階級にふさはしいものを集めてゐたものだ。

で、結局、銀座のカラーは、明治時代に於て、最もはつきりと表現されてゐたものだ。例へば夜店にしても、今日の如く、大衆的な粗製濫造品の廉賣ではなくて、主として特種な骨董品などを並べてゐたのである。

又、一般商家にしても今日のそのやうに、大衆を目標とするものではなく、特種な階級の愛好品などを商ふ店が多かつたのだ。だから銀座が、特種な街として、独自のカラーを發揮してゐたのは、何んと云つても其の頃であつた。

そんな譯けで、明治時代に於ける食道樂は、最も高級を極め、大東京の最高の料理を調理する場所となつたものだ。全く其の頃の銀座に於ける食道樂は、他の何れの盛り場にも見ることの出来ない、食味の蘊奥を極めてゐたもので、殊に、當時、有名な料亭の存在は決して少なくなかつた。つまり食味に付いても、特種なカラーを發揮し、銀座の權威を示しつゝあつたのだ。

處が、大正時代に這入り、所謂、藝妓萬能時代となり、聽ては、カフェー時代がやつて来るやう

になると、銀座も、そろ／＼大衆に媚びるやうになつた。とりわけ大正十二年の大震災をきつかけとし、銀座は、斷然歡樂境としての存在をはつきり示した。そして又、それと同時に、爾來食味本位であつたものが、女本位となり、サービス本位となつて銀座の食道樂は、益々墮落して行つた。つまり銀座が、大衆化した原因は、無論幾通りかの理由があるであらうが、其の直接の原因は、以上の理由によるもので、手つとり早く云へば、サービス本位のカフェー並びにバーの發達によるものである。

しかし、又其の半面には演劇映畫の大衆性、これが又、大きな動機を與へたことも、争へない事實である。

何れにするも、今日の銀座は、假令、他の盛り場に比して、多少の高級性があらうとも、亦、特種な存在が残されてゐやうとも、其の實質は、大衆を狙ふもので、其の設備が、だん／＼と大きくなればなる程、大衆層が廣くなつて行く。殊に、これからの銀座は、名實共に、東京の縮圖としての存在が明瞭化し、銀座其のものゝ持つ特徴よりも、徒らに規模の大きなことを以て、其の特徴とするやうになるであらう。

つまり銀座が、歡樂境として、發展すればする程、從來の銀座が、其の特徴として來た所謂、銀

座的なるものが、益々薄くなり、而かも、それと同時に、從來小規模であつたものが、自然大規模に改められ、大東京の縮圖としての凡ゆるものが完備されるであらうことは、何人も疑はない處である。

それは云ふまでもなく、銀座が、大東京の文明を代表し、流行の魁を爲し、更に大東京のメインストリートであり、大東京の大衆の歡樂境である以上、當然そう云ふことになるのである。

だから此の意味に於て、銀座は將來益々大東京の縮圖として、其の文明を代表する場所としての任務を果さねばならぬ。

### (三) 夜に咲く歡樂境銀座

銀座は、夜に咲き、朝にしほれる。

完全な歡樂境であるからだ。しかし、それにしても晝間の銀座のだらしなさは何んと云ふ現金さであらう。あの穢らしいバラック、だらしのないトタン屋根。しどけない店舗、ウインド、これがどうして、世界に誇る歡樂境と云へやうか。更らにこみ／＼したちつほけな店。ビルディングの屋上から見た銀座の全貌。悪く云へば犬小舎に似てゐる。マッチ箱の連続でもある。

だがしかし、これが大東京のメインストリートとしての大銀座の全貌なのだ。東京の一番美しい眞顔でもある。

處が、一度黄昏れがやつて來ると、恰も孔雀が羽を擴げた時のやうに、美しくも亦、華かに、さんく、と輝き涉つてゐる。本當に手の平を返へした程の變化だ。否、それ以上の變り方だ。別物を見た時の感じでもある。

赤いネオン、青いネオン、緑、紫。幾百萬と數知れない輕快なライトビジョン。そして、其の下を縫つて通る紳士、マダム、モガ、モボの明朗な足どり。これこそ世界の盛り場、ピカデリーや、モンマルトルに優るとも劣らない華やかさだ。

事實、銀座のネオン、サインは、世界的である。これだけは世界に誇る存在でもある。だから夜に歩く銀座の街は、少しの倦怠も感じさせない。生きてゐるからだ。處女の投げるやうなウイंकが感じられるのだ。銀座が、魅力を持つてゐるのは、たゞ夜だけである。正装したヴァーヂンの姿が夜に於てのみ見られるからだ。

そうだ。ネオンが消え、凡ゆる光りが沈滅して終ふと、白粉のはげた女郎の姿のやうな、しどけなさに再び歸つて行く。朝の銀座がそれである。見直せば見直す程、だらしなく厭氣が増して行

く。

朝の銀座こそ、歡樂境の樂屋裏だ。お尻から見た美人の姿とも云へやう。だから銀座が、普通の盛り場であつたら、これでも結構かも知れない。何故なら、歡樂境は、夜にのみ咲くべき場所であるからだ。しかし、銀座は、他の盛り場と異なり、大東京を代表すべきメインストリートでもあり、日本大衆の歡樂境でもあるから、現在の如く、夜と晝とが、隔け離れ過ぎてゐては、これ等の重大な任務を果す場所として、餘りにも變態的で、體ては、其の發展を障碍する的原因ともなるであらう。

それは何故か、銀座が、東京の咽喉部として、そして又、一番美しい場所として、どこまでもスマートで又飽くまで宏大な美しさを保つてゐなければならぬからだ。で、銀座人は、此の點にも眼を一轉し、晝の銀座の美を飾るべく努力せねばならない。

殊に、寢姿のだらしなさが、美人としての要素を缺くやうに、高尚と、スマートをモットーとする銀座にあつては、其の寢姿の美しさも亦、重大な要件の一つと云はなければならぬ。

所謂、麗人は、どこまでも注意深く飽くまで慎み深きことを要するのである。

歡樂境銀座の朝は、黄昏れ近くから始まる。即ち遲出の女給達が、盛んに繰り込んで來る時が、サラリーマンの出勤時間に似てゐる。そして、彼女達が、それ／＼席につき、サービスを始め出し

た時が、正午に該當する。更らに九時十時が最も盛んな時で、一日中でも一番大切な時でもある。時を越した十一時、十二時、稼ぐに屈々な時で、彼女達が血眼になつてサービスを始める時でもある。

かうして歡樂境銀座は、十二時の聲をきくと、そろ／＼暮れて行く。殊に、彼女達が歸り仕度を始める頃になると、流石に、銀座の街もさびれて終ふ。しかし、それで居て、銀座の正體はまだ眠らない。遅まきのスタンド、吞屋、支那そば、特種な大衆食堂等々はこれからだと云つてゐる。事實これ等の店が戸を閉める頃になると、銀座の街は、名實共にこん／＼と深く眠つてゐる。

## 第二、銀座に於ける食味大學

### (一) 三つ巴に彩られた銀座

銀座は、凡ゆる階級人士の遊び場である。殊に、プチブルの遊び場としては、屈々な場所、其の設備に於ても、地の利の關係に於ても、他の孰れの盛り場にも見る事の出来ない特徴を持つて

ゐる。其の特徴が今日銀座のカラーである。

銀座の持つメカニズム。それも矢張り以上の特徴の現はれに過ぎない。

銀座は、凡ゆる歡樂の殿堂を極めてゐる。無論、歡樂境としての三大要素が完備し、而かも、これ等が入り兼ね、三つ巴となつて、美しくも亦、眩ぐるしく彩どられ、天國に見る極樂の感さへ與へてゐる。

殊に、銀座に於ける食道樂は、其の中でも最も完備せるものゝ一つで、上は一品圓助から、下はナンセン料理の薄利多賣に至るまで、一切取揃へてのサービス振り。これぞ即ち銀座の食味大學で、これ等の總てを完全に食ひ分け、其の眞價を滞りなく判斷することが出来たら、彼は、立派に食味大學の卒業生である。

何故なら、銀座は、凡ゆるものゝバラエテイで、鳥、牛、鰻、天麩羅、小料理、西洋料理、支那料理、其の他ありと總ゆる料理の陳列場であると同時に、又其の實質に於ても、江戸前料理を始めとし、京都系、大阪系、名古屋系、長崎系、横濱系、江の島系と、總て其の系統を異にし、料理法を異にしてゐるので、これ等の總てに涉り、其の料理の持つデリケートな味を食ひ分けることは、食味の衰へた今日としては、可なり困難な事實であるからだ。

銀座の食堂と云つた處で、其の中には、随分怪しげなるものも少くない。甚だしいものになると、料亭の主人公でありながら、板場と板前の區別が出来なかつたり、バーのマスターが、パーティーと、コックとを混同したり、全く嘘のやうな馬鹿々々しいことが現實に存するのであるから、うっかり買ひ被つてはならない。何故つて、そんな認識不足の連中が、主人面をして指圖をした料理や、カクテルが、どうして美味しく食つたり、飲んだり出来やう。

だが、しかし、そうした家に限つて、却つて高級を標榜し、眼玉が飛び出す程高くとるのであるから、食味の衰へた連中には頗る鬼門である。

嘗つて何かの雑誌にかう云ふ記事が出てゐた。それは銀座の或る料亭の板場が千疋屋に現はれ、「松茸の一番上等なのを呉れ」と云つた。無論、そう云ふ風に注文されなくとも、千疋屋の方では、看板に關係することであるから、名産地のものでなければ仕入れてない。が、兎に角、注文通りの松茸を出すと、「此の松茸はどこ産だね」と、板場先生得々として訊いた。

「これは京都の産で御座います」

番頭は、相手が料亭の板場であることを知つてゐたから、これ以上の説明をしなかつた。

「何、京都だ、そりや駄目だ、京都の松茸なんか使へるもんか、甲州ぢやなくちや駄目だよ、とり

替へて呉れ」

餘りのことに番頭君、呆然として相手の顔をしみじみと見たが、しかし、それでも相手の板場先生、氣がつかず「松茸は甲州に限るんだから、早くとり替へて呉れ」と如何にも物知りらしい顔付きをしてゐた。

「手前の處には甲州の松茸は御座いませんから、どうか外のお店でお買ひ下さいまし」

流石に、老練な番頭は、かう云ふ風に、體裁よく斷つたものだが、しかし、それでも彼板場先生には解らず、「銀座の千疋屋ともあるものが、名産地の甲州松茸がないなんて馬鹿にしてら」と、捨て科白を残して出て行つたと云ふことだつたが、全くこんな先生が、庖丁とつての荒療治をするのであるから堪つたものではない。

何故つて、京都の松茸は日本一の定評あるもので、其の香りと云ひ、庖丁を入れた時の美しさと云ひ、正に名産中の名産なのだ。それなのに、千疋屋の暖簾にかゝるので置けない處の甲州松茸を以て、日本一と信じてゐるコック長。銀座の食堂の面汚しである。

しかし、かうした例外は兎に角として、一般に、銀座の食道樂は、大東京中での最も高級なるもので、其の權威を爲すものでもある。無論、見世物としての演劇、映畫もそうであり、同時に又、

これ等の裏面を彩る處の銀座女も亦、大東京の女性を代表するそれでなければならぬ。そして、それ等の三つが、互ひに平行し、入り交れ、もつれ合ひ、或は、三つ巴となつて歡樂境の美觀を添へつゝあるのだ。

### (二) 銀座の食味大學の變遷

銀座の食味大學も、他の盛り場に於けると同じやうに、矢張り鰻料理から出發してゐる。と云ふのは、既に、嘉永年間に於て、尾張町界限に、三大鰻屋なるものが存在してゐる。單にこれだけの事實によつても、其の當時、如何に蒲焼料理が盛んであつたかを雄辯に物語るものである。

更らに明治中期頃になると、東京に於ける三大鰻屋として、新富町の竹葉、靈岸島の大黒屋、日本橋の和田平の三軒が擧げられてゐる。

そして又、二流所として神田明神下の神田川、淺草山谷堀の重箱の二軒があり、而かも、これを合せて、東京に於ける五大鰻屋とも云つたものだ。

しかし、其の中でも、竹葉と、和田平とは、最も有名でもあり、又其の權威を爲すものでもあつた。とりたてゝ、和田平の主人公は材料を看破し、判斷することに於て、其の道に於ける達人とま

で云はれた人だつた。例へば材料としての鰻を一瞥しただけで、的確に其の産地を見抜いたと云ふ話である。

諸子も知られる如く、鰻は、其の産地によつて、甚だしく其の味を異にするものであるから、これを見抜くのめいが必要ならば、最も高級なる處の蒲焼料理は出來ない譯けだ。まして鰻には、其の土地々々に於て異なる「しゆん」なるものがあつて、其の「しゆん」に當てはまらないものは、決して美味しく食ふことが出來ないのである。だから従つて、其の産地を見抜くことは、他の何れの料理に對する材料よりも、重大な任務とされてゐるのである。

事實又、これが一番大切なことで、これを誤る時は如何に、其の料理方法が巧妙であらうとも、決して其の料理は、デリケートな味を持つものではない。

最も今日のやうに、大衆の味覺が衰へ、「天然鰻より養成鰻の方が軟かくて美味しいぢやないか」などゝ呆れ返つたことを平氣で云ふ時代となつては、「しゆん」も糞もあつたものではない。況んや、其の産地など、どうでもいゝ譯けだが、しかし、苟しくも食通を以つて任じてゐる連中に「しゆん」にはづれたものを食はせたら、定めし其の料理の拙劣さを笑ふであらう。

しかし、鳥に付いては、左程、産地は問題にされない。それは鳥自體が、どこに住んでゐやうと



も、食べ物さへよければ、敢て、産地に關係するものでないからだ。しかし、それにしても食べ物のよし悪しは、食味に關係する處が重大であるから、高級をモットーとする店にあつては、つぶす前一二ヶ月間、其の食べ物をぎん味することになつてゐる。

殊に、淺草仲見世の「金田」など、明治時代には、つぶす一二ヶ月前から、胡麻を食はせてゐたものだ。諸子も知られる如く、仲見世の金田は、淺草には珍しい程、高級な店で、東京市内に於ても、有數な存在で、開業以來今日に至るまで、徹頭徹尾實質本位でやり通して來た程の店であるから、其の材料に付いても可なり苦心をしてゐるやうである。しかし、惜しいことには、淺草の大衆層には其の眞價が解らない。多少そこに理解を持つ者があるとしても、矢張り淺草的であると云ふ囚はれた先入主で見られるから、ひどく不利益でもある。

牛に付いては、産地が問題にされてゐるが、しかし、これとても結局、牛の種類が問題になるのであつて、土地自體が産むよし悪しではない。全く牛にもさまざまの種類があり、而かも、其の種類異なるによつて食味も亦甚だしく異なるものがある。だから苟くも、高級を標榜する店にあつては、其の材料の選擇に付き少なからず頭を悩ましてゐる。

何れにするも、材料の選擇は、料理の根本を爲すものであるから、其のよし悪しを的確に判斷す

るのめいがなければ、如何に庖丁をとつての技術が優れてゐやうとも、其の板場は決して完全なるものとは云へない。まして今日の如く、インチキ時代にあつては、イカサマものを掴まされるの懼れが、多分にあるから、より以上重大な仕事と云はねばならない。これ等のことに付いては、何れ詳細に述べる機會があるので、こゝではこれ位ひで切りあげておく。

### (三) 銀座食道樂の大衆化

現在銀座の食道樂は、漸次、大衆化しつゝあるのは、何人も否定することの出来ない事實だ。無論、特種料理の流行は、其の半面に於て、銀座の高級性を表示するものではあるが、しかし、他の半面に於ては、これと全く正反對な事實を暴露するものでもある。例へば特種料理中、關西料理の流行の如きは、銀座の高級性を發露し、特種なる立場を明かにするものではあるが、しかし又、他の一面に於て、焼き鳥、おでん、お手輕料理、とんかつ、スタンド等が、おびたゞしい勢ひで増加して行くことは、銀座の食道樂をして、大衆化するものでなくて何んであらう。

事實、銀座の食道樂は、それだけでなくとも、漸次大衆化しつゝある。

殊に、お手軽料理の中には、安くて、甘くて、盛り澤山と云ふ破天荒な店が、決して少くないことだ。全く銀座の真ん中で、「これだけ勉強して、よくもやつて行けるものだ」と感心させられる店が、可なり多いことだ。

此の點は、全く意外である。しかし、それでゐて、大衆達は、銀座の食堂は、高價なものと、最初から値ぶみしてゐる。先入主の働きだ。大衆的を標榜する店の痛手でもある。

何故なら、大衆の食味が衰へてゐる爲めに、かうした大衆的な食味の存在價値さへも、判断がつかないのだ。たゞ値段と先入主で判断するに過ぎないのである。

嘗つて、おでん屋の岩崎善右衛門君が、かう云ふ話をしてゐたことがある。

或る時、紳士風の男が、ひよつくりやつて来て、「此の邊にコウカと云ふそばやが出来たそうだが、どこでせうか」と訊いた。

震災前から住んでゐる彼氏であるが、嘗つて一度も聞いたことのないそば屋だ。

「そりや何時頃のことですか、コウカと云ふそば屋は聞いたことがないが」

「何んでも最近出来た許りのそば屋だそうだが、とても有名で、美味しいとか云ふので、一度食つて見やうと思つて来たんだが……」

岩崎君有名と聞いて、頭の中で幾度か、コウカと繰り返へして見た。

「成る程ね、コウカか、こりや名文句だ、コウカなら直ぐそこですよ」と數寄屋橋際の更科を教へてやつたと云ふことだが、しかし、上には上があるもので、淺草公園で「ヨネヒサと云ふ肉屋はどこでせうか」と聞いた連中もあるんだから、全くこんな先生達に、どんな料理を食はせた處で、猫に小判の有り難さ程も感じないであらう。しかし、それでも食つて見やうと云ふ心掛けだけは、哀れにも亦御愁傷である。

それかと思ふと、或る男が、或る關西料理屋へ行つて、鯛茶を注文し、お茶漬けにすることを知らず、味噌鯛をおかずにして、ガツ／＼食ひ出したと云ふ連中もある。それは恰も明治初年、西洋料理に出る手洗ひ水を飲み乾したのと同じ筆法だが、全く世の中には、隨分、無智な先生も少なくない。

又こんな話もある。明治時代、東京人が、大阪の肉屋にあがつた處が、葱の青い葉の處を澤山持つて来たので、「こんなものが食へるか、江戸ツ子は白い處しか食はないのだ、白い處をうんと持つて来い」と許り江戸ツ子風を吹かせたものだ。そこで肉屋の方では、注文通り白い處許り澤山運んだのであつた。

處が、いざ勘定となると、眼の玉が飛び出る程高くとられ、ほう／＼の態で歸つて來たと云ふことだつた。

全く食味の何ものも知らないものは、實に始末の悪いもので、今日は、そうと許り限らないが、其の頃の關西に於ける葱は、東京の栽培法と全然異なり、短い期間に於て、超スピード的に成長させた青年其のものやうな、潑刺とした青さと軟かさを以て、其の特徴としてゐたものである。つまり其の味は、東京の葱のやうな、こつてりしたしつこさではなくて、あつさりした味と、葱其のものゝ持つ香ひと自然の味とが、そこに秘められてあるのだ。少くとも濃厚さを排斥する關西料理としては、却つてこれがふさわしいのである。

事實又、東京風の葱は、決して自然の味とは云へない。何故なら、其の栽培法に於て、既に無理があるからだ。少くともあゝ云ふ風に、永い期間を要し、幾度びともなく土を培つて、自然の成長に背かせてゐるから、そこには、葱本來の持つ自然の味ひと云ふものが滅されて行く。

だから結局葱本來の味ひは、關西式の栽培法にあるのではなからうか。僕には、そう云ふ風に考へられるのである。

最も關西料理は、水つほくてまづいと云ふ連中に對しては、石佛に説法の感がある。

何れにするも、銀座に於ける食道樂は、大衆の味覺の衰へと共に、だん／＼と低下し、大衆化してゐることは、何人も争へない事實だ。

### 第三、將來に於ける大銀座の設備

#### (一) 散在主義と集合主義

銀座は、既に、現在に於て、盛り場としての要素を備へてゐる。假令、それが完全な、大歡樂境としての存在でなくとも、歡樂境を構成する要素には缺くる處がない。即ち見世物としての劇場、映畫館の亂立、遊び場としてのダンスホール、食道樂としては、料亭、カフェー其の他の飲食店の群雄割據。そして、それを繞ぐるモダンと、クラシツクの女性。藝妓、女給、ダンサー、其他新舊色とり／＼の女性のバラエティー。これが今日に於ける歡樂境の現状である。

しかし、少くとも將來に於ける完全せる歡樂境は、現状の儘であつてはならない。殊に國際的な、世界に誇る大歡樂境としての銀座は、將來に於て、如何なる設備を要求するか。つまり大體に

於て、散在主義を可とするか。將又、集合主義を是とするか。これが先づ第一に問題となり、而かも亦、これが盛り場銀座の盛衰を左右する大問題ともなるのである。

では、散在主義とは、何を指すか。即ち同種の娯樂物乃至食道樂が、或る一廓に散在し、分在する状態を示すものである。例へばカフェーと、商店とが入り亂れ、料亭と、ダンスホールが對立し、ビルヂングと、小料理とが併立する状態を指すものであつた、そこには、秩序的な形態もなく、所謂、雜然混然たる状態を指示するものである。

處が、集合主義は、これと正反對に、苟しくも同種のもものは、或る一定の部分に集合し、集在して一團を爲す状を云ふのであるから、従つて、見世物としての劇場、映畫館は、軒を並べて一團を爲し、カフェー、料理店も亦同種類の街を形成することになるのである。盛り場の構成上、以上の孰れが、最も適當かと云ふに、これは無論、一概に斷定することは出来ないが、少くとも完全せる盛り場と云はれるものは、出来る限り、同種の娯樂物乃至、食道樂が集合し、一團を爲してゐることが肝要である。

殊に、貸事務所を目的とするビルヂングなどが、其の間に存するが如きは、獨り盛り場の美觀と華かさを邪魔する許りでなく、娯樂物乃至食道樂の繁昌を阻碍することにもなる。だから出來得

る限り、同種のもものが集合し、一團を爲して盛り場を形成するやうにせねばならない。

殊に今後に於ける盛り場の構成は、それが最も肝要なことである。そうだ。世界的な、大歡樂境としての銀座にあつては、それが一番主要なことになるであらう。

だがしかし、これを徹底せしめる時は、従つて、同種の營業者間に於て、當然熾烈な競争が行はれ、盛衰をまねくことになる。だから自然、特種な立場に於て、超然としてゐることが出來ず、其の存在は、競争の對象として、大衆的となり、目前の利益のみに捉はれることになる。

つまり同種のもものが、一定の場所に、多く集ることは、特種性を没却し、高級さを失はしむる動機を造るものであるから、無論、其の結果は、當然大衆的となり、安直を強調することにもなるのである。で、結局、これからの銀座は、假令、大東京を代表するメインストリートであらうとも、乃至は又、世界的な大歡樂境にならうとも、其の實質は、益々大衆的となり、そして、それと同時に、過去に於ける銀座と異なり、多種多様の人物が、入り紊れ混然とした盛り場を構成することになるのだ。

そうだ。今後銀座が、益々繁昌すればする程、集合主義が完成され、同種の營業者間には、爾來に増した熾烈な競争が演じられ、而かも、總ては、大衆的となり、大規模な設備のみが、益々増し

て行くことは、何人も想像するに難くはない。つまり爾來、銀座が持つて來た特種性は、大規模な設備に替へられ、大衆的に強調されて行くのである。

### (二) 銀座も集劇主義への動向

銀座も遂に、集劇主義への第一歩へ乗り出した。其の重なるものは、丸の内への進出で、殊に、東寶の小林氏の計畫は、完全に、集劇主義への實行である。つまり小林氏の計畫は、松竹系の散劇主義に對するもので、有樂町の一廓に、新らしき樂天地をつくり、こゝに狹義に於ける歡樂境を創設せんとするものである。既に、建設され、計畫されてゐるものとしては、東寶劇場、日比谷映画劇場、有樂座、東京名物食堂等であるが、しかし、彼氏は、單に、これだけで、其の總てを計畫し盡したものは云へない。否、彼氏の計畫は、寧ろこれからであらう。

何故なら、彼氏は、最初から徹頭徹尾、集合主義をモットーとし、飽くまで樂天地主義を實行し、總てに於て、功成つてゐるからだ。

殊に、將來、銀座を背景とする樂天地としては、もつと廣範圍のものであつても、決して生産過多の問題は生じない。將來、大衆の欲する設備さへ完全すれば、これに數倍する樂天地が計畫され

ても、其の需要は、完全に充されて行くであらう。否、其の規模が大きければ大きい程、却つて其の一廓は益々昌へるであらう。

僕は、小林氏の集劇主義に對する認識の正しさをつくづくと感ずるものである。少くとも的確に將來を暗示するものと云はねばならない。何故なら、將來大衆は、必ず集劇主義を慕ひ、こゝに集つて行くからだ。

殊に、集合主義の本體が、大衆への妥協であり、共鳴である以上、當然大衆的に昌へて行くことが出来るのだ。此の意味に於て、將來集劇主義が、勝利を得ることは、何人も容易にうなづけるであらう。

だがしかし、集劇主義の缺點としては、容易に、特種性が奪はれ、大衆的にのみ妥協せんとする傾向を多分に持ち合せてゐる。だから此の意味に於て、松竹の散劇主義は、其の缺點を補ふものである。即ち松竹の散劇主義を分解すると、大衆に妥協する前に、先づ特種なるものによつて、特種なる階級を吸集せんとしてゐる。だからそこには、當然大衆的に墮落せんとする缺點が補はれて行く。これが散劇主義の特徴でもある。

最も今日では、松竹も亦、集劇主義に傾き、大衆的に妥協せんとしてゐる。そして、其の最も顯

著なもの、浅草進出である。松竹の浅草進出は、近來、殊に目醒ましいものがあり、浅草六區に於ける主要なる劇場、活動館が、殆ど松竹系ならざるものがないと云ふ素晴らしい有様だ。即ち松竹座を始めとし、日本館、金龍館、公園劇場、常盤座、東京俱樂部、松竹館、帝國館、電氣館、(准)大勝館と目星しい處をすつかり押へてゐる。而かも、建築中の國際劇場も其の實權は松竹にある。

かう云ふ風に、大衆的に妥協せんとするには、先づ集劇主義によるのであるが、銀座も亦、將來、益々大衆的になることは、何人も疑はない事實ではあるが、しかし、其の直接の理由は、演劇映畫の大衆化であり、而かも亦、集劇主義が、一段と、大衆化を強調し、大衆への妥協を叫ぶことにもなるのだ。

そうだ。小林氏の集劇主義が、徹底的に、斷行される時が來たら、銀座は、益々大衆化し、今日以上に、雜種な種類が入り込み、完全に、大東京の縮圖となり、全日本の文明を代表する場所ともなるであらう。そして、それは慌だしく集劇主義を實行しなくとも、近き將來に於て、當然集劇主義が要望され、自然に、それが實行されるであらう。だがしかし、苟くも將來を暗示し得る認識を持つ者なら、自然の趨勢を俟つまでもなく、手廻しよくこれが斷行を促進すべきが、寧ろ當然である。否、それこそ先覺者のとるべき行ひでもあり、又義務でもある。

時代は、正に集劇主義へと進んで行く。そして、それと同時に、大衆へ、大衆へと叫びつゝ近寄つても行く。

### (三) 結合主義への一大工作

理想的に、完全な歡樂境は、總ての娛樂機關が結合し、而かも、これ等が卍巴となつて入り素れ、結び合つて一廓を占據することにある。此の意味に於て、大阪道頓堀の歡樂境は、稍々理想に近い形態を持つてゐる。

例へば大通りに、見世物としての劇場、映畫館が飛びとびに存在し、而かも、其の間には、大カフェー、料理店、其の他の飲食店が入り素れ、其の裏面には、大衆のアバンチュールをそゝるべく、曖昧なる存在があり、群小カフェー、小料理店が網を張つてゐるからだ。

京都の京極も矢張り、かうした形態を持つてはゐるが、しかし、道頓堀の整然さが無い。處が、浅草は觀音様を中心として、凡ゆる娛樂の機關が備つてはゐるが、歡樂境の構成としては、餘りにも片寄り過ぎた傾向があり、せよこまさを思はせるものがある。少くともこれでは、大衆が萬遍なく散策し得るに不便である。觀音様に參詣し、芝居を見て、活動を見て、それだけで

さつさと歸へつて行く。かうした大衆も少くない。歡樂境としての街の機構が片寄り過ぎてゐるからだ。一方にのみ大衆の魅力が集るやうな仕組みである。

つまり大衆の魅力が、歡樂境全體に集中されるやうな仕組みこそ、理想的な歡樂境と云ひ得るのである。が、しかし、それが大きければ大きい程、其の仕組みは、最も困難である。それは云ふまでもなく、大歡樂境を形成する内容は、頗る複雑で、凡ゆるものが、其の廣汎な範圍に、片寄らずして、入り紊れてゐなければならぬからだ。

現在の銀座は、無論、歡樂境の構成としては、理想的なものではない。何故なら、これを最も廣範圍に解しなければ、完全せる歡樂境と云ふことが出来ないからだ。そして其の廣範圍の歡樂街は、得てして片寄りを見せ、全體に於ける魅力が、粗雑に流れてゐるからだ。

最もこれが將來に於ける大歡樂境の機構準備であるとすれば、それは勿論、別個の問題として述べねばならないが、少くとも今日の銀座を完全せる歡樂境と見る時は、以上のやうな缺陷は、何人と雖も容易に認識し得る事實だ。だから苟しくも將來、大銀座の建設を企てるものがあるとするば、先づ第一に此の點に着眼し、結合主義への一大工作を爲さねばならない。

銀座は動く。大衆は流れてゐる。其の大衆を動く銀座に結びつけるには、獨り大銀座の建設があ

るのみだ。大銀座の建設。そして、粗雑な娛樂機關、歡樂境の構成要素、それ等の適當な結合こそ、來るべき大銀座への贈り物としてよりよきものでもある。

此の意味に於て、僕は、僕の主張する丸の内への連絡上、其の發展を遮ぎりつゝある處の濠——つまり不潔な川の存在が邪魔物であるから、これを適當に掩ひ、而かも、其の上には最もモダンな遊び場を造り、年中草花などの絶えないやうにしておくのが、何よりも肝要な事實であることを信するものである。何故なら、かうすることによつて、銀座は自ら丸の内への發展を開始し、これと連絡し、名實共に、大歡樂境を建設することになり、銀座は一段と賑ふであらう。そして、それが完成することは、同時に結合主義への完成ともなり、聽ては理想的な大歡樂境が出現するであらう。

そうだ。未來への銀座は、早晚必ずかうした運命を持つであらう。何故なら、現在の銀座は、既に完成の域に達せんとしてゐる。しかし、大衆は、依然として流れてゐる。動かない銀座に、こびり附いてゐる程、辛抱強い大衆ではない。感覺的だ。動く處へ流れて行く。だから其の流れを堰き止める爲めには、厭でも動いてゐなければならぬ。激濶と、新らしきへ新らしきへと、絶えざる動きが必要である。そして、其の動きの一番大きいのが、丸の内への連絡である。更らにそれ等の

結合主義の完成でもある。

丸の内への結合、これこそ正に將來に向つて、大銀座を建設せんとする一大工作でなければならぬ。大衆が動くやうに銀座も亦、新らしきへ新らしきへと進んで行かねばならぬ。そして、それは以上述べた如く、丸の内への結合が、最も効果的であり。而かも亦、最も容易なることでもある。

## 第二章 歡樂境銀座の發達機構

### 第一、江戸から東京への銀座界限

#### (一) 江戸から東京へのモニターヂユ

今日から江戸末期の銀座を顧ると、全く夢のやうな變遷振りで、そこには、何等當時を偲ぶ事實の存在もない。

殊に、近來の科學文明は、如何に貴き古蹟も、一片の紙屑同様に惜しげもなく、掃き棄て、又は焼き滅ぼし、少しの執着も感じさせない。況んや、比較的遺跡に乏しい銀座にあつては、とりたててそれが最も甚だしく、昨日の事實は、今日に消滅し、明日への建設に精進しつゝある。

それは無論、銀座が文明の中樞地で、大東京の心臟としての潤達な場所であるからだ。そんな譯で、江戸末期から、今日に至るまで、存在する商店は、殆ど數へるに過ぎない。



其の一つは、銀座四丁目の玉屋である。玉屋は、江戸時代からの店で、其の頃は、鏡を磨くことを業としてゐたもので、後には、鏡屋となり、現在に及んだものだ。

玉屋は、貴い歴史を持つ店であるだけに、こゝの番頭から、立身出世をした人達は、決して少ないが、其の中でも、高木某氏の如きは、顯著なるものである。

現在、富士アイスの教文館ビルの處に、明治二十三年頃、博聞社と云ふ書店があつた。そして、其の附近に、明治初年精好屋と云ふ古着屋があつた。が、無論、博聞社の出来る以前のことである。

今日銀座の西裏通りを明治初年頃、新道と云ひ、又は新道通りとも云つたものだ。無論、其の頃は、食堂など一軒もなく、新道の名にふさわしく、細い露路に過ぎなかつたものだ。

現在、オリンピックのある處に、江戸時代吉田屋と云ふ呉服屋があり、可なり手広く營業を営んでゐたものだ。が、明治二十三年に廢業し、新道に引つ込み、地主として現在に及んでゐる。つまり地主としての吉田幸次郎氏がそれである。吉田氏は又、銀座町會長でもある。

吉田呉服店の隣りが、武藏屋と云ふ鰻屋で、こゝも銀座の飲食店としては、老舗に屬するものであつた。しかし、武藏屋は、多く文献として残されてゐないので、餘り高級な鰻屋ではなかつたので

あらう。武藏屋の隣りが、所謂、銀座屋敷に該當する場所であつた。

それから、丁度吉田呉服店の裏手邊りに、いろは長屋と云ふのがあつた。いろは長屋とは、此の長屋が比較的廣範圍のもので、いろはの符號でもつけなければ解らなかつたから、自然かうした名稱を産むに至つたものである。

此のいろは長屋に住んで居た者には、可なり毛色の變つた人や、後ちに成功した人も少なくなかつたが、其の中でも、料亭松田を引受けて、成功した松田兼五郎と云ふ人も、矢張りこゝに住んで居たものだ。無論、其の當時は、料亭の主人公ではなくて、左官が本職であつたのだ。が、喧嘩後間もなく、料亭松田を引受け、奇抜な宣傳をして、一時大成功をしたものだ。

越後屋呉服店も、矢張り維新前からの店で、吉田呉服店よりも、多少遅れてはゐるが、江戸末期の開業である。開業當時は、呉服屋ではなくて、手拭屋であつたのだが、それが明治時代に、呉服屋となつたものである。

越後屋は、現在で四代目で、今日の主人公は、四代目の越後屋茂右衛門氏である。

それから又、江戸時代、四方店と云ふのがあつた。四方店とは、眞つ四角な長屋であると云ふ意である。此の四方店の差配——イエヌシは、池谷權兵衛と云ふ人だつた。此の四方店も、銀座に於

ける長屋としては、有名なものゝ一つであつた。

越後屋の並びの恵美屋と云ふ足袋屋も維新前からの店で、可なり有名な家であつたが、つい此の間半込の薬王寺町へ引つ込んで終つたので、其の後は、十一屋になつてゐる。

老舗と云へば、網屋の小倉商店も維新前後からの店であつたが、現在は、麴町の白河町に引つ込み、たゞ銀座の地主として存在するに過ぎない。

銀座に於ける變り店として、有名なものゝ一つである丸八——即ち松澤八右衛門氏も、矢張り江戸時代からの店である。

### (二) 築地講武所から海軍造兵廠(A)

安政年間頃、築地に講武所があつた。それは現在の南小田原町と明石町邊に當つてゐる。が、頗る宏大な土地で、其の始めは、下總國佐倉の城主、拾壹萬石、堀田備中守の中屋敷であつたが、安政三年、講武所が始めて造られるに就いて、此の土地が講武所の建設用地に定められたのである。そして、其の開場式が、同年四月二十五日に、同所に於て、いとも盛大に華々しく執り行はれたものだつた。

殊に、當日此の式場に參列した者には、洩れなく赤飯を配つたものである。が、三千人の用意かしてゐなかつたので、聽て不足を生じ大まごつきに、まごついたと云ふことだ。しかし、それにしても如何に、此の開場式が、盛大であつたかを知ることが出来るであらう。

何れにしても、其の頃の築地界限は、殆どその全貌が、大名屋敷で、木挽町四丁目邊には、越前敦賀の城主、一萬石、酒井右京之亮の上屋敷があり、その近傍には、桑名の城主、松平越中守の屋敷があり、而かも、其の隣りが豊後臼杵の城主、五萬餘石を領してゐた稻葉若狭守の屋敷があり、はんべん河岸（現在の新富町寄）の處には、豊前中津の城主、十萬石、奥平大膳太夫の中屋敷があり、又汐留川の向ふには、播州龍野の城主、五萬千八十九石を領する脇坂淡路守の上屋敷と、奥州仙臺の城主六十二萬五千六百石を領する伊達陸奥守の下屋敷とがあつた。

それから又、木挽町方面には、常州麻生の城主、一萬石、新庄美作守の上屋敷と、本田主膳正の屋敷と、本願寺附近には、豊後國岡の城主、七萬石を領する中川修理太夫の屋敷と、松平遠江守の屋敷とがあつた。

かう云ふ風に、其の頃、築地木挽町一帯は、宏莊な大名屋敷の連続で、頗る閑靜な土地であつた。とりわけ講武所の出來た場所は、一方が海濱に面し、其の眺望は、絶美を極めてゐた。そし



て、其の坪数は七千餘坪に達し、可なり宏大なる土地ではあつたが、しかし講武所が、だん／＼と發展するに従ひ、遂に其の土地の狹隘を感じるやうになつたので、丁度、築地に講武所が出来てから、滿四年後、萬延元年二月三日、神田小川町（現在の三崎町）に引越したものである。こゝは越後長岡の城主、七萬四千石を所領してゐた牧野備前守の上屋敷で、其の坪数は一萬七千六百二十七坪と云ふ。これこそ本當に尨大な土地であつた。

つまり講武所は、此の尨大な備前守の屋敷跡へ引越して來た譯けだ。が、しかし、單に小川町と云つても、今日のそれとは異なり、現在、三崎町三丁目一番地の所が、丁度講武所のあつた處である。

現在、小川町と、隔け離れた處に、西小川町の名が残されてゐるのは、つまり當時の實狀を物語るものである。

何れにするも、築地に講武所があつた當座は、流石に其の周圍は賑つてゐた。假令素通りにして、多くの武士達が往復することは、築地界限として、ひどく火氣づけもしてゐたものだ。事實又これ等の者が、往復することによつて、料亭其の他の店が、直接影響を受け、繁昌したことは争はない事實だつた。

殊に、それを證明すべきものゝ一つとして、其の頃、突如として出來た師匠の「酌取御免」なるものによつても、其の間的一端を窺知することが出来るであらう。即ち此の酌取御免なるものは、後ちの新橋藝妓の祖先となるもので、つまり新橋藝妓の擡頭でもあつたのだ。かう云ふ風に築地に講武所があり、而かも、それがひどく發展してゐたことは、銀座界限にとつて、直接影響する處が甚少でなかつたのだ。しかし、それが突如として神田小川町へ引越して行つたのであるから、銀座界限の蒙る處の損害は多大なるものがあつたに違ひない。

### (三) 築地講武所から海軍造兵廠(B)

少し話が銀座から離れて行くが、講武所の移轉に附從して、これが變遷を一言しておかうと思ふのである。

兎に角、其の頃、講武所は著しく發展を開始し、日増しに其の勢力を増して行つた爲めに、先づ其の本據を神田小川町に移したが、しかし、それでも尙且つ狹隘の感があつたので、小川町の本陣の外に講武所の附屬地なるものを都合三ヶ所に涉り、これを指定した。しかし、其の指定地は、何れも空地を利用したもので、其の空地に於て新たに建築すべく計畫されてゐたものだつた。

その一つは、昌平橋外の現在、講武所藝妓と稱せられてゐる一廓であつた。其の二は、四谷門外であり、その三は、一ツ橋外で、何れも空地のみであつた。が、しかし、これ等の附屬地は、遂に實現されずして明治の御代に入つたものである。

殊に、今日講武所藝妓と稱せられてゐる神田旅籠町三丁目は、江戸時代からの空地で、其の頃、火除地として、人家の建築が許されなかつたものだ。だから江戸時代には、よく此の空地に見世物が出たものだ。最も天保以前には、いんちきな芝居小舎があつて、あやつり人形などを見せてゐたものだが、それも天保の市政改革に遭つて、とう／＼おつ拂はれて終つた。しかし、それでも時々小舎掛けをして變んな見世物を見せてゐたものだ。

處が、慶應年間になると、それが復活し、小劇場式な薩摩産なるものが出來た。だから又、以前のやうに、あやつり芝居をやつたり、岩井久米八などの連中が、女芝居をやつたりするやうになつた。此の岩井久米八と云ふ女役者は、後ちに團十郎の弟子になり、市川久米八と改稱し、天下の名女優として、ひどく人氣のあつた女役者であるが、それは兎に角、時には又、伊賀藏邊りのでんで芝居などもやつたりしてゐた。

つまり江戸時代から、維新にかけて、此の邊一帯が、盛り場で、芝居茶屋なども少くなかつたも

のだ。だから明治になつてから、講武所藝妓を産んだのも、當然な變遷で、かうなるのが、寧ろ自然の勢ひである。と云ふのは、芝居茶屋のやうなものが、明治になつても尙ほ殘存してゐたので、そこに當然、サービス嬢の需要が生じて來る。即ちその必要から生じたものが、後ちの講武所藝妓なのだ。

では、何故に講武所の建築もされない場所でありながら、講武所藝妓の名を跡したか。——本來なら講武所のあつた三崎町邊に、其の名が跡されなければならない筈だ。なのに、其の指定だけの空地にその名が跡ると云ふのは、如何にも變態な現象と云はなければならぬ。しかし、それには理由がある。

その理由の一つは、空地にふさわしい町名が附せられてゐなかつたので、講武所の指定地になると、大衆達は誰れ云ふとなく、こゝを稱して講武所と呼ぶやうになり、而かも、それが一つの代名詞となつて、明治の御代になつたものだ。だから彼女達が、こゝを根城として産れて來たものであるから、當然講武所藝妓を名乗るやうになつたものだ。

其の理由の二は、其の名を承け繼ぐにふさわしい彼女達が、こゝから産れて來たからである。つまり團體的な名稱として、適當なものであつたからだ。

それは兎に角、講武所の構成は上に名許りの總裁があり、教頭が江戸末期に於ける劍客として、第一人者と稱せられてゐた小谷下總守誠四郎であつた。そして、その下には、それ／＼階級を異にする教授がおかれてゐた。つまり昌平校に對し、武道の大學と云ふ處であつたのだ。そしてその大學は、所謂綜合大學に屬するもので、教授科目は槍術、刀術、柔道、軍學、軍馬、砲術、水泳等であつた。而かも、總ゆる武道の蘊奥を極めることにあつたのだ。

何れにするも、講武所が、築地から神田へ引越すと、其の跡は永く空地になつてゐたが、明治になると、そこが海軍造兵廠となり、而かも、木挽町の稻葉若狹守の屋敷と、松平越中守の屋敷跡とが維新後海軍省となり、其の後又、海軍兵學校と海軍計理學校となつたものだ。そして、それが明治の中期頃になると、海軍大學校に變つたものだ。

#### (四) 煮豆と佃煮の由來と玉木屋

銀座の名物としての玉木屋。こゝは今を離ること凡そ百五十年前の開業で、銀座新橋界隈に於ける最も貴き歴史を持つ家である。

即ち初代の主人公、田卷七郎兵衛なる人は、越後國蒲原郡田卷村の人で、中年頃、志を立て、江

戸に上り、芝口一丁目に、煮豆屋を始めたものである。だから無論、煮豆屋としては、銀座新橋界隈に於ける元祖で、同時に又、江戸に於ても有名な煮豆屋であつた。

處が、開店後七年を経つと、芝口の店を長男、七兵衛に譲り、自分は淺草茅町二丁目に、同じ玉木屋の屋敷で、同じ煮豆屋を開いたものである。

更らに、その後、幾年かを經過すると、長女に婿を貰ひ、而かも、其の婿の吉藏をして、日本橋十軒店に玉木屋を開業させた。

それは文政初年の頃で、初代七郎兵衛が、芝にて玉木屋を開業してから、十數年を経過した時のことであつた。

かうして玉木屋は、江戸市中に、其の直系達によつて、三軒を造りあげたが、何れも當時の人氣に適し、其の繁昌振りは、素晴らしいものがあつた。

▽玉木煮來る座彈豆

▽于瓢銀杏小梅新

▽主人賣初知何歳

▽定是九年面壁春

これは天保七年の「江戸名物詩」の一節であるが、これによつても、當時、玉木屋が、如何に人氣があつたかを、雄辯に物語るものである。何れにするも、玉木屋の起りは、初代七郎兵衛が、田巻村の生れであつたから、これに通ずるべく玉木屋としたもので、其の商標も亦、先祖の名前をとつて山七としたものだ。

では、佃煮は、凡そ何時頃から由來し、又何時頃から流行したかと云ふに、其の由來は最も古く、既に正保年間に、これを求めねばならぬ。

即ち其の起りは、徳川將軍が、攝津國の住吉神社に參詣した時、神崎川を渡船するに際し、西成郡佃村の漁民に、其の賦役を命じたものであつた。

處が、其の緣故によつて、寛永年間、江戸磯洲の東に當る于潟——今の佃島の一廊——百間四方を佃村の漁民に下賜されたので、正保元年二月に彼等漁民達は百三十四名一團となつて、江戸に下り此の地に住むことになつた。で、元佃村の漁民であつた關係から、其の于潟を佃島と稱し、一大漁村を形成するに至つたのである。

それから彼等漁民達は、土地を下賜されたお禮として、幕府へ献上すべく、毎年十一月頃、白魚の子を故郷から取り寄せ、それを繁殖させ、機を熟するを俟つて、篝火の漁舟で四ツ手網を擴げ、

白魚を掬ひとり、それを幕府に献上するのが例となつてゐた。

そして、其の剩餘の生じたものを所謂、佃煮に仕立て、それを辨當のおかずにし、獵に出かけたものであつたが、これが圖らずも、江戸名物の一つとなり、おびたゞしい勢ひで流行したものである。

では、其の流行は、凡そ何時頃かと云ふに、これに就いては、的確な文献がないから、はつきりしたことは云へないが、或る書物によると、玉木屋獨特の煮豆よりも、多少遅れて流行したものの如くに書かれてゐる。だから少くとも、文政以後に於て、其の流行を見たものであらう。

それは兎に角、現在、玉木屋の存する場所が明治初年、聚星館の火事があるまで、深川飯屋であつたことからして、玉木屋の由來はそれ以後だと云ふ説があるが、しかし、それは慥かに誤りで、既に玉木屋は、文化以前に、此の附近で開店されてゐる。だから假に、場所的に多少の變動があつたとしても、深川飯屋自體が、玉木屋でないことだけは明かである。

#### (五) 官營商家拂下始末記 (A)

明治初年の銀座通りは、名實共に過渡期に立ち、一方に於ては、輸入發明品の街として、時代の

尖端を歩き、他の一面に於ては、昔ながらの街として、下町情緒を偲ぶものがあつた。

殊に、明治五年の大火を機會として、時の政府が、法律を制定し、これを公布し、新橋から京橋に至る所謂、銀座八丁の表通りは、當時モダン建築とされてゐた赤煉瓦の西洋館か乃至は又、これに準ずる處の建築物でなければ、絶対にこれを許さないことを命じたものだ。

最も法律と云つた處で、お手盛りの太政官達と云ふのであつた。兎に角、此の案を強調した人は、歐米の視察から歸朝した許りの大久保利通卿だつた。つまり彼氏等が、歐米先進國の實狀を見て東京のメインストリートである銀座も、斯くあらねばならないことを泌々と感じたことによつて、立案されたものであるから、無論、それは高壓的な、強制力を持つたものであつた。即ち其の法律の制定と共に、半ば強制的に、爾來の商家の權利を買ひ取り、その上に、彼氏等が理想とする處の赤煉瓦の商店街を建て並べやうとしたのであつた。

そして其の工費の全額は、百萬圓となつてゐるが、しかし、これには少々山があり、腑に落ちない處も少くない。と云ふのは、その頃日本政府として百萬圓の金は容易ならざるもので、假令これが爲めに公債を發行したとしても、それだけの金が集つたかどうかと、先づ第一に大きな疑問である。

假に集る可能性があつたとしても、其の頃政府としてやらねばならぬ事業は、驚くべき數に達してゐたものだ。少くとも銀座通りの美觀を強調すること以上に、重大な事業が、次から次に控へてゐた。だから此の點からしても、銀座の官營商家の建築費は、百萬圓と云ふのが理想で、其實、其の半額位ひの金をやり繰りしてゐたものではあるまいか。當時の人達の說によつても、其の間の消息を知るに足るからだ。

何れにするも、此の官營商家は、總てで一千四百三十八戸で、出來あがつた部分から月賦、又は年賦で、どしどし拂渡したものだつた。が、しかし其の成績は、案外振はなかつたものだ。其の原因は決して一樣ではなかつたが、其の重なるものは、新舊思想の過渡期に立つてゐたことと、さまざまな流言蜚語が、矢鱈に飛ばされたからだ。

「あんな赤煉瓦の家に這入つたら、家内中病死して終ふそうだ」

「それに地震でもやつて來た日には、家内中煉瓦でべしやんこになつて終ふぢやないか」

「あれは悪魔の住む家なんだよ」

「そう云へば、お化けが出るそうだ」

かうした風に、何等の根據もない流言蜚語ではあつたが、しかし、それが盛んに流れたので、土

地の者は、殆ど共鳴でもしたやうに、拂下げを受けなかつたものだ。無論そこには横暴な當局への反感も手傳つてゐたらしい。が、兎に角、ひどくモダンな者でなければ、これが拂下げを希望しなかつたものだ。

そこで當局は、鐘と太鼓の大宣傳を爲すと共に、月賦乃至年賦の取立ては、頗る緩慢で、出来た時でいゝからと云ふ條件を附けて拂渡したものだつた。だから當時、金持ちでもあり、又とてもモダンとされてゐた八丁堀の興力達が、山氣を起して買ひ始めたものだ。即ち二三の者が拂下げを受けたことによつて、それが圖らずも流行となり、われもわしもと買ひ始めたものだ。

かうなつて來ると、政府の方では、敢て遠慮する處もなく、びし／＼といとも嚴重な取立を行つたものだ。驚いたのは買主の興力達だつた。「そりや、話が違ふ」と頑張つて見ても、證書面が許さなかつた。へまに反抗すると、お手盛りの強制處分で、情容赦もなく立退きを命じられると云ふ始末だつた。そんな譯けで、最初拂下げを受けた連中の中には、其の權利を抛棄するものが出来たり、又強制處分の結果、權利を失ふ者などが出来て、銀座の商人には可なり變動が生じたものだつた。だから結局、當局としては、これが爲めに豫想外の利益を獲得したと云ふ話もあるが、しかし又、其の半面には、これと全然反對の話も残されてゐる。

#### (六) 官營商家拂下始末記 (B)

反對の説と云ふのは、所謂官營商家に住んで居たものが、家賃とも地代ともつかぬものを幾年か、命令通りに納めてゐると、突然當該官廳から呼び出しがあつて、「もう、お前の家は月賦を完納して終つたから、今日限り納める必要もないし、又お前の住んで居る家屋は、お前の名義に書き替へてあるから、今日からは完全にお前の家だから、其の積りで居るがよい」と、全く寢耳に水のやうなことを云はれ、小踊りしてひどく喜んだと云ふ連中もあれば、又こんな風な話も残されてゐる。

それは再び呼び出しがあつて、「お前の家は月賦を何ヶ月分かを餘計に納めてゐたから、これはその割戻しだ、受領書を書いて持つて行くがよい」と、此度は金までつけて、いともモダンな家屋をたゞで貰つたと云ふ果報者もあつたとのことだ。だからかうした連中から云はせると、政府のやり方が、如何にも正しく温情的なものであつた。

しかし、これは政府としても、決してたゞで呉れたものではなく、證書に現はれた處の金額を取立て終つたからである。つまり證書面に現はれた月賦又は年賦の償還によつて、當然、家屋の所有



權が借主に歸屬するやうになつてゐたからだ。しかし、其の頃の大衆達がかうした法律關係がよく解らなかつたので、馬鹿喜びをさせられたものである。

最も政府が、銀座通りに官營商家を建てたことは、營利を目的としたものではなくて、寧ろ出損しても對外關係的に、對面を維持せんとしたのであるから、無論、そこには温情的な處もあつたに違ひない。

處が、馬鹿喜びではなく、本當に喜んだ者は舊地主であつた。最初官營商家建設の際、半ば強制的に、其の土地を買ひあげられたのであるから、其の當座は政府のやり口に對し恨みもし、批難もしたものだつたが、聽て、政府の考へ通りの街が出来、官營商家建設の目的が達しられ、其の收支が償ふことによつて、最早や、其の土地は不用のものとなつた。だから政府は、各々舊地主を呼び出し、殆ど無條件で、舊地主に其の土地を還附したものである。

全くこれこそ棚からぼた餅の譬への如く、豫期だもしない喜びが突如としてやつて來たのであるから、舊地主が喜んだのは當然な話である。

何れにするも、其の頃は、まだ官民共に、法律思想が普及されてゐなかつたので、無論、公法私法の別もはつきりされず、例へば私法關係に立つ國家が、公法私法を混同して、これを適用した

り、或は高壓手段に、或は温情主義に、主觀的な判断によつて、これを行つたことは争へない事實である。だから其の間には、以上のやうな全然異なる説が跡されたものであらう。

そうだ。時代は正に過渡期に立つてゐたので、無論、そこには過渡期に見る無鐵砲さが、公然行はれたのも已むを得ない事實だ。例へば明治初期に於て、政府が太政官紙幣を發行した時も、矢張り手厳しい高壓手段をとつてゐる。とりわけ井上馨侯の如き、自ら銀座街頭に現はれ、故意と、さまざまな買ひ物を爲し、太政官紙幣を出して片つ端しから釣錢をとつて歩いたと云ふことだが、若しも其の場合に「紙幣では困る」と云つたが最後、水のしたゝるやうな刀を抜いて「何、紙幣では困る、大日本帝國政府が發行した太政官紙幣がどうして困るのだ、何故受取れないと云ふんだ、さあ受取らなければこれだ」と云つたやうに、刀を突きつけて強制的に受取らしたと云ふことだ。

しかし、これも過渡期に於ける高壓手段として已むを得ない方法の一つではある。が、兎に角、其の頃は、多く公法私法の關係が混同されて適用されてゐたから、或るものに對しては、ひどく有利であつたり、又或るものに對しては、甚だしく不利益であつたりしたものだ。

## (七) 築地盲啞學校の創立者

明治初年に、築地の海軍ヶ原に、盲啞學校があつた。其の頃の海軍ヶ原は、寂莫其のもので、丈餘をなす雜草が生ひ繁り、山間に見る野原に等しかつたものだ。無論、これ等の場所は、江戸時代、主として大名屋敷で、宏壯な屋敷が連続してゐたものだつた。

それが維新後、主なき空家となり、荒れる限り荒れ果て、廳て、それ等の建物が、とり毀される。一面荒涼たる野原と化したものだ。そして、それが海軍の御用地となつたので、人はこれを海軍ヶ原と稱したものだ。海軍ヶ原は、今の新喜樂の處から、東京劇場にかけ、海濱に面する一帯を指稱したもので、明治初期の物騒な時代にあつては、夜中一人道などとも出来る處ではなかつた。事實又、古井戸などには、よく人の死骸など浮きあがつてゐたものだつた。それ程、當時の海軍ヶ原は、物騒な處で、寂莫たるものであつた。

其の荒涼たる一角に、盲啞學校があつた。此の學校は、本邦に於ける新聞界の元勳として知られてゐる岸田吟香氏などの創立にかゝるもので、日本最初の盲啞學校であることは、多言を俟たない事實だ。

全く彼氏は、維新に於ける先驅者としてあらゆる方面に、辛辣な腕を奮つてゐる。即ち新聞界に於ては、成島柳北、福地櫻痴、石井南橋、末廣鐵腸、それに岸田吟香氏を以つて、明治維新に於ける五大新聞記者と稱し、各々其の盛名を馳せたものである。

殊に岸田氏は、獨り新聞記者の先覺者と云ふ許りでなく、従軍記者の始祖でもあり、同時に又、和洋辭林の編纂者としての元祖でもある。

それから、又事業の方面としては、汽船運送の道を拓き、製氷販賣の創業を爲し、就中米人へボン博士の發見にかゝる眼藥精奇水の製造販賣をするなど、明治文化に貢獻する處が實に少くなかつたものだ。

更らに彼氏は、海を隔て、對支外交の卒先者として、上海の英租界に店舗を構へ、精奇水の販路を支那に求めるなど、日本を利する事が少くなかつた。わけても日清戰爭當時は、彼氏の門下生から多くの翻譯者を出し、我國に多大なる貢獻を與へたことは何人もよく知る處である。

それは兎に角、此の海軍ヶ原は後に天下の兩敬事——兩宮敬次郎氏が、海軍省から拂下げを受けたので、其の土地を分割して貸したものである。

其の分與を受けたものに、現在尙は存する木挽町四丁目の新喜樂がある。こゝは前にも云つたや

うに、明治初期梁山伯のあつた處で、伊藤、井上などの連中が天下國家を論じてゐた處である。そして、それが明治中期以後には料亭新喜樂となり、矢張り彼氏等の根城として天下國家の政治の下相談が行はれてゐた處であるが、全く不思議な因縁を持つた處である。

拂下を受けた頃の雨敬は天下の絲平事——田中平八氏に次ぐ財界の巨頭で、其の評判は實に素晴らしいものがあつた。事實又彼氏が動かす處の財力も素晴らしく偉大なものがあつた。

其の財界切つての大御所である處の雨敬も、時には大失策をして炊事の炊木さへなかつた時代があつた。しかし、彼はそれにも屈託もせず、隣下の土藏のはかま板を剝いでそれを炊木とし、からうじて生命を繋いだと云ふ事だが、全く何人にも七轉び八起きの苦闘時代は免れないものだ。

殊に彼氏のマダムは男優りの女で、よく彼氏の事業を援け、天晴れ女丈夫としての活躍を完うしてゐる。少くとも彼氏が残した偉大な仕事の裏には、彼女の力が秘められてゐることを忘れてはならない。

木挽町方面の待合として一番古いのが、長谷川である。待合「長谷川」の先代主人公は某藩の藩士で、山縣公とは最も近い關係を有する人であつたから、明治時代には時の大官連が引切りなしに詰め掛けてゐた。そんな譯で長谷川は其の頃ひどく繁昌し、又とても有名な家でもあつた。

長谷川に次いで古い家は田村家である。田村家も亦、老舗だけに人氣もあり繁昌もした家であるが、其の客筋は長谷川と異り、主として財界方面の者が多かつたやうである。

明治初年汐留川に添ふた三十間堀の一廓を浴にハンペン河岸と稱してゐた。其の語原に就いては的確なことは解らないが、形がハンペンに似てゐること、土地が軟かくてぶわ／＼してゐたことから、其の名が生じたものらしい。

## 八 古着屋の丸竹と四ツ目屋

現在銀座西六目丁の一廓は、儘か山下町と山城町とに跨つてゐると思ふが、江戸時代、山下町の現在電車通りの處に何んでも御座れと云ふ便利調法な古着屋と、衛生器具屋で、有名な四ツ目屋とが軒を並べてゐたものだ。つまり古着屋「丸竹」が角店になり、其の隣りが四ツ目屋であつた。

此の古着の丸竹は、江戸から明治初期にかけてとても有名な家だつた。何故それ程有名であつたかと云ふに、それは此の丸竹が凡ゆる職業人が素裸で飛び込んでも、足先から頭のとつぺんに至るまで、すつかり間に合せると云ふ、至つて便利調法な店であつたからだ。つまりどんな商賣人でも亦、職業の人でも、其の商賣、其の職業にあてはまつた衣装をとり揃へてゐたのである。例へば

大工と云へば大工の服装、商人と云へば商人の服装、神官と云へば神官の服装、僧侶と云へば僧侶の服装と云つたやうに、其の職業にふさはしい古着が、こゝで一切間に合はされたのである。

で、此の丸竹は其の頃、とても評判になつたもので、此界限の人なら誰れ知らぬ者もないと云ふ程有名だつた。しかし、其の隣の四ツ目屋は、それ以上に有名なもので、此の種の商業としては、銀座に於ける元祖を爲すものであつた。

處が今日の考證家の多くは、銀座の四ツ目屋を認めてゐない。それは云ふまでもなく、文献に残されてゐないからだ。つまり兩國に二軒の四ツ目屋があり、其の一つが、薬研堀で、其の二が双葉町であつた。が、其の何れも老舗を誇り、元祖争ひまでなしてゐたものである。事實兩國の四ツ目屋は、江戸に於ける元祖を爲すもので、二軒共有名ではあつたが、薬研堀の方が元祖を爲すものであると云ふのが、今日の通説となつてゐる。

殊に此種の考證家で知られてゐる佐藤紅霞君なども、此の説を肯定してゐる。何れにするも江戸時代、四ツ目屋と云へば、とても顯著なもので、當時の川柳子など、さまざまと皮肉つたり、洒落たりしてゐる。

「小田原提灯四ツ目屋で××大旦那。」

かうした句は、殆ど際限なくある。それ程當時の四ツ目屋は、チャーナリスチックな存在でもあつたのだ。

では何故に、銀座の四ツ目屋が、文献に現はれてゐないのか。今日の考證家が否定するのも、蓋しそこに存するのであるが、しかし、事實、銀座の四ツ目屋は、安政年間頃に既に開業してゐる。そして、其の商標が、サイコロの四ツ目で、兩國に於けるが如く菱形の四ツ目ではなかつたが、しかし、假令サイコロにしても四ツ目には變りはなかつたのである。

此の點から見ても銀座の四ツ目屋は、インチキで、兩國の四ツ目屋を真似たものであることが推察出来る。そんな譯けで、銀座の四ツ目屋は、チャーナリズムに乗らなかつたものとも云ひ得られるであらう。が、兎に角、銀座の山城町に、四ツ目屋があつたことは明かな事實で、現に明治末期頃まで、華々しく營業を續けてゐたものだ。又其の後繼者が、今日横濱邊りで、他の商業を営んでゐることによつても、其の存在は明かに證明が出来る。

現在銀座に四ツ目屋なる衛生器具屋があるが、これは無論、明治時代に於ける四ツ目屋とは、全然異なるもので、極く最近に於ける開業で、佐藤氏の説によると、誰れかのお婆さんが、内職的にやつてゐるものと云ふことだが、何れにするも銀座八丁目の養生堂横町を這入つた處のカフェー

山形の露路中で、さゝやかに營業してゐる。

銀座の衛生器具屋の中で、變り種と云へば舊花月——現在メトロポリタンの露路の白水の主人公である。彼氏は、澁谷於寒と云ひ、峰岸義一君と共に、嘗つてシユーリアリズムの主唱者として、華々しくデビューした處の新進畫家である。彼氏は又、最近銀風莊と云ふ麻雀屋を附近に開業した。が、何れにしても其のマダムが、客受けのする人であるから、何れの店も相當賑つてゐる。

山下町の隣りに當る加賀町に、江戸時代からの古着屋として伊勢惣と云ふのがあつた。此の伊勢惣は、後ちに伊勢半と改稱され、丸屋町へ移轉してゐるが、銀座に於ける草分けの老舗である。

古着屋としての伊勢惣は、慥か嘉永年間頃の開業である。つまり初代半七氏は、其の頃芝刈助町にあつた伊勢惣の次男に生れ、伊勢鐵と云ふ古着屋に奉公し、年期の明くのを待つて獨立開業したものである。

元來本家の伊勢惣は、十二代も續いたと云ふ古着屋で、江戸に於ける草分けの店でもあつた。其の伊勢惣の暖簾を其の儘、銀座に於て使つてゐたのであるが、本家と混同する懼れがあるので、其の後伊勢半と改め、而かも、明治初期になると、二代目半七氏によつて、現在の丸屋町へ移つたものである。伊勢半のことに就いては書くべきことも多いので、何れ後日詳細を究めることにする。

### (九) 出世地藏と八官稻荷

明治初年銀座の縁日中で、一番賑つたのが、三十間堀の出世地藏の縁日だつた。全く此の縁日は、銀座は固より、東京に於ても、其の代表的なもので、人の出盛り時分には、身動きも出来ないと言ふ繁昌振りであつた。何故此の地藏さんが、それ程昌へたか。無論、信仰にも、流行すたりがあるもので、丁度其の頃大衆の信仰が、絶頂に達してゐたものであらう。そして、其の縁日は、七日、十八日、二十九日の三回で、現在尾張町の交叉點の處から、三原橋に向つて、多くの夜店が出たし、又三十間堀に添ふて、植木屋などが無數に並んでゐたものだつた。

此の地藏尊の起りに付いては、別にはつきりした文獻もないので、其の間の事情は解らないが、兎に角、江戸時代三十間堀に埋まつてゐた地藏尊の本體を發見したので、それを引きあげて、現在銀座四丁目の三好野の露路に安置し、祭祀したので、人は誰れ云ふとなく「出世地藏」と呼ぶやうになつたものである。

それから現在銀座八丁目の八官稻荷であるが、これは江戸時代五穀稻荷と稱してゐたものだが、明治初年に、加賀町稻荷と合併し、合祀され、其の名も八官稻荷と改稱されたものである。

加賀町稻荷は江戸時代、加賀町の名主であり、名望家でもあり、又資産家でもあつた田中平四郎氏の邸内にあつたもので、つまり田中家の守護神であつたのだが、人が代り、時代がうつり、明治の御代になると、流石に世襲的な田中家も、すつかり没落し、家代々に傳つて守護神としての加賀町稻荷の祭りも碌々出来ないと云ふ始末だつた。

そこで窮後の一策として、其の加賀町稻荷に絡る多くの額、其の他金銀の細工物、彫刻、例へば、紙太刀押繪額の如き、或は又、お宮の模型の如きもの一切を古道具屋へ競賣せんとしたのであつた。

處が、それ等の總てのものが、當時名ある人の奉納にかゝるものであつたから、其の形は小さく豆形のものであつても、しかし、其の中には得がたいものが少くなかつた。例へば額にしても、せいゝ一寸四方位ひではあるが、廣重、豊國、國芳と云つたやうな連中が奉納したものであつた。そして又、其の他の彫刻や、細工物も頗る懲つたものでもあり、又ひどく金のかゝつたものでもあつた。そして、其の奉納者は名ある俳優とか、火消達とかであつた。だからそれ等の一切を古道具屋に賣つたとしても、相當な額に達したであらうが、しかし、其の賣却に先立つて、一人の篤志家が現はれた。それは八官町の西澤と云ふ人で、其の頃、相當な資産家でもあつた。其の西澤氏が、

百圓の金を投げ出すと共に、一切の権利を譲り受け、それをそつくり其の儘、同町の五穀稻荷に納め、而かも、町内の有志達と圖り、加賀町稻荷をこゝに合祀することにしたのである。

つまり現在の八官稻荷がそれで、慥か震災前まで、西澤氏が奉納した小形の額、其の他の彫刻品並びに細工物が秘藏されてゐた譯けだ。が、しかし、何時の世でも、不心得な人間は盡きないもので、西澤氏が大金を投じて奉納した小形の額など、其の後、何時の間にか、一つ減り、二つ減りして、遂には其の大部分を荒したものだ。無論、其の加害者が誰れであるかは判明しないが、何に分にも手の平に乗せる程の懲つた額であるから、人眼を忍んで袂にほり込む位ひなことは誰れでもやり兼ねない悪戯である。

で、町内の有志達は、「これでは不可ない」とあつて、其の小さな額を大きな額の中に入れ、其の中に幾つかを飾つておくことにしたのである。つまり震災前まで、かう云ふ方法で飾られてゐたが、しかし、それも震災の爲めに、すつかり焼失して終つたので、今はたゞ語り草として残されてゐるに過ぎない。

## 第二 銀座が歡樂境になるまで

六〇

### 【一】 明治初年の銀座八丁 (A)

明治初年から其の末期にかけて銀座通りを一度り顧みると、さまざまなのが浮んで来る。假令飛びくにしる、それ等を思ひ出して見るのは、面白いことでもあり、又その變遷發達を知ることには、色々な意味で有力な参考ともなる。尤も、これは前にもしばしば試みたことであるから、多少重複した處があるが、兎に角、明治初年銀座通りに煉瓦が敷かれ、假令、それが間もなく凸凹になつたにしろ、これを煉瓦地と稱し、初めて通る大衆の氣持ちは、現在、華かな銀座の街を大股な足どりで縫つて通る大衆以上に、より強い誇りを感じたことであらう。

尤も、其の頃、表向き銀座と稱せられた部分は、尾張町までであつたが、しかし、其の當時から既に銀座八丁と稱し、街の構成は、現在の如く、不規律ながらも、八丁に區切られてゐたものだ。つまり尾張町一丁目、同二丁目、竹川町、出雲町と南金六町とが一町を爲し、そして、それに銀座四丁目を加へると、都合八丁になつたからである。尤も其の間に、尾張町新地と云ふのがあつて、

小さな町名を爲しては居たが、しかし、これは尾張町二丁目の部分に編入されてゐたので。要するに銀座通りは、八丁を爲してゐたことになるのである。

明治初年、銀座通りに、赤煉瓦の官營商家が建ち並ぶと、後ちに明治文壇の一廓を占めるに至つた戸川殘花氏が、眞先きに、銀座四丁目東仲通りの東側、二軒長屋の一棟を占領し精好屋と稱する質屋を始めたものである。

元來殘花氏は、本名を戸川安宅と云ひ、其の祖先は、小さいながらも旗本で、戸川幡摩守と稱し興力などを勤めてゐたものだ。その幡摩守が、時代の勢ひとは云へ、突然質屋のマスターとなつたのであるから、可成り面白いコントラストでもあつたに違いない。

質入人が股引や、腰巻などを持つて行くと『苦しうない、近かう持て』などとはまさか言はなかつたであらうが、しかし、少くとも質入人が、法外に、無理無態なことでも言つたとしたら『無禮であるぞ』位ひなおどし文句を並べたに違いない。

しかし、そんな譯けではあるまいが、此の精好屋は、文字の示すやうにセイコウせずして間もなく、第一回の終りを告げたのである。

銀座一丁目の、現在虎谷帽子店の處に、明治時代竹内と云ふ時計屋があつた。此の竹内時計

八官町の小林時計店と共に、明治初年銀座の時計屋として、とても人気のあつた店で『新橋雜記』の一節にも、銀座に於ける三大時計店の一つとして紹介してゐる。

わけでも明治二十年頃には、小林時計店の囑託して、スイツルに留學し、時計製造を實地見學しこれを會得して歸朝してゐる。だから時計製造に關する留學生としては、彼氏を以て日本に於ける嚆矢と云はねばならぬ。

銀座一丁目の時計屋と云へば、明治時代書の聖人として有名だつた中林梧竹が、其の末期頃、伊勢伊時計店の二階に詫び住ひをしてゐたことがある。

全く彼氏梧竹は書に付いては、天才以上の名人で、本場の支那へ行つても、彼氏の書だけは羽が生えて賣れたと云ふ程だつた。しかし、彼氏は、頗る變り者で、一生獨身で終つた許りか、九十幾歳の高齡に達しても、其の筆蹟が衰へず、息をひきとるまで書き續けてゐたものだ。

殊に、彼氏が、ひどく變り者であつたと云ふことは、經濟的に可なり困惑して居ながらも、貧乏人からは金をとらぬと云ふ藝術家肌の親爺さんでもあつた。

「君は、月給を幾らとつとるかね」  
書の注文者に、こんなことを訊くのだつた。

「五十圓ですよ、まだ薄給でしてね」

「うん、五十圓か、ちや、三圓にしておかう」

かう云ふ風に、注文者の月給に比例して、揮毫料を定めると云ふ變り者でもあつた。尤も個人經濟の眞理から云へば、これが普通かも知れないが、しかし、一般國民經濟から見ると、可なり變則なものであつた。

兎に角、其の頃、彼氏は、銀座に於ける一聖人として、インテリ階級から、ひどく尊敬もされ、又それと反對に輕蔑もされてゐたものだ。それは彼氏が、餘りにも變り者であつたからだ。

## 【二】 明治初年の銀座八丁 (B)

明治時代、銀座が完全な歡樂境でなかつたことは、前にもしばしば述べた處であるが、しかし、銀座をして間接に、歡樂境たらしめたものは、云ふまでもなく商業銀座の發展である。だから其の歡樂境の成り立ちを知る爲めには、少くとも銀座通りの發達状態を知ることが肝要である。で、尙ほ引續き、銀座八丁に散在する老舗を飛びくながら拾ひ集めて見ることにする。

銀座一丁目の表通りで、老舗に屬する店と云へば、先づ陶器専門の小柳商店であらう。同店は今



から百數十年前の開業で、現在の主人公は、丁度四代目である。尤も其の始めは、今の場所ではなくて、數寄屋橋附近で開業し、商業を営んでゐたのだつた。が、明治十六七年頃、先代主人公が、京橋勤工場と云ふのを引受け、九十勤工場と改稱し、獨力で、これを經營することになつたのである。そして、其の勤工場の一部を割いて、先祖傳來の陶器商を営んでゐたのだつた。

小柳商店が、積極的に潑刺として、營業を擴張し、華々しくやつてゐたのは、何んと云つても其の頃のことであつた。と云ふのは、陶器類を運搬するに地の利を得てゐた三十間堀には、廣大な卸部があり、銀座の勤工場は、其の小賣部に過ぎなかつたのである。

何れにするも、小柳商店は、今尙ほ九十の商標を川ひ、先祖傳來の陶器商を営んで居るので、無論、銀座に於ける草分けの商店でもある。

銀座一丁目で老舗と云へば、小柳商店の並びであり、而かも、二丁目寄りの處にある敷物屋の陸屋商店である。殊に、同店の主人公富澤半四郎氏は、銀座に於ける成功傳中の一人で、現在、銀座の商人として、其の重きをなし、現に多額納稅者として、幾多の名譽職にも推舉されてゐる。

彼氏は明治五年五月五日、宮城縣伊具郡角田町に生れたが、不幸にして家が貧しかつた爲めに、十四歳の時、自ら進んで石巻町の砂糖と絲問屋をやつてゐる家に、小僧として奉公することになつ

た。そして、約四年間、實直に勤めたのであつたが、しかし、獨立自尊の念に強い彼氏は、到底其の儘片田舎に燻つてゐることが出來ず、十八歳の時、十圓五十四錢の金を懐中にして呆然として上京したのであつた。

つまり彼氏が、上京したのは明治二十二年のことであつたが、東京では奉公口も思ふに任せなかつたので、彼氏は、其の足で横濱に行き、其の頃、野口商店と云ふ家具裝飾店へ、早速奉公することになつた。此の野口商店は、後ちに陸屋商店の支店となつたのである。

兎に角、富澤氏は、野口商店に奉公すると、間もなく附近の英學塾に通ひ、語學を専心に勉強し而かも、晝夜力行して主家の爲めに大ひに盡したものであつた。處が明治二十六年になると、横濱に大火があり、野口商店も亦、其の禍ひに遭ひ、全く灰燼に歸したので、彼氏は、これが復興の爲め、専念努力を續け、完全に主家を復興せしめたが、其の間苦闘十年に及んでゐる。

又彼氏は、一方主家の爲めに盡すと同時に、他の一方に於ては、他日獨立自營を爲す場合にと、出來る限り質素儉約を爲し、前後十年に涉り、一千圓程の蓄積をしてゐたものである。丁度其の頃銀座の陸屋が、多額の負債の爲めに整理挽回せねばならない悲運にあつたので、當主は、富澤氏の人と爲りに惣れ込み、彼氏の入店を懇望することが切であつた。で、彼氏は、遂に主家を辭し、陸

屋商店の支配人として入店することになった。

其の頃、彼氏の月給は、僅かに十五圓であつたので、木挽町一丁目に、月三圓五十錢のさゝやかな借家住ひを爲し、陸屋の爲めに刻苦奮闘を續けたものだつた。そんな譯けで、無論彼氏の貯金一千圓も陸屋の爲めに出資し、ひとへに店運の旺んなることを祈つてゐたのであつたが、何に分にも十六萬圓と云ふ多額の負債があつたので、其の整理挽回は容易なことではなかつた。しかし、それにも拘らず彼氏が、其の多額の負債を引受けてから、僅か五年間の中に、其の全部を完済し終つたと云ふのであるから、彼氏の偉大な努力の程を知ることが出来るであらう。殊に、それからと云ふものは、陸屋の發展は素晴らしいものがあり、現在では、敷物商店としては全日本に於ても有数の存在で、其の一二を争ふものでもある。

元來、此の陸屋商店は、明治八年の創業で、前主人公の喜多村氏が、二三の同志と共に、現在の場所、敷物を専門に販賣して居たものであつたが、商運つたなくして、多額の負債をつくり、廢業の息むなきまでにたち至つてゐたものである。

尙ほ二丁目には、越後屋呉服店があり、こゝは維新當時の開業であるが、今は廢業しビルのを所有してゐる。

更らに三丁目の丸八一即ち松澤八右衛門商店は、江戸時代からの店である。が、しかし、これ等は、既に述べた處であるから省略する。

### 【三】 明治初年の銀座八丁 (C)

銀座五丁目、即ち舊尾張町から新橋までの間にも、可なり有名な店もあり、又老舗としての店も少なくない。が、しかし、其の中でも特に有名なものとしては、キリンビヤホールの隣りになつてゐる佐野屋足袋店である。こゝは随か明治初年からの店で、つい此の間まであつた、銀座二丁目の越後屋ビルの隣りで、足袋屋をやつてゐた惠老屋と共に、銀座に於ける草分の店だと思ふが、しかし、それよりも佐野屋足袋店が有名だつたのは、明治から大正にかけて、特殊な足袋を製作してゐたことだ。

つまり九文一分、十文二分、十一文四分と云つたやうに、注文した人の足に、寸分間違ひのないものをつくつてゐたからだ。無論、其の製作法も、他の足袋店と異なり、念に念を入れたもので、上流向の愛用品としては、屈竟なものであつた。だから従つて、贅澤の極みを盡くしてゐた所謂、煉瓦地藝妓達には、ひどく喜ばれてゐたものだ。

其の隣りの鳩居堂、二軒おいて、大黒屋食料品店。それから六丁目の菊水と云ふ煙草屋。七丁目の亀屋食料品店、そば屋の長壽庵など、數え出したら可なりになる。が、しかし其の中でも龜屋は、食料品店として、銀座は固より、全國に於て、其の元祖を爲すもので、明治三年三月、築地小田原町に於て開業されたものである。

この先代主人公、松本鶴五郎氏に付いては書くべきことも多いので、孰れ何かの機会に、詳細を書くことにするが、兎に角彼氏も銀座に於ける成功傳中の一人であつて、開業當時には、可なり烈しい苦難と戦ひ、孤軍奮闘をした人である。殊に、開店日ならずして明治五年二月二十六日、俗に云ふ藁屋火事―つまり銀座の大火の餘波を受け、家屋其の他一切を烏有に歸した上に、其の復興を焦つた結果、千餘圓の詐欺にかゝり殆ど死地に陥ち入つたこともあつたが、しかし、それにも拘らず奮闘努力を続け、完全に復興せしめた許りか、明治十年十二月には、多年の宿望であつた銀座通りに進出し、而かも、それと同時に、營業を擴張し、面目を一新したものである。

現在の主人公、二代目鶴五郎氏は、子飼ひからの使用人で初代鶴五郎氏に見出され、懇望されて養子となつた人で、これ又初代鶴五郎氏に劣らない奮闘努力家である。

八丁目では、資生堂の福原氏。菓子屋の青柳、頑固屋の大徳、果物屋の千疋屋等は、皆それ／＼

異つた意味での元祖でもあり、老舗でもある。

千疋屋は、銀座に於ける一つの名物で、果物屋としての權威を爲すものである。殊にこゝは、明治初年後に於ける開業で、先代主人公は、其の始藝妓の箱屋をやつてゐた人であるが、中年後に感ずる處があつて、突然現在の場所へ、さゝやかな果物商を始めたのが、そも／＼千疋屋果物商の起りである。しかし、其の後二代目の主人公が、ひどく頭腦がよいので、さまざまな商術を用ゐた爲めに、殆どとん／＼拍子の勢ひで商運が開けると共に、彼氏は、益々發展の翼を擴げ今日に及んだものだが、全く僅々三四十年間に、銀座は固より日本橋、新宿と、大東京のメインストリートたる場所には、其の支店を有し、而かも、千疋屋の名は、殆んど日本的に知られるやうになつたのである。東側としては、弗入屋のオリヤマ商店、西洋食器の十一屋、汁粉屋の若松、此の三軒は、何れも明治中期頃の開店であり、而かも、何れも成功した一つ／＼である。

それから六丁目では、今はないが時計屋の天賞堂、七丁目では半襟屋のゑり治、信盛堂洋品店、八丁目では回漕店の宇都宮、電友社など、それ／＼特異な立場に於て、其の老舗を誇るものである。

それから家具裝飾の今井商店であるが、家具裝飾店としては、矢張り二十年頃の開業である、しかし、今井氏は、それより以前―慥か、明治十五六年頃だと思ふに、現在小松食堂のある處に「金

花』と云ふ料亭をやつてゐたものである。そして、其の権利を小松食堂に譲渡すると、直ちに家具裝飾店に早替りしたものである。無論、現在は二代目である。

七〇

#### 【四】 明治初年の新橋界限

維新前後に於ける新橋界限は、殊に濼瀾とした繁昌さを持つ場所で、新橋界限の現在銀行のある處には、江戸時代から松坂屋呉服店があり、可なり昌へてゐたものだ。尤もそれ以前には、新橋際に、芝口御門があり、芝口としての咽喉部でもあつたのだ。しかし、此の新橋御門は、享保九年二月二十九日の火災で焼失してから再建されなかつた。

何れにするも、明治二年の大火によつて、銀座の一廓は固より、新橋木挽町方面にかけ、可なり廣範圍になめ盡されたので、無論、松坂屋も其の時全焼して終つたものである。

元來此の火事は、暮れも差し迫つた大晦日近くのことゝて各自餅をつき、門松を立て、新しい春を迎へやうとしてゐる時だつたのだ。だから其の翌朝焼跡を廻つて見ると、どこにも、こゝにも澤山な餅が、ふつくり焼けてゐると云ふ始末だつた、全くルンペンの大當りで、食つても食つても食ひ切れない程大きな、次から次にと、だいたく餅がふくよかに太り、心持ちよく焼けてゐるのだ。

つた。それも其の筈。其の火事の火元と云ふのが、餅をついた後の藁始末が、そゝうだつた爲めに其の藁へ炊火が燃え移つたことにあるのだ。そして、其の火元を起した場所は、數寄屋橋際であつたのだ。

それは兎に角、松坂屋は、この火事を境として廢業して終つた。松坂屋の跡に出來たのが、鯉屋の井の口屋であつた。此の井の口屋は、其の以前、竹川町の東側の處にゐたもので銀座に於ける食料品屋としては、銀座五丁目（尾張町一丁目）の大黒屋と共に、其の老舗を爲すものであつた。しかし、大黒屋は、其の始め卯屋であつたから「卯屋」と云つてゐたものだ。

松坂屋の番頭の息子で、明治時代、とても人氣を博してゐた落語家の馬樂があつた。馬樂は、たゞに落語が名人だつた許りでなく、人間的にも超然たる處があり、浮世を茶に濁し恰も仙人的な感さへ抱かせたものだつた。つまり落語家の聖人とも云ふべき男で、形式的な服装など少しも、構はないと云ふ愛すべき男であつた。尤も晩年には、多少精神に異狀を呈してゐたのも事實である。

今日の蝶花樓馬樂とは、どう云ふ關係があるか、僕には解らないが、しかし、今日の馬樂は、落語家としては稀れに見るインテリ的な男でもあり、ひどく頭のよい彼でもあつて、僕達には、とても好感の持てる男だ。落語にしても、モダンさがあつて、その癖、澁ぶ味があつて、全く現代人に

は、打つてつけの落語家である。

殊に、彼を愛する所以は、彼の熱心さである。如何なる場合でも、勢一杯の努力を惜まないことだ。全く新らしい企てには、物質的な犠牲をも顧みないで、努力奮闘してゐることだ。それに又、藝人には珍らしく、義理固い男で、同時に又、江戸ッ兒らしい淡泊な男でもある。

玉木屋と深川飯屋の経緯其の他のことは、既に述べた處であるから省略するのが、其の筋向ひにある萩の餅屋。こゝも随分古い店で、無論、煉瓦地時代からの家である。

さうだ。井の口屋に付いて尙ほ一言しておかねばならないのは、こゝの長男、加藤半七と云ふ人が、明治中期頃、新橋下駄を發明し、これを賣り出した處が、忽ち新橋藝妓達の愛用する處となり一時素敵に流行したことである。だから其の名も新橋下駄と稱し、今日尙ほ存する處である。

此の新橋下駄と云ふのは、普通の薩摩下駄に對し、前だけ日和下駄の形態を爲してゐるもので、つまり薩摩下駄の變形を爲すものである。が、しかし、其の頃、ちよつとしたことにも、ひどく好奇心を持つ時代だったので一時大した人氣で賣れたものだ。殊に、粹な新橋藝妓達が、此の變形的な下駄をはき、お尻を微妙に振りく、凸凹ながらも摩登な煉瓦地を調歩するさまは、ちよつと粹なものでもあつた。

### 【五】 蕪陶小學校の廢校

明治中期頃まで、竹川町の裏通りに、私立蕪陶小學校と云ふのがあつた。が、既に、其の頃は、ひどく荒れ果てゝみすぶらしい校舎が、だらしくゆがんでも居た。しかし、それでも學校の少ない當時としては、相當生徒も居たことがある。尤も此の小學校は、私立小學校の嚆矢を爲すもので、而かも、明治五年の大火後、間もなく新築されたもので、其の頃からあつた私立の小學校としては、先づ立派な部類に屬するものであつたが、しかし、其の後、別に大した改築もせず、殆ど自然の儘に放任されてゐた爲め、明治中期頃になると、全くみすぶらしい校舎で、生徒もだんぐりに少なくなつて行つた。

殊に、その頃、突然校主が變つたりしたので、同校は益々衰微し、廢校の止なきに至つた。

しかし、其の衰微の原因は、校舎がみすぶらしいと云ふことではなくて、寧ろそれ以外に、もつと大きな衰微の原因があつた。と云ふのは、其の頃新橋藝妓が著しく發展し、時の高位高官を始め財界の大立物を手玉にとるの武器でもあつたから、其の志望者が無教育であつてはならぬとあつて採用資格の中に、必ず小學校卒業證書を有するものと云ふ條件がつけ加へられたのである。

處が、其の頃として、藝妓をさせやうと云ふ家庭では、小學校など卒業させてゐないのが常だつた。だから自然、非常手段に訴へねばならない。つまりどうしても煉瓦地藝妓にさせやうとするには、超スピード的に、卒業證書を得ねばならない、そこで少々曖昧な小學校に渡りをつける。それは今日インチキ中學校に見受けられるやうに、眼にてい字もない少女をして、他から轉校させたやうに帳面づらを胡摩化し、形式的に卒業試験をさせる。無論、其の答案が、家鴨が田を踏んだやうな奇々怪々な不可思議な反古であらうとも、先生の胸三寸で優等にもなれば、お情け的な卒業にもなるのである。

しかし、それも最初の中だけで、先生の頭が、だんぐとづるくなつて行くと、そんな形式的なしち面倒臭いことは、眞つ平らと許り、いきなり卒業證書の上に、墨黒々と彼女の名が、書かれるやうになつたものだ。しかし、こんな不徳なことが何時までも解らずにはゐなかつた。

「あんたどこの小學校卒業したの」

「薰陶小學校なの」

「何時頃なの」

「矢張り十二の時よ」

「あら、随分、變んなのね」

「だつて卒業證書持つてよ」

「それにしても、あたしと一緒にならないなんて怪しいぢやないの」

かう云ふ風にだんぐと暴露されて來たので、薰陶小學校の人氣は全く地に落ちた。かて、加へて其の頃、突如として不淨な出來事が突發した。それは當時、薰陶小學校の小便所が、不潔だつた許りでなく、大きな瓶がいけられ、其の前に一本の丸太が横たへてあるだけで、つまり其の丸太によつて子供が落ちないやうにしてあつたのだが、生憎一人の兒童が小便をしやうとしてゐる時、修業時間の鐘がけたましく鳴らされた。

で、其の兒童は、ひどく狼狽したものらしいが、果してどう云ふ風に狼狽したものか、誰れも目撃した者がゐなかつたので、其の間の事情は解らないが、兎に角、一時間の修業時間が終へて出て見ると一人の兒童が、小便瓶の中へ、逆さに落ち即死を遂げて居るのであつた。だから先生達が、蒼くなつて早速引きあげ介抱して見たが、一時間も小便漬けになつてゐたものが、どうして助かる筈があらう。

で、當時、教育上雄々しい問題として騒がれたものだつた。だから其の後、校主に變動があつた

が、遂に挽回の策なく明治中期後、醜い最後を跡し、とう／＼癡校して終つたものである。  
しかし、此の薫陶小學校を卒業した者で、今日素晴しく成功してゐる人達は、決して二三に過ぎない。

七六

### 〔六〕八官町の變り者

明治初期頃、八官町の小林時計店の横町―其の頃此の横町を甘酒横町と云つてゐたが、其の横町に頗る變り者の細工師がゐた。號を『はし一』と云ひ、江戸時代からの細工師で、可なり有名な存在であつた。何故彼が有名であつたか。それは云ふまでもなく、彼の技術がとでもデリケートで、巧妙さを極めてゐる上に、水際立つてすつきりしてゐたからだ。

本當に彼の造る處の細工物は、何人も眞似の出来ない藝術的な品々であつた。殊に、彼はし一の最も得意とする處の漆塗細工や、竹細工の如きはそれ自身が貴き藝術品で、他の追従を許さないものがあつた。

それに彼が、今一つ有名になつた原因は、彼の性格が純然たる藝術家としての存在で、普通人から見たら、ひどく狂人染みた處が多分に含まれてゐたからだ。とりわけ彼は、氣に向かない場合は

どんなにぼろい金儲けでも決して鑿をとらうとしなかつたことだ。

總てがこんな風であつたから、彼は絶えず經濟的に、打撃を受け、ひどく苦められてゐたものだ。しかし、それでゐて彼は律義な男で、江戸ツ兒式な義理固さを持ち合せてゐたので、面と向つて斷りも出來ず、借金とり退治の爲めに假病などを使ひ、床に就いたりしてゐたものだつた。

又彼は不時の用意として、金の煙筒などを造り、それに漆を塗つて竹筒の中に入れ、債權者の眼をくらまして持つてゐたりしたものだ。つまりいざと云ふ場合に、其の漆をはいで金に替へやうと云ふ策戦だつたのである。

それ程、彼は一面氣の小さな、用意周到な男でもあつた。しかし、其の反面には又、藝術家らしい凝り性を持つてゐたので、どんなに責められても、自己の趣味を満たす爲めには超然として、時間的にも、經濟的にも犠牲を拂つてゐた。例へば、小さな庭などを造り、人知れず満足してゐた如きである。明治初年、はし一の名は、とても有名だつた爲めに、彼の藝術を慕つて集る者は、決して少なくなかつた。だから、彼の弟子も其の頃可なり数になつてゐた。そして、それ等の弟子達が、追々と一人前の細工師になつて、彼の家を出て獨立するやうになると、何時の間にか、偽せの『はし一』なるものが處所に現はれ出した。

七七

つまりはし一は、自分の細工物に對し、必ず「はし一」と云ふ銘を打つてゐたのであるが、其のはし一の銘が、幾つも出来、而かも、それ等の寸法が、各々違つてゐると云ふ始末だつた。云ふまでもなく弟子達に濫用されたのである。

かうしてはし一は、弟子達の爲めに信用を落し、遂に銀座にもゐることが出来ず、何れへともなく行つて終つたのである。

明治初年、はし一の附近に、溝のある角の處に、菓子屋の青柳があつた。つまり今日、新橋際にある青柳の先祖がそれである。無論、青柳は其の頃からの店で、矢張り今日と同じやうに、きんつば並びにせんべい其の他の菓子を商つてゐたものだ。青柳が現在の場所へ引越して行つたのは、儘か明治中期頃で、而かも、青柳が異想外に繁昌したのも、それからのことである。

殊に、青柳が、大當りをしたのは、きんつばだ。青柳のきんつばと云へば、恰も銀座名物の如くに考へられた時代があつた。それは特に朝賣りの特賣其の他の宣傳戰術が宜ろしきを得た許りでなく、實質的に價值のある物を安直に賣り出したことが、青柳をして有名ならしめたものである。

それから又、現在小林時計店の隣りの阿波屋下駄店。こゝも矢張り明治初年からの店で、明治から大正へかけての藝妓萬能時代にはおびたゞしく繁昌したものである。とりわけ阿波屋型なる型ま

で産み、現在では銀座に於ける下駄屋の老舗として落ちつき拂つてゐる。こゝの得意の主なるものは、無論花柳界方面である。

### 【七】 新橋板新道と金春大工

明治時代、板新道と、信樂横町とは煉瓦地藝妓に離るべからざる關係を持つてゐたものである。それは無論、其の露路が、殆ど軒を並べて、藝妓家で粹な横町であつたからだ。しかし、單に板新道と云へば聞えがよいが、其の實、板新道は略語で、嚴格に云ふと、溝板新道と云ふのであるから其の實質に至つては、誠に醜い横町であつたのだ。

所が、其の板新道の附近には、維新前後、可なり有名な人が住んでゐた場所で、其の最も顯著なのが、明治の傑物、星亨氏である。彼氏は、其の頃、金春屋敷と云はれた處に住んでゐたもので、彼氏の母堂など、輕々しく買ひ物などに、よく出かけてゐたと云ふことだ。

尤も其の頃は、藝妓屋の數も少く、又裏通りなど店舗を構へた商店など、殆どなかつた位であるから、従つて閑靜なことは、今日山の手方面の住宅地に見るやうなそれではあつたが、しかし、其の頃から溝の多い所であつたのは争はれない事實だ。



又金春屋敷跡には、有名な金春大工なるものがゐた。今春大工は、今日で云へば、キャンク的な存在で、不良大工の集團でもあつたのだ。

殊に、彼等は、花柳界方面にひどく巾を利かせ、藝妓を利用する點に於ては、今日に見るカフェー對不良青年に於ける寸法だつた。

尤も、其の頃の彼等の手段は、頗る公然なるもので、例へば夏場など、彼等が道傍に夜涼みなどしてゐる所を過つて、挨拶せずに通つたが最後、

「かう、待ちねえ、えゝ姐さんだよ、ごう勢なもんだッ」

かう云ふ風に云つたかと思ふと、小竹の先に泥を附けて、藝妓の着物へ、情容赦なくぶつかけると云ふ始末だつた。しかし、乱暴狼籍は、決してこれだけではなかつた。

これが一つの動機となり、幾多の難題が、次々とやつて來るので、藝妓の方でも捨ておけず、早速仲裁人を入れて、酒肴を持つて謝罪に行くと云ふ有様だつた。全く泥棒に追ひ錢とは此のことである。

殊に話がつれ、問題が大きくなつて行くと、棟領の宇之吉が出て來て、双方の仲裁をすると云ふことになるのだが、しかし、其の棟領たるや、決して藝妓の味方をする彼氏ではなかつたのだ。

だからどつちみち煉瓦地藝妓達には、眼の上のコブだ。酒席に侍つては高位高官も手玉にとる程の彼女達ではあつたが、しかし、今春大工だけには一目も二目もおかねばならない程、大の苦手だつたのだ。

其の中でも一番藝妓達にとつて堪らなかつたのは、年中行事としての五月五日の端午の節句の日であつた。と云ふのは、其の日は、彼等今春大工と、仕事師とが集り、梵天と稱して、品川へ垢離をとりに出かけ歸へると、仕事師の一團は、料亭の伊勢勘へ、金春大工は、金春湯の二階へと、それ／＼に引あげると、金春藝妓を総揚げしての大散財をすることになつてゐたからだ。

無論そんな手合の相手であるから、玉祝儀など、びた一文もとれる譯けではなし、彼女達が云ふやうに、全くの役座敷で、無報酬の奉仕だつたのだ。それも二度の勤めで、最初は先づ仕事師の集合してゐる伊勢勘の方に行き、その勤めが済むと、此度はそれ以上に苦手な金春大工の集合してゐる金春湯の方へ馳せ参じ、心からなるサービスをせねばならなかつたのだ。

で、若しもおつき合ひだと云ふやうな氣色を見せたり、いゝ加減に切りあげて歸らうものなら、二階から晴れの衣装に酒をぶつかけた上、後日の文句の材料を與へることになるのであるから、彼女達は、どんなに苦しくとも、彼等が満足するまで、誠心誠意のサービスをせねばならなかつたの

だ。これが金春藝妓の一年一日の厄日だったのである。

### 【八】 土橋際と丸屋町界隈

現在銀座西八丁目、舊土橋寄りの一廓は、明治時代丸屋町と稱し、極く小さな町を形成してゐたものだ。尤も此の邊には、當時、小さな町が幾つも併立してゐた。例へば丸屋町の筋向ふに八官町があり、其の横が山王町であつたやうに、何れも家数にして、せい／＼四五十軒止まりの町であつた。殊に、其の中でも丸屋町と山王町は、極めて小さく粗密な地圖など、其の町名さへも乗らない程であつた。

それは兎に角、此の界隈で、最も長い歴史を持つ家と云へば、無論、小林時計店を先づ第一に指折らねばならない。そして、其の次には、丸屋町の伊勢半。こゝは前にも一言したやうに、江戸時代には、加賀町に古着屋をやつてゐたのだが、明治初年、先代半七氏が少年の頃、現在の場所に引越し、而かも、古着屋を捨て、呉服屋となつたものである。

先代の伊勢半の主人公半七氏は、其の二代目で、元治元年の生れ、一昨年七十一歳の高齢だったが、頗る元氣でまだ壯年の僂影が多分に残つてゐた。しかし、突如として昨年他界された。

全く彼氏は、どう見ても七十一とは見えない若さでもあり、元氣さでもあつた。そして又、ひどく親み易い社交的な人で、江戸ッ兒らしい淡泊さと、律義さを持つた義理固い人でもあつた。とりわけ書が上手で、とても達筆でもあり殊に、其の筆跡は、壯年者の揮毫の如く、潑瀾とした勢ひがあつたものだ。

何れにするも彼氏は、極く若い時分から、主として煉瓦地藝妓を相手に、呉服商を営んで來たもので、此の方面に於ては、銀座に於ける元祖を爲すものである。殊に、今日では其の息子達が、赤坂の花柳界を始めとし、横濱にまで手を擴げ、花柳界専門に極く特殊な物品のみを販賣してゐる。つまりどこにでもあり觸れた物の販賣ではなくて、百貨店にも絶対にないと云ふ物のみを考案して、それを専賣してゐるのである。が、とりわけ長男某君の如きは、先天的に發明的な才能を有し既に多くのものを發明してゐる。だから此の點に於ても、銀座に於ける特殊な存在の一つと云ふことが出来る。

明治末期頃、八官町と丸屋町との境の處に「八官町吾樂陳列場」と云ふのがあつた。無論、これは會員組織のもので、當時、美術家團體の作品を陳列してゐたもので、今日其の道の大家と稱せられる者の総てがこゝの會員であつた。だから此の吾樂陳列場は、形式上では、美術家團體のものに

は違ひがなかつたが、しかし、其の實質は、小林時計店の三代目善次郎氏が趣味の下に建設したものであるから、結局小林氏の吾樂陳列場であり、同時に、彼氏の道樂の一つとも見ることが出来る殊に、其の建築は、古宇田實氏の設計になるもので、頗る凝つた支那風の建築様式だつた。が、しかし、それも大正十二年の大震災で跡方もなくなつて終つた。

少し話が前後するが、明治初年、山下町に大谷洋服店と云ふのがあつた。此の洋服店は銀座に於て、その嚆矢を爲すものでもあり、同時に又、その權威でもあつた。主人公を大谷金次郎と云ひ、當時彼氏の手によつて、専ら高位高官の禮服が調製されてゐたものだ。

だから其の頃の大谷洋服店は、とても大した評判で、其の表には常に大禮服を着た大官の模型が看板として出されてゐたものだつた。で、その頃の大衆達は其の模型を見て、大禮服の何んたるかを知る者が少くなかつたものだ。

大谷洋服店と、殆ど前後して出来たものに、大民洋服店と云ふのがあつたが、しかし、これは無論、大谷洋服店の如く權威を爲すものではなかつた。何れにするも、明治初年頃は、勿論、其の中期頃になつても洋服店は、其の多くが山下町界隈に集つてゐたもので今日の如く表には、殆ど見受けられなかつたものである。

## 第三 江戸から明治への歡樂境銀座

### 【一】 歡樂境銀座への第一歩 (A)

現在の銀座は、完全な歡樂境である。だがしかし、それは大正初期以後のことで、それ以前の銀座は、決して完全無缺な歡樂境ではなかつた。少くとも特殊な階級の遊び場所ではあつたが、大衆の遊び場所でなかつたことは、前にもしばしば述べた處である。殊に銀座が、明治初期に於て輸入發明品普及宣傳の場所として、華々しくスタートを切つたことは、とりも直さず大商業銀座のデビューでもあつた。だから當時の銀座は、當然商業經濟場所としての存在で、歡樂境建設を目的とするものではなかつた。たゞ商業銀座が殊の外華々しく發展した爲めに、其の發展の餘波として歡樂境銀座が、徐々に擡頭し、發展して行つたものである。

しかし、これは一面に於ける觀察で、銀座が歡樂境たらんとしてゐたことは、既に江戸時代に於て其の兆を示しつゝあつた。其の最も顯著なものが船宿の存在で、銀座界隈に於けるものだけでも江戸時代十四隻に達してゐる。殊に維新前後には、それが二隻増加し、十六隻を數へられてゐる。

銀座に於ける船宿の由来に付いては、的確な文獻がないので、はつきりした年代は解らないが、少くとも汐留川に高尾丸が存在し、仙臺伊達綱宗侯がこれに乗つて、吉原へ通つた事實が残つてゐる以上、既に、其の頃から三十間堀乃至汐留川には幾隻かの屋形船があり船宿があつたことは争ばれない事實だ。

尤も此の高尾丸は、芝口新町に住む吉兵衛と稱するものが仙臺侯から預つてゐたもので、無論、一般人の遊山に使用したものではなかつた。

つまり高尾丸は、仙臺侯の所有で仙臺侯の獨專する船だつたのだ。だから仙臺侯が使用しない以上、此の船は用をなさないのもであつた。

兎に角、伊達綱宗侯と三浦屋の高尾とは、頗る悪縁つきざる仲で、何れにするも二人は決して幸福なるものではなかつた。何故なら、綱宗侯は彼女との悪縁の爲めに、二十歳をちよつと過ぎた許りで隠居を命ぜられ、捨て扶知を貰つてちつきよしてゐなければならなかつたし、又一方高尾にしても金華高樓に住ひ、贅澤三昧に身を送つたとは云へ、意に添はない人と同棲してゐたことは、決して幸福とは云へなかつたであらう。

殊に、雄山侯と彼女との合作になる屏風の句を見ても、其の間の消息を雄辯に物語るものがある

〽猪と抱かれて寝たか萩の花

これが彼女の詠んだ句である。全く思ひ切つた捨獨白でもある。しかし、又一面高尾が斯くも有名になつたことは、無論、綱宗侯が彼女に溺愛し、無鐵砲なさまぐな行動をしたことにある。だから此の意味に於ては、彼女も亦、綱宗侯に感謝せねばならない。

何れにするも銀座をして歡樂境たらしめんとしたものゝ一つは、遊船宿の發達であり、而かも、それは他の何よりも一番早く、其の魁をしたことは事實として存する處である。

今江戸時代に於ける屋形船と、船宿とを列擧すると、凡そ次の如きものがある。

▽高尾	丸(汐留川新橋土橋間)芝口新町	吉兵衛
▽息酒	丸(同上)	彌右衛門
▽竹川	丸(同上)	市左衛門
▽金山	丸(同上)	七兵衛
▽湊	丸(同上)	吉右衛門
▽延喜	丸(三十間堀)	尾張町 甚兵衛
▽林	丸(三十間堀)	木挽町 源兵衛
▽御羅	丸(汐留橋近傍)	木挽町七丁目 佐右衛門
▽吉川	丸(同上)	同町 六兵衛
▽兵庫	丸(同上)	同町 長九郎

▽宮	一丸	(同上)	同町	吉左衛門
▽宮	本丸	(同上)	同町	庄左衛門
▽出	世丸	(同上)	同町	仁右衛門
▽本	一丸	(同上)	同町	長兵衛

江戸時代、屋形船は全市に涉り其の数が、特に百隻と限られてゐたし、又一軒一隻と云ふ制度であつたから、容易にこれが増加を許されなかつたものだ。全市に涉り屋形船が一番多かつたのは、銀座と、神田川で、神田川には十五隻からあつた。

處が世の中がだんだんと、世ち辛くなり、せつがちが多くなつて行くと、装置よりも足の早い猪牙船が讚美されるやうになり、殊に維新近くになると、屋形船よりも猪牙船が、斷然多くなり勢力があつたものだ。

【二】 歡樂境銀座への第一歩(B)

遊船宿の發達は歡樂境銀座への第一歩には違ひないが、しかし、其の始めは船こそ銀座にあつても、銀座自體が歡樂境としてではなく、寧ろ他に目的があり、其の目的地に遠出すべくたゞ運輸の機關としてのそれであつたのだ。例へば吉原へ遠出すべく又は本所深川の五遊里に遠征すべく、こ

ゝから景氣をつけて乗り出す武器であつたのだ。

だから嚴格な意味に於ては、假令銀座界隈に、船宿が發達しやうと、銀座其のものにとつては、別に直接な影響はなかつた譯けだ。と云ふのは銀座の土地からサービス嬢を連れ出した譯けでもなければ又、船宿の二階でどんちやん騒ぎをやるのが目的ではなく、他に遠征して目差す場所で散財しやうと云ふのであつたからだ。

つまり早くいへば、今日のガレーチのやうなもので、單に遊船客の需要に應じ、運輸の目的を果すことにあつたのだ。尤も遊山船であるから、船中へ酒肴を運び、こゝでも散財し得られたのは云ふまでもないが、しかし、其のサービスガールは深川邊りへ着けて、新たに藝妓を呼び出し、それから本格的に騒いだものではなからうか。

尤も藝妓が既に存在してゐた場所にあつては、船宿から藝妓も招べたやうであるが、銀座の如く藝妓を持たない處にあつては、以上のやうな方法であつたことは、想像するに難くはない。全く藝妓を持たない船宿の存在は變形的なもので、歡樂境としての要素を全然欠いてゐる。

かう云ふ風に、假令、變形的なものにしろ船宿が發達したことは、當然サービスガールの需要が起り、これが供給を促進せしめたことはいふまでもない。否、それが變態であればある程その需要

は最も熾烈である。で、結局神田川には、柳橋藝妓を産み、銀座界限にあつては新橋藝妓を産むの機会を造つた譯けである。

九〇

土地に藝妓が出来てからの屋形船は、恰も今日に見る待合ひの延長の如きもので、船中へ酒肴を運びしん猫といふ粹な寸法で、だんぐと深みへ這入つて行つたものだ。全く當時の川柳子がいつたやうに、「船宿の女房、深みへついと突き」で、馴染の藝妓と船で出るやうになると、恰も船がだんぐと深みに向つてゆくやうに、二人の仲は切つて切れぬ仲になつたものだ。

そして又、歸つて來ると此度は船宿の二階でおだを揚げることになつてゐたものだ。だからかうなると今日の待合と寸分間違ひのないものではあつたが、しかし、當時に於ける屋形船の遠出は、水轉のお客では出来ない藝當だつた。つまり或る意味での二次會であつたからだ。

尤も昔の船宿は、其の構造が略ぼ一定され、間口が二間半で奥行きが九尺内外で、而かも、二階が普通二間と限られてゐたと云ふこと。そして、猪牙船の船賃は、一日が三分二朱で、船頭の祝儀が二朱で、辨當が一朱と相場が定つてゐたといふことだ。尤もこれは維新前のことである。又猪牙船は、單に客の送り迎へをする用具として使用されたものだ。此の場合には多くは宿の主人などが幫間として乗り込み、圍碁や、將棋の相手などをしてゐたものだつた。

それが明治になると船宿の構造が、待合と同じやうになり、實質も亦待合と寸分變らないものになつた。

現在銀座に存する遊船宿は、兵庫家と、中村家の二軒であるが、しかし、銀座五業中の一業を占め、而かも、斯界に於ける古株として、二軒共羽振りを利かせてゐる。つまり待合茶屋の老舗として目されてゐるのである。

何れにするも船宿が、銀座をして歡樂境たらしめる一つの動機を與へたことは、何人も否定することの出来ない事實である。

### 【三】 歡樂境銀座への第二步 (A)

歡樂境銀座への第二步は、何んといつても銀座界限に於ける料理、飲食店の發達であつた。つまり銀座をして歡樂境たらしめる爲めの動機をつくつたものは、一方に於ては遊船宿であり、他の一方に於ては、料理飲食店の發達である。少くとも此の二つが、サービスマガールの擡頭を促進し、歡樂境への道程を形造つたものである。

そこで先づ銀座界限に於ける飲食店として、其の最も古い歴史を持つものは、いふまでもなく新

橋際にあつた信樂茶屋である。此の信樂茶屋は或る一説によると、銀座の埋立後間もなく出来たものであるといはれて居るが、全く多くの古書にも其の名が見える。が、兎に角信樂茶屋は、單なる腰掛け茶屋で、其の名を待合茶屋とはいつてゐたが、一種の水茶屋に過ぎなかつたものである。しかし、これは江戸に於ける三大茶屋でもあり、銀座に於ける一つの名物でもあつたのだ。

殊に信樂茶屋は、維新當時まで永續してゐたといふから、其の營業期間は、實に永いもので、而かも、同じ屋號で、同じ商賣をやり通して來たといふのだから珍らしい存在だ。全く其の名物の名にふさわしいものがある。

信樂茶屋の由來に付いては、別に確たる記録も残されてゐないし、又これといふ説も見當らないが、しかし、或る一説には、山城國信樂—つまり其の名は茶の産地としての信樂から來たものであるから、多分其の先祖がこゝから江戸に下つて、待合茶屋を始めたものではなからうか。かういふ説もある。といふのは、元來、此の茶屋はお茶を賣ることが目的で古書にも見える如く、店頭に大きな茶釜が据えられ、茶汲み女がそれを汲んで客にサービスしたものであり、又商人の寄り合ひ開帳の出迎へなどにもこれを用ひたといふことであるから、無論、お茶が信樂の看板であつたのはいふまでもない。

銀座には此の外にも花岡といふ店があり、又新橋には玉の井といふのがあつた。無論、二軒共腰掛け茶屋で、其の名の示すやうに當時淺草仲見世邊りにあつた水茶屋に類するもので、今日に於ける待合茶屋とは甚だしく異なるものがある。しかし、これも銀座に於ける飲食店のらんちやうに外ならない。

江戸時代銀座に於ける料亭としては、嘉永二年頃にあつた木挽町の西應寺前にあつた萬屋喜平といふのを挙げねばならない。こゝは速席料理を看板とするもので、無論、酔月樓萬彦のやうに、高級なものではなくて寧ろ一般料理に近い大衆的な家であつたらしいが、しかし、仕出しもやり其の頃ちよつと賣り出してもゐたらしい。が、兎に角、仕出しは遊船宿邊へ運んだものらしく、而かも、それが爲めに速席の文字を冠したものでなからうか。尤も其の頃の速席と云つても當になつたものではない。何故なら、客の注文によつて玉川の上流まで早馬を立て水を汲ませるといふやり方であつたから、速席といつた處で、狼狽して材料の注文に出かける位ひなことはやり兼ねないからだ。

それから又土橋際の清水樓、銀座の三波、日蔭町の伊勢源、伊勢源を除く外の二軒は、仕出しを兼ねてゐたもので、矢張り船宿邊りへ料理を運んで居たものらしい。が、兎に角何れも可なり古い店で、殊に伊勢源は、明治三十四年頃まであつたものだ。即ち伊勢源が、明治三十五年頃突如として

癡業すると、其の跡を襲つて出来たのが明月樓であつた。明月樓は明治大正にかけて、可なり繁昌したがこれ又癡業して現在はその蔭を断つてゐる。何れにするもこれ等の古い料理店が藝妓の擡頭を促進し、その發達を助長したことは前に述べた船宿の場合に於けると敢て異なる處がない。つまり自分達の發展をより速やかにする爲めにサービスガールを希望し、促進せしめた譯けである。

#### 【四】 歡樂境銀座への第二步 (B)

銀座界限に於て、其の歴史が古く高級な店と云へば、采女ヶ原の酔月樓万彦であつた。酔月は嘉永の初期にあつては、江戸に於ける有数の料亭で、其の頃、江戸一番と云はれてゐた淺草山谷堀の八百善に次ぐ高級割烹店の一つであつた。少くとも久保町の賣茶亭や、枕橋の八百松以上の高級さであつた。尤も明治初期に於ける賣茶亭は素晴らしいものであつたが、しかし、少くとも嘉永年間頃にあつては、酔月万彦は多くお留守居役などの出入りする料亭で、その高級を詠はれたものだつた。つまりサービスガールとしての藝妓のない時代に、料理一方で立つてゐた店であつたから、其の高級さは押し知るべしである。況んや、其の頃の特級階級であるお留守居役が我こそ天下の食通と許り、暇に任かして食ひ分けをする家だつたから、可なり精選して居たことには何んの疑もない。殊に、當時の記録を見ても、其の間の消息を知るに足る。

兎に角、酔月樓万彦は、其の頃貸座敷と、會席料理とを兼ねてゐたのであるから、多く宴會などをやつたものらしい。つまり暇人としてのお留守居役達の集會場でもあつたのである。

少し離れては居るが、芝久保町の賣茶亭も亦、新橋花柳界の爲めには、ひどく貢献したもので、少くとも新橋藝妓の擡頭を促進し、一度びこれが出来たことによつて、其の發展を助長したのは、酔月に於けると殆ど選ぶ處がなかつたものだ。

賣茶亭は、其の頃からひどく奥深い家で門口から玄關まで可なり長い間敷石が敷かれてあつたものだ。しかし、其の敷石をうつかり藝妓などが踏んで這入らうものなら、ひどく叱られたと云ふことだ。それ程、賣茶亭は、厳格な家であつたそうだし。しかし、又其の半面には、とてもよく行き届いてゐるので、藝妓達はこゝの夫妻をひどく尊敬してゐたものだ。

何れにするもこれ等の料亭が、藝妓の需要をつくつたのは以上の如くであるが、藝妓の出来な以前に於ても、所謂、お師匠なるものが、藝妓の代用として、三味線を弾き、唄を唄ひ、藝妓と少しも變らないサービスをやつてゐたものだ。此の時代を稱して田中巖氏は、お師匠時代と云つてゐるが、誠に適切な言葉である。



【五】 歡樂境銀座への第三步(A)

九六

歡樂境銀座は江戸末期に於て、稍々變則的な傾向を以て發達してゐる。それは船宿や料亭の發達にも拘らず、サービスガールの發達がひどく遅れてゐることだ。何故江戸末期に於て、サービスガールが擡頭しなかつたか。どう云ふ譯けで、そう云ふ風に變則的に發達したか。無論これには他にも相當な理由があるであらうが、その主なるものは、歡樂境銀座が江戸末期の始めに於て、見世物の存在を失つたからだ。

そうだ。江戸中期後には、山村座があり、守田座があり、而かも、それに附隨して、芝居茶屋もあり、又蔭間茶屋などもあつて、歡樂境としての存在をはつきりと現はしてゐたものだ。

處が、山村座は江島生島の事件を起し、幕命によつて取拂はれ、更らに天保年間には、水野越前守の改革によつて、守田座は淺草猿若町に移されたので、歡樂境銀座は、變則的な形と共に發達せざるを得なくなつたのだ。

殊に、そう云ふ風に改革された後であるから、えてして風俗を素し易い藝妓其他のサービス嬢の出場を認めることは、當局としても考へものでもあり、又町人側に於ても、そうした困難な場合を

押し切つて願ひ出でる者もなかつた譯けである。だから歡樂境銀座の發達は、自然變態的に、不足した儘進んで來たものである。

處が、元來銀座界隈は地の利の関係上、幕府の役人や又は、お留守居役と云つたやうな上役人の會合が多く、而かも、それが日増しに繁くなり、遂にはサービス嬢の必要が痛切に感じられるやうになつた。

「お、三味線でも弾ける者は居ないか」「どうも三味線がないと無粋で不可ん」「そこらにお師匠でもゐるだらう。構はんから連れて來い」

かう云つたやうに客の方から、時々強要されたことであらうし、又何分にも客が、上役人と云ふのであるから、料亭の方でも安心して呼ぶことが出來たであらう。

そんな譯けでどこから供給して來たものが、何時の間にかお師匠さんなるものが、三味線を携えて料亭に出入りするやうになつた。そして、それが日増しに多くなり、忙がしくなつて行つたものだし、それが當時の掟に照し、違反的な行爲であることは云ふまでもないが、しかし、相手の客が上役人であると云ふことに於て、町方の連中も知つて知らぬ振りをしてゐたものだ。つまり、そうした微細な取締り上のことに手を入れて、へまをするより、寧ろ公然の秘密として、目こぼし

をしておけば、却つて安全位ひに考へられてゐたのであらう。が、しかし、當のお師匠さん連にすると、そうしたもぐり的なことには、第一不快でもあるし、又種々と迷惑なこともあつたりしたので、遂に彼女達から、御老中太田備中守へ、酌取り御免の義を恐れながらと願ひ出たものである。そこで備中守は、其の代表者としての常盤津の師匠、文字和佐に引見し、願ひの筋を聞いた上、改めて酌取御免の義を許したのである。そして、其の内容は、座敷の祝儀が一分で玉一本が一朱であつた。

つまりこれで彼女達も、従來の如くもぐりサービスでなく、公然サービス嬢として立つことが出来るやうになつたのだ。即ちこれが新橋藝妓の由來で、時は正に安政四年のことで、天下は漸く泰平から離れ、幕府の基礎は自然にゆるみ、内外共にたゞんをつけ、聽て物騒な世界に這入らうとしてゐる時であつた。だから其の反動として、却つて花柳界方面は昌へたものである。

因に釣取御免の儀を願ひ出た文字和佐は、後ちに小松家のお政となり、金春藝妓として永く賣つてゐたと云ふ事である。

#### 【六】 歡樂境銀座への第四步

歡樂境銀座への第四步は、新富座の建設と待合の由來とであつた。新富座は明治五年に現在の場所に於て建設されたが其の當時としては、帝都隨一の大劇場としての存在で、大衆達の驚異的でもあつた。少くとも銀座をして今日あらしめる動機を造つたのは、此の劇場が建設されたことに始まる。

待合は主として、其の後の産物ではあるが、しかし、其の新らしい形式を持つた待合茶屋の出現は、奇を追ふ新橋藝妓にとつて、どれ程大きなショックを與へたことか。少くとも、彼女達の發達をひどく助長したことは云ふまでもない。前にも一言したやうに、待合の名は明治三年淺草並木町に、始めて其の由來を示し、漸次、東京市中に擴がつて行つたものである。だから銀座に於ける待合の由來は、云ふまでもなく其の後のことではあるが、しかし、奇を好み、新らしきを慕つてゐた新橋花柳界にあつては、案外其の普及は迅速であつたと云はねばならない。しかし、果して何んと云ふ待合が、其の尖端を切り、而かも、それが何時頃であつたか。その間の消息は解らないが、何れにしても明治五年の大火後であつたことは慥かである。

現在の待合中で、其の老舗に屬するものは、瓢家、田川等であらう。殊に長谷川は老舗中の老舗に屬する家であつたが今日は、既に廢業してゐる。又土橋際の内山、鍋町の關根、竹川町の梅の家な

ど古い家ではあつたが、しかし今日はない。だから今日では、瓢家、田川などが最も古い家である。

瓢家の開業其の他の事に付いては、既に述べた處であるから省略するがこれに付いて、面白い話がある。

それは明治時代五代目菊五郎が、瓢家で藝妓を揚げて景氣をつけてゐると、突然聲色屋がやつて来て「旦那一つ聲色をやらしておくんせえ」と強要するので、五代目菊五郎先生悪戯ら氣をおこし「ぢや一つやつて見な、五代目の聲色を」と云つたものだ。

處が知らぬが佛の聲色屋、目前に御本人がゐるにも拘らず大聲あげての聲色。しかし不幸にも其の聲色屋は、少しも彼の科白に似てゐないので、彼五代目、聊か御機嫌なゝめならずの態であつた「それぢや、五代目に少しも似てないぢやないか」「どういたしましたして、寸分遠いありません」

「馬鹿、そんなものが五代目の科白に似てゐるか」かう一つやつて、そして、彼は又かう云つた。

「ぢや、己れが一つやつて見やう、よく聴いときなよ」そこで彼は、自ら五代目の聲色をやつて見せた。

「成る程ね、旦那も案外器用で居らつ被いますね。だけど掛け値のないところ、まだ本當とは云へませんね」

こゝに至つて、五代目先生、すつかり男を下げたと云ふことだが、全く人を喰つた話であり、又笑はせもする。

兎に角、現在銀座に於ける五業組合の一員としての待合は、百六十六軒で、五業組合の頭取も待合瓢亭の主人、長興規矩藏氏であり、又五人の理事中、其の四人までが待合の主人公である。即ち料亭佐久間を除き、音羽、布袋家、本住吉、新榊がそれである。

尤も料亭松本樓の主人、小阪梅吉氏は、明治二十四年新橋五業組合と云ふ名稱がつけられて以来幹部として、又は頭取として永い間勤続された方でもあり、東京市政の爲めにも、大いに氣を吐きとても貢献した人でもある。

又金を儲けることに付いても、頗る非凡な存在で、既に資産數百萬を數えられ、現に代議士でもある。

少くとも銀座に於ける成功傳中の人で、其の立場こそ異つてゐるが、しかし、其の成功した點になると、服部金太郎氏や、川村徳太郎氏などと、よく似通つてゐる所がある。殊に彼氏は、純粹の

銀座ッ兒で、銀座の爲めに終始貢献して来た人である。

1011

### 【七】 洞壺屋の師匠と今春藝妓

歡樂境銀座は、江戸時代から其の根を發し、第一步、第二步、第三步と頗る氣永に徐々と發達して来たものだ。だからそこには、さまざまな變遷もあり、又多くの逸話や面白い事實も少なくないであらう。がしかし、夫れ等の總てを探究し調査し書き盡くすことは、到底出來得ることではないから、こゝでは特に顯著なものを選んで書くことにする。

江戸から東京へかけ、南鍋町に「洞壺屋のお師匠さん」と云ふのがあつた。其のお師匠さんは、水木流の本家本元で水木歌春と名乗る婦人だつた。云ふまでもなく明治時代までは水木流が大流行で水木流にあらざれば踊りでないとまで考へられてゐたものだ。殊に江戸から東京へかけての明治初年にあつては、それが一層甚だしかつたものだ。だから其の頃の彼女の名聲は大したもので、當時名ある役者は勿論、苟しくも踊りに關心を持つ者であつたら、彼女の弟子たらんとしたものだつた。とりわけ末代の名優九代目團十郎でさへも、彼女によつて水木流の奥儀會傳を得たと云はれてゐる位だ。これは卑近な例だが、栗島すみ子のお師匠のその又お師匠なのである。

何故、彼女を洞壺屋のお師匠と云つたか。それは云ふまでもなく彼女の家が洞壺屋であつたからだ。其の洞壺屋のお師匠さんは明治十年頃、既に没してゐるが、しかし、彼女が植えつけた水木流は、新橋花柳界にも完全に成長してゐる。だから此の意味に於て彼女も亦、間接ながら歡樂境銀座に貢献する處が少なくない。

それから又、最初に酌取御免を許されたお師匠連も、無論此の意味に於ける貢献者であつた。例へばお師匠時代の文字和佐は、後ちに小松家のお政となつてゐるが、彼女は常盤津の師匠であり、須原家のお幸も亦清元の師匠だつた。そして此の二人は、藝妓になつてからも酌人の世話役に選ばれ、恰も今日の藝妓家組合の事務に似たことをやつてゐたものである。

其の頃は、無論今日と異なり、専ら三味線を以つて立つ藝人であつたから、綺量は兎も角、藝だけは確乎りしてゐなければならなかつた。だから従つて服装も今日の如くけばくしいものではなく、極く質素なものでもあり、實質的なそれでもあつた。つまり實質本位時代であるから、形式よりも内容が充實されてゐたのである。

つまり彼女達が、假令清元の師匠であつたにしろ、その専門以外に藝技一通りの藝は、何をやらしてもひけをとらない彼女達であつたのだ。それは一つに通ずるものが、萬事に通ずると云ふ譬へ

1011

の如く、一藝に秀ずる者は、容易に萬事に通ずることが出来る。が、しかし、今日の如くいきなり萬事に通ぜんとする者は、結局一藝にも通ぜず、とゞのつまりが三味線枕の珍藝を演ずる以外、何等の奥の手も持たないことになる。しかし、これは獨り彼女達許りでなくて凡ゆる階級、職業に通じてさうした傾向を持つてゐる。時は正にインチキ時代であるからだ。

それは兎に角、新橋藝妓は以上の如く、その始めお師匠から由來したものであるから、他の花柳界と異なり、藝術的な方面に於ては他に優る所がなければならぬ。少くとも銀座は場所的關係に於て、既にさうなければならぬ。事實江戸時代にあつては、幕府の役人連やお留守居役が多くその客筋であり、而かも、明治時代になると明治政府の高官連の根城であり、今又特殊なインテリの遊び場である以上、高級で、スマートである半面には時々離れ藝をして、其の存在を認める譯けには行かない。つまり新橋藝妓は、歴史的に、因襲的に、そう云ふ風に價值づけられて來たのであるから、現在の藝妓達が、藝をおろそかにすることは先祖に對しても申譯けがないことにもなる。

### 【八】 左官から身を起した松田の主人

江戸から東京への料亭として、殊に維新當時喧嘩で有名になつた松田。しかし其の經營者は有名

になると却つて厭氣がさし、其の權利を他に讓渡して了つたのである、何故厭氣がさしたか。無論有名になつたからではなくて、喧嘩をされたことが癪な許りでなく、當時の大衆達が、有名になると正反對に恐ろしがつて寄りつかなくなつたからだ。

つまり銀座の名物として、大衆達がワンサと押しかけてゐたものが、喧嘩をきつかけにめつきり客足が減つて行つたので、其の經營者がすつきり厭氣がさし、其の頃いろは長屋に住んでゐた左官の兼五郎と云ふ人に、松田の權利一切を賣つたのである。

買主としての兼五郎は、當時左官ではあつたが、其の祖先は武家で、とても系圖の正しい家であつた。事實又、彼氏は非凡な頭腦を持つた男で、いろは長屋でも巾を利かせてゐた一人である。

そんな譯けで料亭松田が、彼氏の經營に移ると、當時の料亭としては、別に宣傳の必要もないのに、乞食に飯をふるまい、松田の伴天を着せ、矢鱈に市内を歩かせたものだ。

無論今日ならこれ位ひなことは誰れにも氣のつくことでもあり、又左程突飛なことゝも思へないから、宣傳効果は、殆どないかも知れない。しかし、それが明治初年であつたからその企ては百パーセントの効果を齎らした。即ちこの突飛な思ひつきが噂に噂を産み、大衆の獵奇をそゝり遂には大評判となつたのである。だから従つて松田の喧嘩などそつちのけに、大衆達は以前のやうにワン

サと押しかけるやうになつた。

又彼氏は庇を造り其の頃大衆達が、とても珍しがつた屋上庭園のやうなものを造つたり、又厠や湯殿に金をかけて、素晴らしく美しいものを造つたり、乃至は、お客百人目毎に、大太鼓を打つたり、而かも、それが千人に達すると、其の千人目に當つたお客は無銭で、飲み放題、食ひ放題と云ふ特權を與へるなど、次から次に變つた宣傳法をやつたものだ。

殊に、當時の大衆は此の千人目に當ることをひどく名譽の如く考へてゐたものだ。別に無銭だからと云ふ巧利主義な意味ではなく、却つて無銭なるが爲めに金がかゝつた位ひである。と云ふのは其の千人目に當つたお客は、女中を始め、板場、下足に至るまで、祝儀を出すのが常であつたからだ。だから決して經濟的には、利得すべきものではなかつた。が、しかし、それでゐてお客は、とても名譽の如くに心得てゐたものだ。つまり好奇心から來る愉悅であらう。

兎に角、其の頃の大衆達は、ほんのちよつとしたことにでも、好奇心を惹き、それを問題にするのが常であつたから、かう云ふ風に、次から次に、眼新らしいことが實現されると、ひどく人氣を呼んだものだ。その呼吸を逸早く擷んだのが、松田兼五郎氏の非凡な處でもある。

何れにするも料亭松田は明治初年以來、素晴らしい人氣であつたから、其の賣りあげ金も實に莫

大なもので、每晚看板になると、帳場の者が、一日のあがりをいろは長屋の本宅へ届けるのであつたが、其の場合は、必ず店の若い者が二三人提灯を高々とつけて、護衛しつゝ送つて行くのが例となつてゐた。だからこれによつても、如何に松田の賣り上げ高が多かつたかを窺知するに足るであらう。

更らにお客千人を現實に數える時が、決して少くなかつたと云ふから、其の頃の料亭としては全く珍らしい繁昌振りであつたに違がない。尤もこれは明治中期頃のことである。

其の頃の松田は、每晚看板が九時で、看板になると、例の大太鼓を打つのが例となつてゐた。だから時計の少くない當時としては、よりよき時の知らせともなるのであつた。

### 【九】 歌舞伎座の建設と團十郎

歌舞伎座の建設は、變遷史で既に述べた處であるが、兎に角明治二十二年春、建築に着手し同年十一月工なり、同月二十一日其の舞臺開きが行はれたものである。即ち當の名優市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次、小團次などのお歴々衆によつて、いとも華々しく開場されたのだ。が、全く其の人氣たるや、實に素晴らしいものがあつた。名實共に連日連夜満員續きで、身動き一つ出來な

いと云ふ有様だつた。無論名優揃ひの出演と云ふことも、人氣を集めた、直接の原因には違ひがない。しかし、それよりも更らに大きな原因は、従來存しなかつた大劇場が、新たに建設されたと云ふことによつて、人氣は、素晴らしく嵩まつたものである。

事實、其の頃の劇場としては、實に尨大なもので、現在地方出の人達が、今日の歌舞伎座を見る以上に驚異の存在として見られたものだつた。

それに當時、劇評家として日本一とまで折紙をつけられた福地源一郎氏と、東都隨一の興行師として目されてゐた千葉勝五郎氏とが、相座主となり、共同戦線を張つての晴れの場所でもあつたから其の準備も亦、至れり盡せりであつた。

殊に、こゝへ出演せしめる俳優の爲めに、其の試練場として、淺草千束町に吾妻座を建てた位ひであるから、出演せんとする俳優にしても亦、晴れの場所であればならない。だから出演俳優が勢一杯の努力を拂ひ、熱と力の演技を見せたであらうことも、敢て想像するに難くはない。

何れにするも歌舞伎座は、開場以來、人氣の中心となり、而かも、座主達が理想としてゐた處の最高演劇の權威を示すに至つたのである。

處が、明治二十九年三月になると、歌舞伎座は、其の制度を改め、資本金五十萬圓を有する株式

會社となつた。そして其の名稱も歌舞伎座株式會社と改められたのである。

丁度、其の頃のことだつた。歌舞伎座の開場以來絶えざる奮闘を続け、而かも、おびたしい人氣を獲得してゐた古今の名優、九代目團十郎が、突如として他界したのが――。しかし、其の古今を通ずる處の名優の死因が、今尙はつきりされてゐないのは、果して如何なる理由によるものであらうか。

彼が、最後を飾る芝居は、曾我兄弟だつた。其の時、彼は五郎に扮し、五代目菊五郎が十郎をやつてゐた。が、彼は過つて足を痛めた。そして、それが原因となり、病みつきとなつて、遂に死亡して終つたものである。

彼の死が歌舞伎座にとつて、致命的な打撃であつたことは云ふまでもない。そして、其の半面には、彼が歌舞伎座の成長に、少なからざる貢獻をして來たことも、彼の死によつて益々強められた譯けでもある。

全く名優揃ひの當時ではあつたが、しかし、彼の人氣は、斷然一頭角を抜き、而かも、其の演技は、不朽のものとして末代に跡るものでもある。

其の後歌舞伎座は、明治四十年一月に至り、多年の懸案であつた内外の刷新が行はれ、更らに同

四十四年一月に、純日本式な檜造りの破風構への大建築が落成した。つまり俗に檜舞臺と云はれてゐたのは、其の一面を表示したものである。

其の頃、東京の興行師として、羽振りを利かせてゐたのが田村××氏であつた。現在、入江たか子のダン公でもあり、日活の俳優でもある處の田村道美君こそ、明治時代の興行師田村氏の嫡男である。

### 【107】松竹の東京進出時代(A)

松竹の大谷竹二郎氏は、今や關東に於ける演劇、映畫の大立物で、東京に於ける地盤は、大阪に於ける實兄白井氏のそれに匹敵し、何人も彼氏に對抗し得るものがないと云ふ豪勢振りである。全く現在、東京に於ける重なる劇場は、彼氏の手によつて押へられ、恰も一人舞臺の如き感さへ抱かせてゐる。

しかし、此の恐るべき大成功も、僅かに二十四五年間に於ける苦闘の賜物で、其の足跡を顧みると、全くとん／＼拍子の超スピード的な成功でもある。

と云ふのは、彼氏が、東京進出を企てたのが、明治末期のことで、僅か四十年か、四十一年頃の

ことだ。最初、新富座を手に入れ、こゝを本據として戦を挑んだ譯けである。つまり彼氏は、其の足場として、新富座を買つて上京し、こゝを松竹直營館として打つて出たのである。其の頃の事務員として、主なるものは川島、向山の兩氏であつた。

兎に角、大谷氏は、新富座に於て、興行を續けて行くことだけが其の目的ではなかつた。即ち彼氏は、寧ろ敵は本能寺にありと許り、其の鋒先きは、絶えず歌舞伎座に向けられてゐたのだつた。

殊に、歌舞伎座の方では、其の頃から、内外制度の刷新が圖られ、歌舞伎劇の濫觴と共に、大劇場が建設されんとしてゐたので、同劇場の株は、常に變動を示し、絶えず動きを見せてゐたものだ。だから野心に輝いてゐた大谷氏は、それとはなしに、少し宛其の株を買ひ集めつゝあつたのだ。

丁度其の頃のことだつた。正確に云ふと、明治四十二年頃のことである。當時、まる切りの素人としての矢澤弦次郎氏が、突如として明治座を開けたのが――。

全く彼氏は、興行に付いては、全然白紙で、役者其の他の押へも知らぬと云ふまるきりの素人ではあつたが、しかし、其の參謀として、岡鬼太郎、木村錦花の兩氏が居た。此の二人は、其の頃から幕内生活に付いては、玄人に屬し、幕内で飯を食つてゐる人であつた。とりわけ木村氏は、品川



邊りの遊廓の息子だったが、極く若い時分、左團次の弟子となり、高之助と名乗つて舞臺にも立つた程の男である。

又岡氏は、數十萬の資産を有する相當有名な軍人の息子ではあつたが、父の思想と相入れず、若い時分から家を飛び出し、貧しい文士として、幕内其の他を轉々してゐたものである。

兎に角、此の二人が、素人興行師としての矢澤氏の參謀となり、番頭となつて、明治座を開けることになつたのである。

そして、其の座頭は、市川左團次で、重なるメンバーは高麗藏(後の幸四郎)、源之助、宗之助、秀調、又五郎、壽美藏と云ふ當時若手俳優としての壯々たるもの許りであつた。此の外にも今一流になつてゐる俳優もゐた。

わけでも出物が、其の頃としては、全く破天荒なもので、今日で云へば、新劇俳優が手がけるやうなものであつた。と云ふのは、當時、歌舞伎俳優の演ずる處の藝題は、大時代のもので、若しそれでなければ、極く新らしい處として、黙阿彌物位ひが關の山であつたのだ。それなのに、未だ嘗つて何人も手がけたことのない、岡本綺堂氏の作にかゝる『承久戦繪卷』を通し狂言として出したのだつた。そして、それが岡氏や、木村氏の發案ではなくて、世人から素人興行師として目され、寧ろ

嘲笑の眼で見られてゐた矢澤弦次郎氏の案にかゝるものであつた。

「全く素人程恐ろしいものはないね、あんな無謀なことをやるんだから。」

「盲目蛇におそれずと云ふことがあるが、全く素人のすることは徹底してゐるよ」

こんな噂が幕内生活者の間に、盛んに飛んだものだ。それ程、矢澤氏の興行は、世人の眼を惹いたものである。

### 【一一】 松竹の東京進出時代(B)

矢澤氏の明治座第一回旗擧興行は、儲か正月十三日が、其の初日だつたと思ふが、果して幕を開けて見ると、幕内生活者が憂へたやうに、五分の入りと云ひたい處だが、事實は、三分か四分の入りで、ほんのばら／＼にしか這入つてゐなかつた。無論、其の頃のことであるから、暖房装置などあらう筈もなく、客が薄いので、どうにも寒くて見られないと云ふ始末だつた。

「成る程、素人考へと云ふものは駄目なもんだな」

流石の矢澤氏も少々心細くなつた。「しかし、其の中に来るだらう」と、初日は、それ程でもなかつたが、二日目の十四日、矢つ張りがら／＼であつた。岡、木村の兩氏も矢鱈に首をひねつてゐ

たが、今更らどうにもならなかつた。

處が、三日目の十五日、お正月とは云へ、朝からつめかけた大衆の群れは、黄昏近くになつても引きもきらさぬ素晴らしい勢ひだつた、つまり名實共に大入満員の光景だつた。四日目の十六日。矢つ張り大入満員で、立錐の餘地もないと云ふ有様である。

五日目の十七日「お正月でないから、今日は昨日より悪いだらう」と思つてゐると、それがまきり正反對な事實となつて現はれた。即ちだん／＼と日が経つに従ひ、尻あがりにごん／＼のして行くのである。だから満員で断はられた客が毎日數百人に達すと云ふ未曾有の情勢を示したものである。

かくして第一回旗舉興行に成功した矢澤氏は、第二回、第三回と丁度二年間、明治座に於て興行を續けたのであつたが總て成功の連続で、其の間に儲けた金は素晴らしいものがあつた。

殊に、一萬圓の金を懐中にして、洲崎遊廓に行き女郎の總揚げを爲し、其の翌朝千圓足らずの金を持つて歸つたこともあつたさうだ。が、全く素人興行師として、白紙でこれ位儲けた人も少ないであらうが、しかし、其の半面には時代の尖端を切るべく、破天荒な企てをしたことは、慥かに、彼氏の時代的認識が正確であると云はねばならない。尤も彼氏が、純然たる素人であつたから出來

たことであらうが、しかし、それにしても今日の興行師の如く、大衆の鼻息のみに捉はれ恰もその常間者としての存在であり、舊套から一步も外へ出られない彼氏等から見ると、矢澤氏の遣り口は正に先覺者としての行ひではなかつたらうか。しかし、其の矢澤氏も妻女の死亡によつて、断然興行界から退いて終つた。そして其の後鎌山其他に手を出して失敗し、現在では全く方面の違つた精神界に身を投じ、精神療法家として、不治の病に悩む人の爲めに老後を捧げてゐる。

矢澤氏が興行界から退いた頃、所謂、檜舞臺の歌舞伎座が出來あがつた。そして、其の開場は、明治四十四年の十月であつた。無論、其の頃は、既に大谷氏は、歌舞伎座に於ける大株主となつてゐた。だから其の翌々年の大正二年八月には松竹合名會社が、歌舞伎座の興行を擔當することになつたのである。そして又、約一年半程経つと、歌舞伎座の經營一切が松竹の手で擔當されることになつたのである。

處が、大正十年十月三十日、歌舞伎座は、不慮の火災の爲めに燒失して終つたので、愈々十一年六月工事に着手し、同十二年五月に上棟式を挙げ、華々しく開場したのであつたがこれ又間もなく同年九月一日の關東大震災の爲めに、烏有に歸したのである。

しかし、歌舞伎座株式會社は、更らに勇を起し約三年間の歳月を経て、堅牢第一、防火、通風、

視線、聽音等々完備せるものを建築し、大正十四年正月興行から、華々しく開場したのである。わけても、舞舞伎座と松竹との關係は、昭和六年七月七日に、斷然密接し、即ち同日歌舞伎座株式會社は、松竹興行株式會社と合併し、名實共に松竹の手に移されたのである。

歌舞伎座と松竹との關係は、大體以上の如きものであるが、これに關聯して、松竹興行の變遷を書く必要があるが、しかし、それは獨り銀座界限に止まらないので、何れ又其の土地に關聯して詳細を極める積りである。

#### 第四、銀座食道樂の變遷發達

##### (一) 銀座に於ける肉屋の普及時代 (A)

牛肉が一般人の常食となつたのは、明治七八年頃のこと、それ以前は、無論、一般人の常食ではなくて、極く特種な階級的人士によつてのみ愛食されてゐたものである。

殊に、明治五年の大火前後にあつては、銀座は因より、全市に涉つて牛肉の存在すらもなかつたものだ。現に、其の頃、とてもモダンと云はれてゐた元八丁堀の與力だつた原胤昭氏の如き、明治五年の大火後、牛肉を食ふ爲めに、新橋から尖端的な陸蒸氣に乗つて、態々横濱まで出かけて行つたと云はれてゐる。そして、其の上西向きの牛肉を食つて、數時間に渡り、臭いオクビが出て、どうにも困つたと告白してゐる位ひだ。

無論、當時のことであるから、需要が少ない上に、運輸機關が完全してゐなかつたので、勢ひ屠殺後數日を経ることになつたのであらう。が、しかし、それでも食はなければ、モダンボーイの估

券に拘ると考へてゐたものだつた。だから高い汽車賃を拂ひ、横濱までも態々出かけねばならなかつたのだ。

しかし、それでゐて、其の半面には、肉食をすることを國辱と考へたり、神に背反するの甚だしいものとして、反對もし、又輕蔑もし、憎惡もしてゐた連中は、決して少くなかつたものだ。それも其の筈だ。それからすつと後のことであるが、日本に始めて電信なるものが由來し、處所に電柱が立つと、「これはてつきり切支丹の仕わざである」と考へ、其の切倒しを企てたなどの反動極まる連中もあつたのだ。だから牛馬の如き、四つ足を食ふことをいみ嫌つたのは當然な話でもある。

殊に、モダンと云はれてゐた家でさへも、牛肉を煮る場合には、神棚を幕で掩つたり、庭の片隅で煮たり、乃至は表へ出して煮たりしたものだつた。又牛肉を食つた者は、必ず口を洗はなければ、他人と對座することが出来ないものゝ如くに考へてゐた向きもあつた。事實又、其の頃の牛肉は、半ば腐敗してゐた爲めに、これを食つたものは、ひどく臭かつたものだ。だから牛肉は臭いものと云ふのが通り相場になつてゐた。

何れにするも銀座の大火前に、牛肉を食つたものは、東京全市を通じても、指折り數える程しかゐなかつたであらう。何故なら、其の頃は、まだ陸蒸汽もなく、早駕籠か何んかで、横濱までかけ

つけなければ、これを求めることが出来なかつたからだ。

東京人にして、最初に肉食したものは、何んと云つても築地梁山伯に集つてゐた豪傑連であつたらう。何故なら、彼氏等は、當時尖鋭的な存在でもあり、モダンボーイとしてのそれでもあつたら、舶來的な新らしいことゝ云へば、彼氏等によつて多く魁され、普及宣傳されたからである。

殊に、明治元年、築地から木挽町にかけ、其の一廓を、外國人の居留地と定め、關内と稱せられるやうになると、外國人にして、こゝに居留する者も、ほつ／＼と出來、キリストの宣教師なども往むやうになると、東京人にして、外國人に接する機會がだん／＼と多くなり、繁くなつて行つた。當然肉食に對する知識をも得ることになつて、自然其の味ひをも會得し、遂にはこれを常食とするやうになつたものだ。此の意味に於て、ラシヤメンなどは、食肉に對する先驅者でもあつたらう。事實又、ラシヤメンは、大衆達からは、ひどく憎惡の眼で見られてはゐたが、しかし、當時に於ける彼女達は、所謂、モダンガールの最尖端を切つた女性で、假令、其の始めは山出しであつたにしろ、無智文盲な婦人であつたにしろ、ハイカラな點に於ては、彼女達に及ぶものはなかつた譯けだ。つまり肉食の先驅者であつた許りでなく、凡ゆる方面に於ける先驅者であつたのだ。それだけに彼女達は、經濟的にもひどく惠まれたものである。だから、ラシヤメンの金貨や、地主などが

あつたのに、何んの不思議があらう。

(二) 銀座に於ける肉屋の普及時代(B)

何んと云つても銀座は、文明開化の魁を爲した場所である。だから肉食をすることが、或る意味に於て、文明開化と考へられてゐた以上、其の肉食の普及も亦、銀座に於て魁されたのは當然である。事實又、銀座が、大火後モダンな赤煉瓦の官営商家が、ぼつ／＼と建ち並び、斷然舊態を脱するやうになつて行く頃になると、肉屋としての存在も亦、ぼつ／＼と見受けられ出した。それは無論、肉食せんとする者が日増しに増へ、需要供給の原則の支配を受けたものには違ひがないが、しかし、時には命がけの思ひで、眼には玉の露さへ浮べながら、これを食つたと云ふ連中も少くなかつたと云ふから、全く笑はせもする。

しかし、それでゐて不思議にも、全市に渉る肉屋の普及は、おびたゞしいものがあり、而かも、其の急速度な發達は、何ものよりも一層激烈なものがあつた。つまり如何に大きな反對があらうとも、時代の要求がそこにあつたからだ。

今其の普及宣傳時代とも云ふべき、明治八年頃の銀座界限に於ける重なる肉屋を擧げると、凡そ

次のやうなものがあつた。全く單にこれだけによつても、如何に肉食が、超スピードな勢ひで蔓延したかを知ることが出来るであらう。殊に、銀座の大火前後には、全市に渉り一軒の肉屋さへもなかつたにも拘らず、僅か二年か三年の中に、斯くもおびたゞしい發達を遂げたことは、時代の要求するそれではなくて何んであらう。

先づ銀座一丁目から始めると、同町に吉川と今廣との二軒があつた。何れも其の頃、肉屋をやつてゐたが、しかし、今廣の方は、それ以前から、鳥鍋を看板とする店であつた。つまり肉食が餘りにも素晴らしく流行したので、其の流行に追はれ肉屋を兼ねてゐたものであるが、しかし、それは餘り永くはなかつた。つまり肉専門の店となり、吉川と共に、殆ど明治末期頃まであつたものだ。

同町三丁目にも、矢張り鳥と肉とを兼ねてゐた大黒屋と云ふのがあつた。大黒屋は、其の商標が□清であつたから、或者は大黒屋と呼ばずして、角清と云つてゐた。慥かこゝの支店だと思ふが、大根河岸の處にも、矢張り□清の商標のある大黒屋があつた。無論、三丁目の大黒屋と同じやうに、鳥と肉とがこゝの看板であつた。

それから又、同町四丁目に、萬惣と云ふのがあつた。こゝは牛肉専門の店でもあり又、表の處で小賣りを賑んにやつてゐたものだ。そして又、一時は可なり繁昌もしてゐたものである。

現在の松本樓は、當時尾張町で「まつ本」と云ひ、矢張り肉屋をやつてゐたものだつた。今日肉屋と云へば、何んとなく格式の低い料亭のやうに考へられるが、其の頃の肉屋は、頗るモダンな商賣でもあり、尖端的な存在でもあつた。だから松本樓が、其の始め肉屋をやつてゐたとしても、別に不名譽な譯けでもない。まして開業日淺き明治初年のことであるから、そう云ふ風にさまざまと變つて行つたのも寧ろ當然なことである。

又出雲町には「つたや」と云ふのがあつた。無論、肉専門の家であつた。それから土橋際の双葉町には、黄川田と角徳との二軒があつたことは、既に述べた處であるが、しかし、黄川田は其の後間もなく、烏森へ引越し、慥か大正時代まで營業してゐたと思ふ。が、兎に角、一時はとても旺んで有名な肉屋でもあつた。

芝口二丁目の現在太田屋の附近に、鳥料理の丸萬と云ふのがあつたが、こゝもほんの僅かの間ではあつたが、牛肉も兼ねてゐた時代があつた。

かう云ふ風に、明治八年頃は、肉屋の普及時代であつたから、銀座界限だけでも十指を指折る程次々と出來たものだ。だから此の外にも木挽町から入舟町にかけて二三の肉屋があつたが、しかし、どれもこれも餘り大きな家ではなかつた。つまり群勇割據時代の粗製濫造とも云へやう。

### (三) 銀座界限の蒲焼屋の變遷發達

今日存する料理中で、比較的歴史の古いのが、鰻料理である。が、しかし、これとても日本固有の産物ではなくて、其の始めは支那に於て發見され、支那から由來したものであることは、文献史上によつても明かである。

では何時頃、それが日本に由來したか。これに付いては、的確なことは解らないが、少くともそれが萬葉集に現はれてゐる以上、それよりも以前のことであるのは云ふまでもない。

最も其の頃の鰻料理は、今日の如く、蒲焼ではなく、其の名も武奈伎と云ひ、鮮づけにして食つたものである。そして又、當時は食味本位ではなくて、榮養素としての藥食に多く用ひたらしい。だからかうした時代から云ふと、鰻料理なるものは、既に千年近い歴史を持つてゐる。

しかし、今日鰻料理と云へば、誰れでも蒲焼を連想するやうに、鰻は蒲焼きと相場が定まつてゐる。だから此の蒲焼きの由來を明かにする必要があるが、しかし、これに付いては、考證家の説もまち／＼で、殆ど歸する處を知らない有様である。

殊に、古い説をとる者は、藤原時代だの、室町時代だのと主張してゐる。又近世の産物なりと主

張する者の中にも、江戸初期に、これを求めんとする者と、元祿年間乃至は、享保年間なりと主張する者などがあつて、全くこんとんたるものがある。が、しかし、蒲焼きの語源を蒲の穂に似てゐると云ふ説をとる時は、少くとも近世の産物と云はねばならない。

つまり此の説によると、蒲焼の語源は、其の始め、鰻を竹の串で口から尾まで、縦に突き刺して焼いたものであるから、其の焼けた鰻が、恰も蒲の穂のやうに見えるので、人は誰れ云ふとなく、それを蒲焼だと云ふやうになつたのだとある。

しかし、そんな詮策は、どうでもいゝとして、銀座に於ける、蒲焼屋の由来であるが、これに付いては、的確な文献も見當らないので、果して何時頃からのものか、其の間の消息は解らない。がしかし、嘉永年間には、銀座界隈に次の三軒があつた。

其の一つは、尾張町二丁目の或る横町に、大和田松五郎と云ふのがあつた。又同町には喜代川清助と云ふのもあつた。其の二は、南鍋町の尾張屋喜三郎と云ふのであつた。何れにするも、此の三軒は、銀座自體が産んだ、蒲焼屋であるが、更らに其の範圍を擴張すると、新富町一丁目一番地、俗に云ふ「あさり河岸」の處に竹葉があつた。竹葉は明治時代になると、日本橋の和田平や、靈岸島の大黒屋と共に、東京に於ける三大鰻屋で、其の一つが横綱を張るものであつた。

又江戸末期頃には、銀座三丁目の現在オリンピックツクの處に、武藏屋と云ふ鰻屋があつた。更らに煉瓦地時代になると、尾張町と南鍋町とに、喜多川(北川とも書いた)、狐鰻、およねなど高級な店が出来た。全く此の三軒は、其の頃、銀座界隈では、一流處の鰻屋で、箱の這入る家でもあつた。今日鰻屋へ箱を入れると云ふことは、絶対にないものとされてゐるが、當時は一流處の鰻屋へは、どこでも箱が這入つたものだ。即ち新橋花柳界が、今日尙ほ五業組合を名乗つてゐるのも、其の頃の遺物で、鰻料理と鳥料理とを各々獨立した一業とし、それに割烹店、待合、遊船宿とを合せて五業としたことに存するのだ。

銀座の蒲焼屋の中で、喜多川は、其の中でも最も羽振りがよく、又金もあつたので、とても巾を利かせてゐたものだつた。又狐鰻は、實質本位を鼻にかけ、高級さを誇つてゐたものだ。事實この蒲焼は美味しく食はせたそうだ。

何れにするも江戸末期から明治にかけて、比較的發達してゐたのが鰻料理であつた。だから、此の外にも大衆的な鰻屋は澤山あつた譯けだ。

#### (四) 烏森界隈の料亭の變遷

新橋花柳界は、明治中期頃から、所謂、煉瓦地藝妓が、徐ろに勢力を増し、烏森方面の勢力を凌駕するやうになつたが、しかし、まだ明治初年頃は、料亭其の他の飲食店は、殆ど伯仲するものがあり、どちらかと云ふと、高級な料亭は、寧ろ烏森方面にあつたものだ。

殊に、久保町の賣茶亭の如きは、斷然群を抜く高級さでもあり、權威でもあつた。又日蔭町の伊勢源にしても、江戸時代からの店だけあつて、尾張町の伊勢勘以上の高級さを持つてゐた。最も明治三十年後になると、日蔭町の伊勢源は、ひどく衰へ、同三十四年には、遂には廢業され、他人の手に渡つてゐる。つまり其の跡が、矢張り料亭ではあるが、明月樓となつたのである。

それから金春藝妓として鳴らした小濱を女將としてゐた濱の家、こゝも其の當時は、とても盛んなもので、どちらかと云ふと、賣茶亭に次ぐ權式を持つてゐたものだ。處が、其の濱の家が、どうしたものか、明治三十二三年頃になると、すつかり衰微し、廢業同様になつて終つたので、同三十四年に、池上の伊勢源の娘が、其の跡を引受け、矢張り濱の家の看板で營業してゐたものだが、これも遂に失敗し、とうとう廢業して終つたのである。

松本樓の小坂氏の話によると、濱の家には、同氏と同じ年輩のゴンべちゃんと言ふのがあつて、竹川町の薰陶小學校に、彼氏等と共に通つてゐたと云ふことだ。そして、其の頃、彼ゴンべちゃん

は、素的なブルジョア氣取りで、毎日乳母が附添つて来る許りか、大きな熊の皮の敷物を持ち込んで、授業を受けてゐたと云ふことだ。だから、總てそんな風で、可愛い子に旅をさせることを知らず、滅茶々に可愛がつた爲め、遂には不健全な人間を造りあげられたので、歴史ある濱の家をして、斯くも無残に廢業させたのではあるまいか。

それは兎に角、此の外に、昌平樓があり、湖月樓があり、太田屋などの高級料亭があつたものだ。無論、これ等の料亭は、何れも一流處のものであつた。だから明治中期頃にあつては、銀座よりも寧ろ烏森の方が勢力があつたのだ。

たゞ鰻屋だけは、銀座の方が、早くから發達し、而かも亦、高級なる店が多かつたものだ。鰻屋と云へば、双葉町の梅鉢、こゝは明治初年頃、甘酒屋であつたが、其の後、鰻と烏料理とをやるやうになつたものだ。無論、甘酒屋としては、江戸時代からの家で、甘酒屋では、銀座での元祖でもあつた。其の隣りが「千切」と云ふ油と雜貨とを商ふ店であつた。姓が倉田であるから、倉田油雜貨店とも云つた。

千切は現在、土橋際に、昭生ビルと云ふのを持つてゐる。つまり倉田氏は、昭生ビルの所有者でもあり、地主でもある。



處が、明治中期後になると、著しく此の邊も異つて來た。とりわけ海老徳の如きは、明治三十年頃には、料理割烹店として、一流の店でもあつた。又芝口近傍には、同町一丁目新芳があり、二丁目には明月樓があり、更らに三丁目には、和泉屋があつた。これ等も無論、一流の料亭で、總て箱の這入る家であつた。しかし、現在尙ほ營業をやつてゐる店は、以上四軒の中には一軒もない。又烏森には湖月樓と、扇芳亭との二軒があつたが、しかし最近まで營業を續けてゐたのは、湖月樓だけである。湖月樓は明治初期からの家で、この先代主人公は、明治中期頃に五業組合の頭取りなどを永く勤めてゐた程の人望家でもあつた。しかも、今はそれも廢業した。何れにするも明治初期から、中期頃にかけて、烏森界隈が昌へた重なる理由は、維新當時に於て、此の方面に高級な料亭が多くあつたこと、銀座が明治初年に二回までも火事に見舞はれた爲め、勢ひ川向ふに假營業をやつて來たことなどが、其の原因となつたものである。

### (五) 銀座に於ける居酒屋の變遷 (A)

世は移り、大衆は流れ、銀座は絶えざる動きを見せてゐる。これが銀座の姿である以上、銀座の變遷は、誠に眩ぐるしいものがある。そして、それは凡ゆるものに、又凡ゆる方面に適用されてゐる。

銀座界隈の居酒屋も亦、其の例に洩れず、明治初年から今日に至る凡そ五六十年間に於ける變遷は、可なり複雑な變化と共に發達してゐる。

江戸時代は兎に角、銀座通りに赤煉瓦のモダンな建築が軒を並べ、所謂、煉瓦地と云はれた頃、今の銀座食堂の處に、函館屋と云ふ洋酒屋が出來た。この主人は、木藤と云ひ、鬚の澤山生えた鬚むじやらな親爺さんではあつたが、顔に似ず好々爺で、別にお世辭を云はない替りに、性格的に圓滿な爺さんだつたので、左黨には一つの名物の如くに考へられてゐたものだ。

つまり函館屋は、銀座に於ける洋酒屋の元祖を爲すものではあるが、しかし、其の頃は、今日に見るスタンドバーのやうに、純然たる洋酒許りではなく、普通の居酒屋の如く日本酒もあり、無論、其の設備も居酒屋と大同小異のものであつた。だから洋酒屋と云へば洋酒屋には違ひないが、しかし、其の頃の大衆達は、此の函館屋の存在をひどく珍らしがつてゐたものだ。

無論、當時のことであるから、今日に見るやうに、専門のバーテンダーが居て、さまざまなかクテルを造ると云つたやうな小器用なことは出來なかつたが、しかし、この主人公は、元ロシアの軍艦の乗り組員だつたので、ちよつとしたカクテルは曲りなりに造れたものだ。

そんな譯けで、當時の大衆達は、ひどく此の函館屋を珍重がつたと云ふことだ。それも其の筈だ。明治初年相當新らしがり家のインテリでさへ、瓶のキルクを抜くことを知らず、瓶の首の處をコツンとはねて、中の酒を出したと云ふ位ひだつたから、假令、それから五六年も経過した明治十年後のことであつたにしろ、日本の土地で洋酒を飲むと云ふことは、可なり珍しいことであつたに違いない。

其の洋酒の元祖である函館屋は、慥か震災近くまで續いてゐたと思ふが、今日は果してどうなつたか。其の遺族の消息は不明である。

明治初年からの居酒屋と云へば、土橋際にあつた「松田」、こゝは無論、純然たる居酒屋でもあり、其の頃から、ひどく繁昌してゐた店で、よい酒を安く賣ると云ふ點に於て、とても評判されたものだつた。

つまり今日で云へば、「三河屋」に類するもので、實質主義を徹底的に實行してゐたものだ。全く今日の三河屋が、左黨の極樂でもあり、天國でもあるやうに、其の頃の松田は、矢張りプロレタリアの左黨にとつては、娑婆に於ける天國であり、極樂であつたのだ。

殊に、當時の双葉町界限は、此の附近での盛り場でもあつたので、比較的人通りが多く、娑婆で

天國の氣分を味ふには屈竟な場所でもあつた。全く明治時代は、實にのんびりしたもので、どんなに混雜しても、飲み逃げなどをする不心得者は、藥にしたくもなかつたし、又今日のやうに算盤勘定をしながら、ちびくつてゐると云ふ淺間しい連中もなかつたものだ。

とりわけ今日三河屋黨の連中の中には、こんなことまで考へてゐる。と云ふのは、三河屋の酒は、原則としてコップ一杯が二十錢であるが、例外として客の需めに應じ、半杯十錢のものも提供することになつてゐる。處がこゝの掟として、半杯十錢のものには、多少のサービスがつくことになつてゐるので、結局、二十錢のものを一杯飲むよりも、半杯十錢のやつを二杯飲んだ方が、心持ち分量が多くなると云ふので、半杯主義を勵行し、幾杯も飲むと云ふ連中があることだ。

しかし、こゝまで來ると、人間的な淺間しさを泌々と感ぜずには居られない。假令それが酒飲み根性の常とは云へ、餘りにもさむしい心懸けである。だが、これも世の姿であり、移行行く銀座の一つの哀れな姿でもある。

#### (六) 銀座に於ける居酒屋の變遷 (B)

項を改めた處で、銀座に於けるスタンドバーの元祖である函館屋の主人公、木藤氏のことについて

て一言せねばならない。何故なら、此の函館屋は、銀座に於けるスタンドバーの元祖である許りでなく、全日本に於ける元祖でもあり、而かも亦、函館屋が銀座に進出するまでの経緯は、小説以上の複雑な関係を持つものであるから、それ自體が一つの讀み物となるからだ。

全く彼氏の一生は、冒険と獵奇の連続で、誠に奇しき運命を持つて生れた男である。と云ふのは、既に彼氏の青年時代が、冒険を常とする獵師であつた。或る時、彼氏が一人ぼつちで漁船に乗り、奇を求めつゝ沖へくゞと進んで行つたのだつた。

處が、突然風向きが變り、而かも、今まで平和だつた空が、海が、急激に暴風雨の前兆を示し、瞬く間に、大暴風雨に變つて終つた。

「こいちゃ、不可ねえ」と大急ぎで、櫓を漕ぎ出したが、しかし、それは既に遅かつた。空が、海が、恰も大蛇の暴れ狂ふ状のやうに、犇々と面前に被ぶさつて來た。だから小さな漁船は、丁度風船玉を浮べたやうに、ふわ／＼と暴風雨の中に捲き込まれながら、風下へと流されて行つた。

で、彼氏は、最早や、どうすることも出來ず自然の儘に、天運を俟つのみだつた。

全く彼氏が剛腹な獵師でないとしたら、既にその時、氣絶して息が絶えてゐたであらうが、しかし、彼氏は氣絶もせず、自然の儘に流されて行つたものである。

處が、幸なことには、彼氏が流された處が、浦鹽の沖合ひだつたので、丁度其の沖合ひに停泊してゐたロシアの軍艦に助けられ、而かも、其の軍艦内で働かして貰ふことになつたのである。

兎に角、彼氏は、ロシアの軍艦内で生活するやうになると、蔭日和なくよく働いたので、同僚からは勿論、水兵達からも、ひどく可愛がられ、丁法がられ、さまざまのことを教はりもした。又彼氏は、それを熱心に習ひ、研究もしたものだつた。そんな風で彼氏は、ロシアの軍艦内に、凡そ五年も生活してゐたが、聽て大抵の言葉も覚え、又軍艦内の構造其の他のことに付いても、實際上支人に近い程の深い知識を得た。

殊に、異國的な變つたさまざまなことや、珍らしい研究的な事實を會得して來るにつけ、だんだんと故郷の日本が戀しくなつて行つた。それは云ふまでもなく、文明的に無智な日本人の前で、此の素晴らしい文明的な發明を語ることが、如何にも雄々しいことでもあり、又嬉しいことでもあつたからだ。事實そんなことを想像すると、矢も楯も堪らない程、戀しさを増すのであつた。

處が親切なロシアの軍人達は、彼氏の惱みを察し、故郷函館まで送り返へして呉れたものだ。

彼氏が、久方振りで故郷の土を踏んだのは、維新前のことではあつたが、しかし、もうその時は、徳川幕府の威信は地に墮ち、内に外に風雲急なるものを告げてゐた。とりわけ海外との接渉は、其

の頃から、際立つて頻繁となり、ロシア人にして、函館へ入港する者も日々に増加した。しかし、これが通譯を完全にするものがなかつたので、彼氏が歸國すると間もなく、其の通譯に選ばれたものである。

彼氏は、假令軍艦内とは云へ、五六年もロシア人と共に生活してゐたのであるから、無論、其の通譯振りは、水際立つて立派だつた。

だから其の評判は大したもので、函館界隈は云ふまでもなく、遠く江戸にまで彼氏の名が知られるやうになつた。殊に、彼氏が軍艦に對し、特種な知識を持つてゐると云ふので、其の頃、幕府の海軍通として、第一人者であつた榎本武揚氏が、これを聞きつけ、早速彼氏を江戸に呼び寄せ、さまざまのことを訊きたゞして見ると、案の定、特種な知識が豊富であつたから、榎本氏の顧問格となり、同氏の寵愛少なからざるものがあつた。しかし、これが彼氏をして、益々複雑な關係に引きづり込ませた譯けである。

### (七) 銀座に於ける居酒屋の變遷 (C)

榎本武揚氏が、木藤氏を江戸に呼び寄せ、外國の事情や、軍艦の構造や、船の操縦法のことなど

を聞いて見ると、何に分にも外國の船の中で、五六年も苦勞して來た男だけに、却々徹底したことを知つてゐるので、ひどく同氏の氣に入りとなり、而かも、同氏の手足となつて働くことになつた。

處が、間もなく維新の戦争が開始されたので、榎本氏は、當然官軍と戦はねばならなくなつた。そこで榎本氏は、彼に向つて、

「お前も僞り縁で仕方がないから、己れと一緒に官軍と戦つて呉れ」と云つた。そう云はれて見ると、彼氏として斷ることも出來ず、遂に榎本氏の部下となつて、五稜閣に立籠ることになつたのである。

處が、其の頃、榎本氏は、五稜閣に立籠つて官軍と戦ふには、兵器、彈藥、糧食等の準備がなかつた。無論、金さへあれば文句はないのだが、其の金がなかつた爲めに、彼氏は、木藤氏に向つて、「何んとかして金の出來る方法はないだらうか」と相談された。

「そうですね、わしは元來金には縁の薄い方ですから、其の出所なんかは解りませんが、窮後の一策として、たつた一つだけ面白い方法を知つております。それは外でもありませんが、わしはロシアの軍艦にゐる時、鍍金の方法を習つてますので、幾らも鍍金なら出來ますから、どうです一つ鍍

金をして金を造つたら——」

一三六

「うん、そいつは面白い方法だが、しかし、材料が要るだらう、其の材料はどうして得るのだ」  
「丁度、あすこに佛蘭西の軍艦が來てますから、あすこへ行つて頼めば屹度わけて呉れますよ」  
「ぢや、早速行つて頼んで見やうぢやないか」

そこで二人は、フランスの軍艦内に行つて、艦長に會ひ鍍金の藥品を貰つて歸つた。そして、それから木藤氏自ら鍍金に従事し、莫大な鍍金を造り出した。一方其の鍍金を正貨として、小舟で送り、兵器、彈藥、兵糧と交換し、充分に準備を整へたものだった。

そうかうしてゐる中に、函館戦争は開始された。そして、其の結果、味方に利あらずして、とうとう榎本氏と共に獄に投ぜられたものである。

處が、幸ひなことには榎本氏が助かつたので、彼氏も無論、同氏と共に出獄し釋放されたのであつた。そして又、榎本氏が東京へ出て來ると、彼氏も亦、東京へやつて來たのであつた。つまり木藤氏が、再び上京したのは、明治五年で、銀座に大火のあつた年である。

其の後、榎本氏は、明治政府の役人となつたが、しかし、彼氏は、たゞぶらぶらと遊んで居たので、

「どうだ、木藤、お前も何か商賣でもやつたら」と云つた。

「そうですね、わたしもそんなことを考へてはゐたんですが——」

「何か、面白い商賣はないものかね、かう云ふ風に文明開化となつちや、爾來のあり觸れた商賣ぢや面白くないからね」

「わしは洋酒屋をやらうかと思つてゐんですが、どうでせうか」

「そいつは面白いが、しかし、出来るか、お前に」

「大丈夫です、向ふの軍艦にゐる時カクテルの造り方をおそわつてますから」

「そうか、それぢや、早速やるがよい」

丁度其の頃、銀座通りは、モダンな赤煉瓦の商店が建て並び、文明開化の尖端を切りつゝあつた。

「場所はどこにするか」

「無論、銀座がよいと思ひます」

「うん、そして屋號は」

「まだ考へてませんが、いゝ屋號はないでせうか」

一三七

「そうね、函館屋はどうだ」

「函館屋、因縁の深い名ですね」

かうして函館屋は、銀座に現はれたのである。

それから銀座の居酒屋として見直すことの出来ないのが、二丁目の酒場加六である。現在の加六は、兎も角も、其の全盛期とも云ふべき大正時代に於ける加六の勢力は、實に素晴らしいもので、苟しくも銀座に歡心を持つ左黨である以上、上は大臣、警視總監から、下はルンペンプロレタリアに至るまで、加六黨であつたと云ふ素敵な繁昌振りを示してゐたものだつた。

それから前にも一言した如く、現在の居酒屋として、見逃すことの出来ないのが、新驛前の三河屋である。こゝは現在、左黨の極樂として、最も昌へてゐるが、其の客種は千差萬別で、洋服、絆天、前掛けなど入り交り交るの修羅場である。

三河屋に對抗して出来たのが、二三軒おいて角店の森田屋である。森田屋は、三河屋のやうな混雑もなく、又客種も多くは、インテリで、少し落ちついて飲まうと云ふ贅澤な連中は、こゝへ行くのが例である。無論、酒場三河屋と大差はないやうだが、しかし、僕が左黨でない限り、批評の限りでない。

それから京橋三丁目の「しゅせん」。こゝも可なり古い家で、特種な立場に於て、特種な常連を吸引してゐる。殊に、こゝはインテリ向きで、新橋方面の居酒屋と異なり、インテリ中でも、特に課長級のものが多いと云ふのが、こゝの自慢でもあり、又特徴でもある。

わけでもナンセン級の小料理も出来るし、又混雑もなく、ひどく落ちつける静かな家である。こゝの主人公久右衛門氏は、漢學の素養を持った人であるらしく、廣告ピラなど懲つた文章である。

### (八) アイスとピヤホールの元祖

銀座に於けるピヤホールの名は、既に日清戦争後に於て、京橋際の西洋料理店で、これを使つてゐた。つまり西洋料理店の屋號が、ピヤホールであつたのだ。だから忌憚なく云ふと、ピヤホールの名稱がはつきりと解らなかつたらしいのである。何故なら、其の頃のピヤホールには、普通の西洋料理店と少しも異なる處がなく、今日に見るピヤホールらしい點が少しもなかつたからである。

しかし、ピヤホールと云ふ名稱は、銀座は因より東京に於ても、これが元祖で、其の嚆矢を爲すものであつた。それだけに曖昧な意味の下に使はれてゐたのは、寧ろ當然なことでもあつた。曖昧と云へば、其の頃の輸入製造品には、可なり曖昧なものが少くなかつた。

銀座でのアイスクリームの元祖と云へば、多くは資生堂の如く考へられてゐるが、しかし、それよりづつと以前に、函館屋の木藤氏によつて、既に魁されてゐる。

函館屋がアイスクリームを賣り始めたのは、明治十二三年のことで、函館屋が出来てから、餘程経つてからのことである。しかし、それでも東京でアイスクリームを食ふには、こゝへ來なければ、他所には絶対になかつたものだ。

處が、其のアイスクリームたるや頗る曖昧なもので、固い氷が溶け切れないで、こつ／＼の儘玉になつて残つてゐたと云ふから、可なりインチキ性を發揮してゐたものだ。最も當時の大衆達は、それでもひどく珍らしがつて食つたと云ふから天下は泰平である。

大衆と云つた處で、其の頃、アイスクリームを食ふ程の人間は、餘程のハイカラで、時代の最尖端を行くと云ふ所謂、ウルトラモダンボーイであつたのだ。

殊に、函館屋が出来た當座は、洋行歸へりのハイカラ連中が、鐘と太鼓で捜し求め、漸く見つけて集つたと云ふ程だつた。つまり洋行歸へりのハイカラ連中が、其のハイカラを氣どる場所が、廣い東京に函館屋一軒しかなかつたのである。だから大抵の者が、こゝへ來ると、日頃押へてゐるハイカラ氣焰を一時に發散させ、「此の酒は甘い、此のカクテルは安いの高い」と、矢鱈に通がつ

たものだつた。

とりわけその頃、とてもハイカラだつた西園寺侯など、函館屋の常連で、よくこゝに來ては、「此の酒は西洋ウイスキーでとてもいゝ酒なんだ。馬鹿に安く賣つてるぢやないか。其の代り此の酒が少しまづいね」とか色々な講釋をして聞かせてゐたものだ。無論、それは獨り西園寺侯許りでなく、苟しくも洋行歸へりである以上、こゝへ來て講釋をしない者はなかつた位ひだ。だから其の講釋にも随分インチキなものも少くなかつたのは云ふまでもない。

それは兎に角、此の函館屋の主人公は、明治中期後になると、鬚むしやらかな爺さんではあつたが函館屋を開業した當座は、銀座切つてのハイカラと云はれる程の男だつたのだ。

殊に、絶えずマドロスパイプを呷へてゐるのが、大衆の視線の的だつた。最も彼氏が角力のやうに太つてゐたのに、五六年もロシアの軍艦内に生活し、殆ど世界中を廻つて來た程の人だつたから、そうした格好が、びつたりと板についてゐたからでもある。

何れにするも銀座でのアイスクリームは、此の函館屋によつて魁され、普及もされてゐたものだつた。つまり函館屋は、洋酒店ではあつたが、しかし、夏場の副業として、其の尖端を切つた譯けでもある。

其の後、明治三十年後になると、福原資生堂が、アメリカ邊りからソーダファンテンと云ふ機械を輸入し、それを現在の資生堂パーラーの處に備え付け、大々的に賣り出したものである。だから結局、アイスクリームや、ソーダ水を廣く世に普及せしめたものは、云ふまでもなく、福原氏その人である。そして、其の頃の資生堂は、頗る尖端的のもので、ブルジョアのよりよき極樂でもあつた。

## 第五、銀座を彩どる商店と會社

### (一) 銀座の立志傳中の人々

明治初年銀座が東京の咽喉部として、潑刺たる發展を開始し、同時に、商業地として、華々しくデビューしたことは今更述べる必要もないが、全く其の頃の銀座は、一面文明開化の魁の場所であると共に、他面には、輸入發明品を商ふ進歩的な街でもあつた。

そんな譯で、銀座には、特種な成功者も少くないし又會社としても、此の土地で功成つたものも

決して少なくない。

殊に、銀座を舞臺として、大なる成功を爲し、他に移動してゐるものなどを入れたらおそらく數百を數えねばならないであらう。しかし、こゝでは銀座を舞臺として成功し、而かも、現在尙ほ、銀座の土地に踏み止まるものゝみを主眼として書くことにする。

そこで先づ銀座に於ける成功者傳中の人々であるが、しかし、それにしても精神的乃至物質的成功者の二方面から觀察し、これを區別して述べねばならない。最も物質的成功者は同時に又、精神的な成功者であり、精神的成功者は、多くの場合物質的成功者と云ふことになるから、勿論、これは嚴格な意味では區別することが出来ない。

兎に角、こゝでは主として、物質的方面から觀察し、此の方面の成功者を拾ひ出すことにする。そして又、こゝでは料理、飲食店、其の他大衆の歡樂を目的とする設備の經營者に及ぼさない。つまり商業を中心とする大商店と、大會社とを解剖し、紹介することに止めておく。

最もこれ等と雖も、總てを網羅し盡すものではない。其の中でも特に、銀座に産れて、銀座で育ち、銀座で成功して現在に及んだ極く特種なものを選ぶことにする。

とりわけ、僕の著述方法が、如何に興味深い事實であらうとも、決して一つ處で、總てを書き切



らず、興味の均衡上、機會ある毎に書くと言ふのが、石角式の著述方法なのであるから、こゝで書き漏れたからと云つて、粗漏の批難は受けたくない。何故なら、大東京盛り場叢書としての三十幾冊の中銀座に関するものが五冊と云ふ按分になつてゐるから、本稿以外に、既に二冊は發行してゐるし、又未刊のものが、他に二冊残つてゐるから、他の方面から順次解剖し盡す積りである。

何れにするも銀座での成功者傳中の人と云へば、誰れでも先づ時計王の服部金太郎氏を思ひ出すであらう。事實彼氏は物質的には、銀座ピカ一の成功者である。と云ふのは、今二三年も経てば資産一億萬圓の聲を聞くであらう。それ程服部時計店の近況は、好調をたどりつゝあるのだ。しかし其の大成功者の服部金太郎氏も今は故人である。

故人で成功者と云へば、資生堂の福原有信氏も亦、銀座に於ける成功者傳中の指折り株だ、彼氏は、獨り物質的な成功者と云ふ許りでなく、時代の先覺者として、凡ゆる方面に貢献し、殊に、生命保險界にあつては、斯界の重鎮を爲すものでもあり、此の方面の貢献は特に著しいものがあつた。

眞珠王としての御木本幸吉氏。彼氏も亦、銀座での大成功者中の一人で、現に其の資産は一千萬圓と稱されてゐる。しかし、それでゐて、虚を去り實を貴び、徹頭徹尾質朴主義で今尙ほ絹布を身

に纏つたことがないと云ふ現在稀れに見る實質本位の人である。

それから自轉車王としての日米商店の社長、岡崎久次郎氏であるが、彼氏はたゞ銀座を活躍舞臺として成功した人である。しかし、現在尙ほ日米商店の根據が銀座にあるので、矢張り彼氏も、銀座に於ける成功者傳中の人として數えねばならない。

日本に於けるパン屋の元祖、木村屋の先代主人公、木村安兵衛氏も亦、銀座での成功者傳中の人で、殊に、木村屋の名は、全國津々浦々にまで鳴り響いてゐる程有名である。だから彼氏は、獨り物質的な成功者と云ふ許りでなく、時代の先覺者としての貢献者でもある。

食料品店の元祖、龜屋の先代主人公、松本鶴五郎氏。タイプライターの元祖、黒澤商店の主人公黒澤貞次郎氏。伊東屋の社長、伊藤勝太郎氏。陸屋の富澤半四郎氏、それから極く古い處では、丸八商店の松澤八右衛門氏。玉屋の宮田誠之輔氏等々數え出したら殆ど最限がない程である。

又會社としても、銀座で生れ、銀座で功成つた大會社は、決して少くない。わけても新聞社の如きは、其の殆ど總てが銀座に於て功成つたものと云はねばならない。

## (II) 先覺者としての銀座の商店王

銀座は歡樂境である。同時に、東京の心臓としての最も闊達な商品經濟の場所でもある。だから其の商店にして、先覺的存在を有するものが多いのは云ふまでもない。即ち銀座の商店が、東京の元祖としての存在であつたり、他の模範としての存在であるのは、銀座其のものが、東京の心臓でもあり其のメインストリートでもあるからだ。

更らに言葉を換へて云ふならば、銀座は、東京に於ける商人達の檜舞臺で、こゝで洗鍊を受け功成つた人は、無論、商人大學の卒業者で、同時に、名代商人でもある。しかし、それ等の名代商人は血と涙と汗によつて、綴りあげられた奮闘史が秘められてゐる。

殊に、彼等の多くは、時代の先覺者として、時代的な潮流に竿さし、懸命な努力を以て其の潮流に乗り切つたものである。しかし、其の潮流に乗り切るまでには、幾度びか溺れやうとした。又致命的な遭難にも逢つてゐる。だからこれ等の事實を語ることは、後世の商人にとつて活きたる手本でもある。

兎に角、銀座に於ける先覺者としての商人は、其の數決して少くないが、スペースの關係上こゝでは其の一二を例示的に紹介するに止めて置く。

#### ◆堅實をスローガンとする伊東屋

銀座の伊東屋と云へば、苟しくもインテリと稱せられるものであれば、誰れ一人知らぬ者もない程有名な存在である。其の伊東屋のスローガンとする處は、堅實を第一とし、而かも、時代と共に漸進主義によること等である。つまり形式主義を捨て、實質主義により顧客本位を店是とする處の漸進主義者である。

かうした店是を創設した人は云ふまでもなく、現在の社長である處の伊藤勝太郎氏で、其の創業と共に、これを唯一の信條となし、今日に及んだものである。

伊東屋は、今から四十年前の明治中期の開業で、現在存する文具店としては、其の老舗を爲すものであるが、しかし、こゝの店是として、徒らに老舗を誇らず、時代と共に進み、大衆の需要に應ずべく努力しつゝあるのだ。だから或る意味に於ては、消極的な處があり、又他の一面には、積極的な處がある。しかし、それが伊東屋の持つ個性で、同時に又、店是の象徴でもある。

何れにするも、伊東屋が、近代人の渴仰する處のデパート崇仰時代にも拘らず、専門小賣り店として、これ等に向ふに廻し、少しのひけもとらず滔々やつてのける處に、伊東屋の堅實主義が役立ち漸進主義が表示されてゐるからだ。全く此の點は、伊東屋の強味でもあり。又敬服すべき點でも

ある。しかし、以上の如く或る一面に於て、消極的な頑固さを持つてゐるので、ともすると誤解される場合がある。

#### ◆西洋食器屋の元祖十一屋

明治から大正へかけて、十一屋の存在は、とても有名でもあり、又ひどく人氣もあつたものだ。それもその筈だ。十一屋商店は、明治十五年頃淺草茅場町に於て、先代主人公、木村新太郎氏の手によつて創業されたもので、其の頃、十一屋は、ランプと硝子罐の販賣を爲してゐたのであつた。

其の後憲法が發布された明治二十三年に銀座に進出し、つい此の間まで營業をやつてゐた銀座五丁目の表通りに店舗を構へ、矢張りランプ等の販賣をしてゐたものである。が、機を見るに敏な木村氏は、明治三十年爾來の商業を廢し、斷然西洋食器屋に早替りしたものである。

處が、それが素晴らしく人氣を博し、明治から大正にかけて、約三十年間はとても大した儲け方であつた、だから彼氏は、獨り銀座に於ける先覺者と云ふ許りでなく、經濟的にも大なる成功者であつた。が、しかし、明治四十一年になると老朽の故を以て隱居し、二代目新太郎氏によつて、その跡が繼がれ、同時に、十一屋は親戚知己によつて合名組織となり更らに大正十四年には、資本金十萬圓の株式會社組織に變更され、今日に及んだものである。今日の十一屋は、銀座二丁目の元惠

美壽屋足袋店の跡に新らしい營業所を構えてゐる。

#### (三) 大倉銃砲店から大倉組

明治三十年後に於ける大倉銃砲店と云へば、全國的にとても有名なものだつた。何がそれ程有名にしたか。無論チャーナリズムの力である。新聞廣告のお蔭である。

全く其の頃の大倉銃砲店は、よく廣告をしてゐたものだ。とりうち帽子を被ぶり、銃を擔げて、獵に出かけんとする圖、鳥をねらつて、今正に發砲せんとする圖。子供の好きさうな廣告が矢鱈に出てるものだ。そして、其の頃は、村田銃の流行時代だつたので、其の名も高き村田銃なんて變んな文章など登場して、頗る賑々しいものだつた。

そこで村田銃は、果して何時頃からのものか。これに關聯して、小銃の由來を一言しておかう。

諸子も知られる如く、我が國へ始めて小銃が由來したのはとても古い話で西曆千五百四十三年のことだ、日本の天文十三年に相當する。つまり其の年、大隅の住人である種ヶ島時堯が、葡萄牙人から得たのが、そも／＼その嚆矢を爲すのである。その後、種ヶ島によつて普及宣傳されたもので人は誰れ云ふとなく小銃を稱して種ヶ島と呼ぶやうになつたのである。

それからづゝと越えて、天保年間になると、和蘭からゲヴェールと云ふ小銃が輸入されて來た。勿論、それは種ヶ島よりも、巧妙なものであつたが、しかし、大衆の頭には、小銃と云へば種ヶ島と云ふ風に考へられてゐたので、それすらも種ヶ島の名を以て呼んでゐたものだつた。

其の後、維新の大業が遂げられ、明治政府の時代となるや革新に次々に革新が行はれ、殊に、明治四年には、常備軍が編成されるに至つたので、同六年には、歩兵用の小銃として英國製のスナイドル銃が輸入され、而かも、騎兵砲兵用の小銃として、米國製のスペンサー銃も輸入されてゐる。

それから明治十三年には、村田銃が制定され、同三十年には、歩兵銃の制定を見、同三十八年には、三八式歩兵銃同四十四年には四四式騎兵銃が制定されてゐる。かう云ふ風に、軍隊に於ける小銃は著しい勢で進歩し、改良されて行つた。だから従つて民間に於ける小銃も亦、年と共に進歩し改良されてよりよきものが漸次販賣されてゐたのは云ふまでもない。

とりわけ明治三十年に、歩兵銃が制定されたことによつて爾來、歩兵用として使用されてゐた村田銃が、一般民間に於て、其の取引が許されたのは云ふまでもない。

殊に、人斬り庖丁としての刀でしこたま儲けた大倉喜八郎氏が、こゝに眼をつけて、大倉銃砲店を銀座の街に開いたのは、寧ろ當然なことで、彼氏の聰明さも、矢張り此の點にあるのだ。

兎に角、其の頃の大倉銃砲店は、京橋館屋町で現在銀座四丁目の二つ目の裏通りの處である。

大倉氏は又、大倉組なるものを組織し、土木建築其の他の請負工事を業としてゐたものだ。即ち今日の大倉組合名會社の前身がそれである。最も現在では、土木は別に一會社を組成し、大倉土木株式會社となつてゐる。

此の外に大倉系の會社を挙げると、大倉鑛山株式會社、大倉商事株式會社、大倉火災海上保險株式會社、大倉製絲株式會社、大倉スマトラ株式會社、大倉ビルディング株式會社等であつて、其の社長は多く、喜八郎男の嫡男喜七郎氏である。

何れによるも現在の状態から、過去三十年前を顧みると、全く夢のやうな成功振りである。しかし、それもその筈だ今日大倉喜七郎氏と云へば、日本の金満家中で、十指を指折る大資産家で其の一家は、又素晴らしいものである。だから銀座を舞臺として成功した人と云へば、先づ第一に大倉男をあげねばならない。

それから銀座に於けるビルディングの元祖と云へば、無論、此の大倉組の本社で、現在尙ほ二丁目の角に昔ながらの姿を現はしてゐる。此のビルは、慥か明治末期のもので、東京に於てもビルとしては古參に屬するものだ。しかし、今日の用語として用ひられてゐる貸事務所を目的とするビルで

はなくて、専ら本社の營業所として建てられたものであるのは云ふまでもない。

#### (四) タイプライターの元祖

銀座は凡ゆるものゝ元祖から成り立つてゐる。元祖のバラエティーでもある。それは何故か、云ふまでもなく銀座が、流行の魁を爲す場所であるからだ。

元祖と云へば六丁目の黒澤商店も元祖の一つで、銀座は因より、全日本に於けるタイプライターの嚆矢を爲すものである。

殊に、黒澤貞次郎氏は、一商人としての、單なる成功者と云ふ許りでなく、特種な方面に於て、模範とするに足る事實が少くない。だから僕は、後世商人の爲めに、同氏の人となりを紹介せんとするものである。最も物質的方面に於ける成功者としても、銀座で指折り株で、而かも、僅か三十五年の間に、百萬内外の資産を礎きあげてゐるから、單に此の點だけでも成功傳中の人と云はねばならぬ。

とりわけ彼氏は、明治二十四年十七歳の時、青雲の志を抱いて渡米した。無論、學資を供給された留學生と云ふやうな悠長なものではなく、凡ゆる苦難と闘ひ、苦學力行の結果、成功せんとする

期待の下に洋行の途にいたのであるから、其の間の苦闘は、思ひ半ばに過ぎるものがある。最も其の時彼氏と共に、渡米した者に、元星製藥株式會社の社長星一氏があり、東京興信所長の中村氏があり、更らに、富士瓦斯紡績株式會社の名取和作氏等があるが、しかし、それにしても僅か十七歳の少年が異國の地で苦學することは、可なり大きな犠牲と云はねばならない。

殊に、彼氏は、其の中でも烈しい苦難と戦ひ、凡ゆる辛酸を嘗め盡してゐる。例へばパンに窮した時など、幾日もく／＼バナ、のみを嚙り、からくも命をつないでゐたなど、決して、珍らしいことではなかつた。しかし、彼氏は、そうした堪えがたい苦痛に遭つても未塵もたゆむ心など起さうとはしなかつた。否、そうした忍び得られない困難に遭ふ度び毎、彼氏は、益々克苦奮闘し故郷の空に向つて、必ず錦を飾つて歸朝することを契つたものだ。

かうして彼氏は、十年の間、克く勉め克く働いた。そして、見事初心を貫徹すると、二十七歳にして、錦を飾り無事に歸朝したのである。

歸朝すると間もなく、慥か明治三十五年だと思ふが、兎に角、彼氏が、在米中、特種な關係にあつた I. C. Smith 會社の日本に於ける總代理店として活躍するやうになつたのである。つまりこれが、銀座に於て黒澤商店なるものが出來たそも／＼の始まりである。

何れにするも、黒澤貞次郎氏は、純粹の江戸ツ兒で、明治八年一月五日、黒澤慶助氏の長男として生れ、米國から歸朝し、銀座に店舗を構えると同時に、家督を相続してゐる。

現在尙ほ黒澤商店は、個人經營で、タイプライター及び事務用器具の輸入製造販賣を業とし、目下五千二百九十六圓の所得税を納めてゐる。

昭和六年が、開店三十年に相當してゐたので、現在樞密顧問官の重職にある石井菊次郎子が、嘗つて外務省の電信課長たりし頃、同氏が歐文タイプライター一臺を買ひあげたのが、同店として商賣の皮切りだつたので、其の恩義に報ゆる爲め開店滿三十年を期し、記念として同子爵に、タイプライターを贈呈したなどは、律義を尊ばねばならない商人として、誠に結構な試みと云はねばならぬ。

殊に、同氏は、蒲田區御園町に、模範的な工場を有し、貳百人からの職工を使用してゐるが、他の資本家と異なり、總てが家族的な取扱ひで、特に職工達の爲めに、近代的な最も氣持のよい文化アパートを建設し、職工達の家族を永住させてゐる許りか、其の子女を教育させる爲めに、小學校と幼稚園とを建築し、理想的な訓育を施しつゝあることなど世間周知の事實だ。

わけても初代の校長某氏の如きは、黒澤氏が私財を投じ、歐米各國に於ける兒童教育に就いて視

察させ職工達の子女の教育をして、最も理想化さんとする處など、他に其の例を見ざるものである。

更らに今一つ敬服すべきことは、嘗つて蒲田町に水道が施設されない當時、其の水質が甚だ寒心に堪えないものがあると云ふので、職工達の衛生を考慮し、巨費を抛うち直接多摩川から水を取り入れたので、當時、喧しい問題となつたものだ。事實其の頃、内相であつた故床次竹二郎氏など、懇々同工場へ見學に出かけたものだつた。

總てがこんな風であるから、正義人道と云ふことに就いては極力強調されるし、又實際に於てもどん／＼行はれてもゐる。それに彼は頭腦もよし腕も確乎りしてゐるので、大學出の連中など、外國取引に關する文章などへマなものを作ると、黙つてゐて原稿なしにポン／＼と叩き「かう云ふ風に書くんですよ」とやられるので、どうにも頭があらぬと云ふことだ。

同氏は又子福長者で、三男四女を有し、長男敬一氏は、ケンブリッジ大學を卒業し、目下銀座の本店に出勤してゐる。又三男張三氏は、横濱高工を卒業し、蒲田の工場に勤めてゐる。二男草二氏は目下ニュージランド大學に在學中で、皆それ／＼優秀な人物である。つまり此の親にして、此の子ありだ。

現在、銀座に於ける黒澤商店の建物は、明治末期、二丁目の大倉ビルと相前後して建てられたビ

ルで、大倉ビルと共に銀座での元祖を爲すものだ。無論、震災に焼け残つたビルの一つで、震災後  
 龜屋食料品店が此の階下を暫らく借りてゐたことがあつた。

### (五) 銀座の純日本菓子屋の變遷

銀座に於ける純日本の菓子舗と云へば、青柳に、筑紫が、其の代表的なものである。青柳は江戸  
 時代からの店で、其の始めは、八官町の小林時計店の横町で營業してゐたものであるが、明治十幾  
 年かに、現在の場所である南金六町へ進出し、安賣りを始めた爲めに、素晴らしい人氣を博するに  
 至つたものである。

全く明治時代に於ける青柳は、恰も銀座の名物の如くとても有名なものであつた。事實、明治末  
 期頃になつても、きんつばの安賣りの爲めに、門前市を爲すの盛況を呈してゐたものだつた。だか  
 ら今日と雖、菓子屋の青柳と云へば、誰れ知らぬ者もない程、賣名的に成功してゐる。しかし、八  
 官町時代の青柳は、無論、有名な存在ではなく、溝際のお、やかな菓子舗に過ぎなかつたものだ。  
 氏が一度び煉瓦地へ進出し、種々なる工作の下に、最中、きんつばなどの安賣りを始めた爲めに  
 其の聲名は忽ちにして、全東京を風靡するに至つたのである。

青柳に次いで有名なのが、銀座風月堂であるが、しかし、こゝは純日本菓子専門ではなく、寧ろ  
 西洋菓子が、其の看板に屬してゐる。殊に、先代主人公は洋行歸へりのちやきくで、同時に、西  
 洋菓子屋の元祖でもある。風月堂に就いては既に他の方面から述べたから省略する。

處で、筑紫は、青柳と共に煉瓦地時代からの菓子屋で、其の始め九州筑紫の人が、開業したもの  
 であるから、其の名も筑紫と命名されたものであつて、世間に噂されてゐるやうに中小路藤子爵が  
 名附けたものではないのである。しかし、世間ではそう云ふ風に考へてゐる者が少くない。即ち初  
 代木津善五郎氏が、中小路子と別戀の間柄であつた關係上、彼氏が、筑紫の家號をつけ、而かも、  
 筑紫を後援して來たものであるかの如く誤信してゐる向きが少くないのだ。

最も先代木津善五郎氏と、中小路子とは、別戀の間柄でもあり、又さまざまと後援をして來たこ  
 とは事實に間違ひがない。殊に、木津氏が明治二十八年四月、菓子屋の筑紫を引受けたことも、中  
 小路子のすゝめによつたもので、而かも、其の頃、遞信次官かなんかをやつてゐた中小路藤子は、  
 更らに木津氏を遞信省に紹介し、其の御用商人と爲してゐるなど、蔭となり日向となつて、後援し  
 てゐたものである。

兎に角、初代木津善五郎氏は三重縣の産で、中小路子のすゝめにより、菓子屋としての筑紫を引

受けたのであるが、其の頃、筑紫は青柳の勢力にすつかり押され、どうにもならないまでになつてゐたのである。と云ふのは、當時、青柳は其の全盛を謳はれてゐた時でもあつたので、其の人氣は全く素晴らしく、物凄い物であつた。

それなのに、其の青柳から僅か二三丁離れた處の筑紫を引受けたのであるから、此の人氣を向ふに廻して戦ふことは、可なりの冒険でもあり、又並大抵の苦勞ではなかつた筈だ。

しかし、木津氏は、黄金瀧と云ふ菓子を表看板として、一方遞信省の御用達を勤め、續いて鐵道院にも出入りをするやうになつたので、官界方面を唯一の得意として、着々と發展の翼を擴げて行つたものである。此の黄金瀧と云ふのは、現在も尙ほ東饅頭「ちぐさ」と共に筑紫の看板菓子となつてゐる。わけでも黄金瀧は、登録商標を受け、こゝの專賣の菓子でもある。

現在の筑紫は、銀座の純日本菓子舗として、青柳と共に、其の老舗に屬し、一流の菓子屋として、押しも押されもしない店でもあるし、又一方官家や諸官衙の御用達を勤め、可なり手廣く發展してゐるし、殊にこゝの特徴とする處は、菓子の入れ物に就いて、多大なる犠牲を拂つてゐることだ。全く其の入れ物の奇抜なことにかけては、大東京中での唯一の店である。例へば籠とか、乃至は又重箱に類する器具と云つたやうなものを態々各産地に出かけて迄徹頭徹尾變つたものを蒐めて來る

といふ熱心振りである。従つて筑紫には、随分變つた入れ物がある。スマートなもの、グロテスクなもの、美しいもの、變ちきなもの、等々、菓子箱だけでも何百種と云ふものを蒐めてゐる。

わけでも籠などになると、其の産地である攝津、三河、近江、丹波、丹後等竹の産地に出かけて漁つて來るのが常となつてゐる。で、籠にも随分さまざまの種類のがあるので、同じ菓子を盛つても全然異なるものゝやうに見せてゐる。だから筑紫の菓子は、奇を好む上流家庭や、獵奇を求めるものには、ことの外歓迎されてゐる。

現在の主人、木津善五郎氏は、二代目に當り、儲か養子だと思ふが、とても従順で、百人向きのする人だ。又ひどく奮闘家でもある。

#### (六) 銀座を舞臺として成功した會社(A)

明治中期頃は、我が國の資本主義的建設の第二期に相當してゐたので、凡ゆる會社や銀行が、恰も雨後の筍の如く、次々と殆ど間斷もなく出來たものだ。だから僕は、此の時代を稱し、假に會社銀行亂立時代と呼んでゐる。

わけでも其の頃、最も潤達な發展を開始しつゝあつた銀座界限にあつては、ことに著しく、殆ど



會社銀行、並びに新聞社街の感さへ抱かせたものだ。しかし、此のことは既に他方面に於て述べた處であるから省略するが、兎に角、此の頃から、銀座に於て設立され、而かも、今日尙ほ銀座に存する會社としては、案外其の数が少なく、就中、明治三十年頃からの會社銀行としては、全く指折り數える程である。

最も其の頃、未だ會社組織になつてゐなかつたり、又其の名稱が幾度びか變つて現在に及んでゐるものも少なくないが、しかし、當時銀座で創立された會社にして、其の多くが丸の内其の他の銀行會社街へ引越してゐるのは、争はれない事實である。例へば當時、資本金二百萬圓で創立された三井鑛山合名會社の如きも、銀座の一廓である山城町に於て産れてゐる。

又資本金五十萬圓で創立された歌舞伎座會社の如きも、今日は松竹株式會社に歸屬し當時を偲ぶ何ものもない。

處が、獨り第一徴兵保險株式會社だけは、銀座で生れ、銀座で育ち、更らに銀座で大なる成功を爲し、創立當時の名稱すら殆ど其の儘で、單に第一の二字を冠したに過ぎない。最も同社にしても或る一定の時間、日本橋吳服町に引越してはゐるが、しかし、それはほんの一時的のことで、間もなく現在の新肴町へ戻つてゐる。

とりわけ同社は、日本に於ける徴兵保險の嚆矢を爲すものでもあり、又全國に涉り二萬人からの使用人を有する大會社でもあるから、僕は此の會社を以て、銀座に於ける代表的會社として、詳細な調査を爲し、其の變遷發達の道程を明かにせんとするものである。それは何故か。本書の目的が凡ゆるものゝ元祖を調べ、これを紹介し解剖することを一つの目的としてゐるからだ。

そこで先づ同社が創立されんとした動機であるが、これを一言にして云ひ現はすなら、時恰も日清戰爭直後のことゝて國民大衆は、多くの生靈を犠牲にし、而かも、出征軍人の家族達が物質的に餘りにも惨めで、其の日の暮しにも困ると云ふ悲惨事を幾多見せつけられた爲め、これでは第一出征する者が、心懸りで國家の爲めに、誠心誠意精勤をぬきんづることが出来ないであらうし、又家族としても、餘りにも残酷であるから、かうした場合に於ける用意として、半ば強制的に職金しておく方法を欲したことにある。

つまり當時は國家主義の最も旺盛な時であつたから、何等の懸念もなく、御國の爲めに全力を捧げて盡したい。家族のことを忘れて義勇奉公がしたい。又させもしたいと云ふ赤誠から、ほとばしつた要求でもあつたのだ。

そして、その現はれば、その必要と共に、各地方に於て、生命保險に類似した事業——つまり類

似保険が勃興したこと、又他には保険に模した相互救済方法が計畫され、これが實行されてゐたこと等が、其の直接の原因となつたのである。そして、其の結果、遂には大仕掛けの徴兵保險會社の設立を企畫する者が現はれたのである。

其の動機を興へた人は、滋賀縣蒲生郡武佐村の助役を勤めてゐた成田文吉氏と云ふ人だつた。成田氏は、これを計畫すると、縣下に於て最も聲望の高い寺村富榮氏にこれを謀つた。寺村氏は、成田氏の企畫が時宜に適したものであることをさとると、直ちに成田氏と共に上京し、其の頃、我が國の保險界に於て、大いに氣を吐きつゝあつた栗津博士を訪づれ、徴兵保險の組織制度の考案を依頼したものであつた。が、しかし、同氏は其の頃、農商務省の囑託として、斯業の研究中であつたので、無論、會社の創立に就いて直接關係することは出来ないが、學理上の調査と、其の構成には盡力すると云ふことを諾したのであつた。

處が、其の頃、我が國と同じやうに、嚴正な徴兵制度をとつてゐる國と云へば、獨逸、伊太利、匈我利の三國に過ぎなかつた。だから従つて、徴兵保險に關する文献其の他参考に供すべきものは極めて微々たるもので、到底理想に近いものなど手に這入る筈がなかつた。

今更ら云ふまでもなく、保險は、生命保險にしる、損害保險にしる、其の損害を填補する處の數

理的基礎、つまり統計より割り出されるチルメンが確定してゐないことには、どうにもなるものではない。處が、それ等の殆ど總てが得られなかつたのである。だから栗津氏は、陸軍方面の材料と生命保險に關する理論とを以て、徴兵保險の法律的乃至數理的基礎をつくりあげたのである。

で、此の意味に於て、栗津博士は、我國に於ける徴兵保險の最古の貢獻者と云はねばならない。と云ふのは、これが一つの基礎となつて、徴兵保險株式會社なるものが産れたからである。

### (七) 銀座を舞臺として成功した會社(B)

徴兵保險が創立されんとした下準備は、先づ大體以上の如くであるが、しかし、これは單なる基礎工事で、土臺を据えたに過ぎない。だから此の上に大黒柱を建て、而かも、幾多の柱と共に、桁も梁もなければならぬ。そこで先づ寺村氏は、當時、新進氣鋭の實業家として知られてゐた岡田治衛武氏にこれを謀つた。同氏は、元山口縣の素封家でもあり、而かも、眞宗信徒生命保險會社(ついで此の間まで共和生命と云ふ)の創立發起人として盡粹した程の人でもあるから、保險に就いては相當の知識もあり、又信仰から叩き上げた社會觀道德觀の發達した人でもあつたから、徴兵保險の發起人としては、稀に見る適任者であつた。

果せる哉、岡田氏は、該保險が富國強兵に貢献すべき重要な事業として、双手をあげて賛成し、寺村成田の兩氏と共に、先づ安田善次郎氏を訪づれ、該保險の社會的に重要な事業であることを説いて賛同を求めたが、しかし、同氏はそれに賛同しなかつた。

そこで岡田氏は、更に方向を替へて、松浦伯爵、有島武、鎌田勝太郎、野村恒造、佐竹作太郎、根津嘉一郎、小林近一、馬越恭平、若宮正音、三宅豹三氏等を説き賛成を得たので直ちに、これ等の人々を創立發起人とし、明治二十九年、農商務省に發起認可の申請をし、其の認可を受けると共に、會社を創立して、愈々事業を開始しやうと云ふ段になると、突如として社長に擬せられてゐた松浦伯が逝去したのである。

處が、これが一つの動機となつて、事業の經營に就いて、幹部が二派に分れた。つまり其の一派は保險の性質が、營利を目的とするものでないから、全然非營利主義を準據して事業を開始すべきものだと思ふのであつた。他の一派は、これに反して、全く營利事業とし、株式會社組織で打つて出ようと云ふのであつた。そして、其の二派が、相呼應し少しも譲らなかつた爲めに、事業に着手せざる前に解散のうきめを見ねばならなくなつた。

しかし、岡田氏はかうした、挫折にも屈せず再び同志を糾合し、以前の發起人中、野村、鎌田、

佐竹、小林、根津氏等と共に發起人となり、而かも、山縣有朋公の贊助を得て、明治三十年七月主務省に發起認可を申請し、その認可を待つて、翌三十一年五月一日事業に着手することになつたのである。つまりこれが、今日の第一徵兵保險株式會社で、始めて此の世に生を承け、オギヤの初聲をあげたことにもなり、同時に又、日本に於て、徵兵保險なるものが由來したそもくの嚆矢でもあるのだ。

兎に角、創業當時の會社の所在地は京橋區彌左衛門町であつたが、其の後、日露戦争直後には、日本橋區吳服町に移り、更らに大正時代に入ると、京橋區新肴町に戻り、而かも、大正十四年四月には、銀座三丁目（現在デパート松屋）の大ビルディングが工竣ると共に、同所に移轉し、更らに昭和五年新装成れる現在のビルディングに移つたものである。現在の場所は舊名を新肴町と云ひ、大正中期頃、營業してゐた場所で、其の建物の大小の差異はあつても、結局は、元の古巢へ歸つたことになるのである。

銀座三丁目のビルディングは、現在デパート松屋となつてゐるが、始めて松屋が賃借した當座は、其の家賃が僅か年額五十萬圓だつたと記憶してゐる。しかし、今日は何んでも何年かの年賦かなんかで買取つたことになつてゐるやうだが、詳しいことは解らない。しかし、何れにしても素晴らし

い建物で、銀座の美観を代表する大ビルディングでもある。

殊に、現在本社の營業所となつてゐる銀座ビルディングは、最近の竣工にかゝるものであるだけにとてもモダンで、其の美観は一層増されてゐる。それもその筈である。建物の面積が延坪にして、千七百餘坪あり、地下を入れると都合十階になり、而かも、八階のバラベツトまでが九十六尺餘もあり、わけても構造並びに設備は、極めて理想的なものが多い。

### (八) 銀座を舞臺として成功した會社(C)

そこで此度は、會社の機關の方面であるが、創業當時の社長は、云ふまでもなく岡田治衛武氏であつたが、其の後、明治三十七年五月になると、當時、日本赤十字社の副總裁をやつてゐた小澤男爵が、岡田氏に代つて社長となつた。次いで同四十二年には、現在社長である處の太田清藏氏が専務取締役に就任したので、小澤社長は、改めて總裁となつた譯けだが、しかし、其の實權は太田専務に移つたことになるのだ。と云ふのは、其の頃日露戦役後のことで、本來なら徴兵に關する事業は旺んでなければならぬにも拘らず、案外不振で、どちらかと云ふと、經營困難と云ふ立場にあつたのでこれを挽回せしめんが爲めに、新進氣鋭の太田氏を専務に据えた譯であつたからだ。

太田氏は、九州福岡の産で、實家は素封家でもあり、又酒造家として、多額納稅者でもあつた。しかし、彼氏が單獨で實業界方面に乗り出したのは、これがそも／＼の始まりで、試練場としての大切な舞臺でもあつたのだ。

處が、彼氏が専務になると間もなく、社運は、急轉直下の勢ひでぐん／＼として行つた。

これは一體どう云ふ譯けかと云ふに、元來、保險事業なるものは、一面に於て、堅實を必要とするのは云ふまでもないが、しかし、其の半面にあつては、他の事業以上に、能動的に働きかけることが、最も肝要な事實である。殊に當時にあつては、大衆の思想が幼稚で、保險に關する知識の持ち合せがない上に、何等の根據もない迷信が、徒らに流布してゐた時代であつたから積極的に働きかけることが、何よりも肝要なことであつた。太田専務は、其の間の事情に精進し、一面堅實を強調すると共に、他面には出來得る限り積極的な營業方針で打つて出たのである。だから其の營業方針は時代にふさわしく、事業に適してゐた爲め、爾來の不成績を挽回した許りか、事業はうわ押しにぐん／＼として行つたのである。で、大正九年には、契約高が一億圓を突破するの盛況を見るに至つたのである。

とりわけ大正十年には、銀座三丁目に、總工費五百萬圓の豫算を以て、銀座ビルディングの建設工

事に着手し、同十四年に工を竣えりと、本社をこゝに移し、其の名も第一徴兵保険株式會社と改稱し、一層事業の進展に努力し、今日に及んだものである。

因に昭和十一年十一月末現在の總契約高は八十九萬六千八百五十九件、五億九千七十一萬餘圓となつてゐるので、日本の總保險會社中の五大會社の一に列する大會社で、徴兵保險會社としては、其の元祖たると同時に、第一位にあるのは云ふまでもない。

現在同社の營業課目は、徴兵保險と生存保險、これは二つとも子供の保險で、生存保險は教育又は結婚の爲めの保險で、文化の進展と共に、益々其の需要が多くなるであらう。

兎に角、此の二つの保險は、第一徴兵保險株式會社の重要な事業で、つまり表看板であるが、更に同社は又、嘗つて、一代の人氣男星一氏が社長たりし戦友共濟保險株式會社の事業一切を引受け繼續してゐるので、以上の外に戦友共濟保險と、護國養老保險の二つがある。

同社は又、最近國家事業乃至社會事業にも貢献する處が少くない、がしかし、其の中でも昭和九年十月には、靖國神社に神門を寄附してゐる、これは當時の新聞紙によつて多く書かれてゐるので諸子の中には記憶される方もあらうが、一會社が獨力を以つて總工費十五萬圓を要する神門を寄附したことは、特筆すべき事項である。

それから現在の役員であるが、社長は無論太田清藏氏であり、而かも、其の令息新吉氏は常務取締役の筆頭であるが、彼氏は、青年實業家として斯界から將來を宿望されてゐる。

## 第六、 歡樂境銀座八丁の變遷發達

### (一) 震災後に於ける銀座八丁

歡樂境銀座は、何んと云つても震災後に於けるもので、つまり第三期完成が、震災後に於て始めて達成されたのである。だからそれ以前の銀座は、歡樂境と云ふよりも、寧ろ濶達な商業地であつたと云はねばならない。

殊に表通りなど名實共に、商業地で、歡樂街としての設備は、至つて微弱なもので、カフェーの如きライオン其の他二三を數えるに過ぎなかつた。

現に小松食堂の如き、今日でこそ大衆食堂として、どこにも其の新らしさを見出すことが出來ないが、震災前にあつては、これがモダンな食堂として目されてゐた程であるから。従つて其の間の

事情も窺ひ知ることが出来るであらう。

まして喫茶店の如きに至つては、臺灣喫茶店などが、巾を利かしてゐた當時であるから、其の貧弱さは押して知るべしだ。

又日本料理にしても、表通りに於けるものは、裏通りよりも却つて、其の質が落ちたものだ。最も鳥料理の如き、可なり高級なものもないではなかつたが、しかし、それにしても裏通りに比べるゝと大衆的な傾向を多分に持ち合せてゐた。

洋食にしてもそうした傾向があつた。殊に、お座敷洋食屋の元祖としての隠豪家の如き、特種なものは、總て裏通りに於て發達したものだ。此の隠豪家の如き、明治中期頃の開業で、純日本式なお座敷で、うまい洋食を食はせると云ふ處に特徴を以て産れたものである。

今日でこそ隠豪家と云へば、俗に云ふインゴウを表示するものゝ如く考へられてゐるが、其の實開業當時にあつては豪傑が隠れて洋食を食ふ家と云ふ意味で命名されたもので、何んでも此の屋號をつけたものが、時の大官伊藤博文公だと云ふことだが、少くとも隠豪家の文字からしても、伊藤公がつけそうな屋號である。

現に震災前まで、伊藤公の揮毫になる看板があつたが措しいことには、震災で跡方もなく焼けて

終つた。

兎に角、かう云ふ風な歴史を持つてゐる家であるから、今日假令、其の經營者が變つてゐようと、永い間の因縁關係上今尚ほ大官達が時々やつて来て、こゝの自慢である處のピフテキに舌打ちつゝある。

無論、これは單なる一例に過ぎないが、其の頃の銀ブラ黨は、表通りで食事をするのを餘り喜ばない傾向があつた。少くとも上流社會の人達は厭に羞み家で隠れて食事をするのが常だつた。最もこれには他にも有力な理由がある。つまり其の頃は、まだ階級制度が、嚴として行はれてゐた爲めに、平民共と食事を俱にすることが、何んとなん威嚴を傷けるやうな氣がしてならなかつたのだ。だから自然彼等は、人の餘り氣のつかない裏通りの特種な料亭を選んだものである。

そんな譯けで、表通りには、大規模なカフェーとか、乃至は、大衆を目標とする處の肉屋以外には餘り高級な特種な、食堂はなかつたものだ。無論、今日でもそうした傾向はないではないが、しかし、今日の狀態は、そうした理由によるものではなくて、表と裏の大衆層を異にするによつて生ずる差である。

それは兎に角、銀座八丁は、震災を境とし、斷然、歡樂境たる資格を獲得した。殊に、デパート

松屋の銀座進出をきっかけに、松坂屋、三越と次々にデパート進出が試みられたことによつて、銀座の繁昌は、一層助長されるに至つた。そして、其の半面には、銀座が昌へれば昌へる程、歓樂境としての銀座が益々濃厚さを加へて行つた。これは寧ろ當然なことで如何なる盛り場でも、商業一點張りでは、決して昌へるものではない。其の裏面を彩どる處の歡樂場所があつてこそ異想外の發展をなすのである。無論、銀座も其の例に洩れない。

今それ等の發展機構を知る爲めに、小暮君が調査された處のパンフレットを参考とし更らに自ら調査を爲し一丁目毎に詳細解剖して、其の變遷狀態を説明しやう。

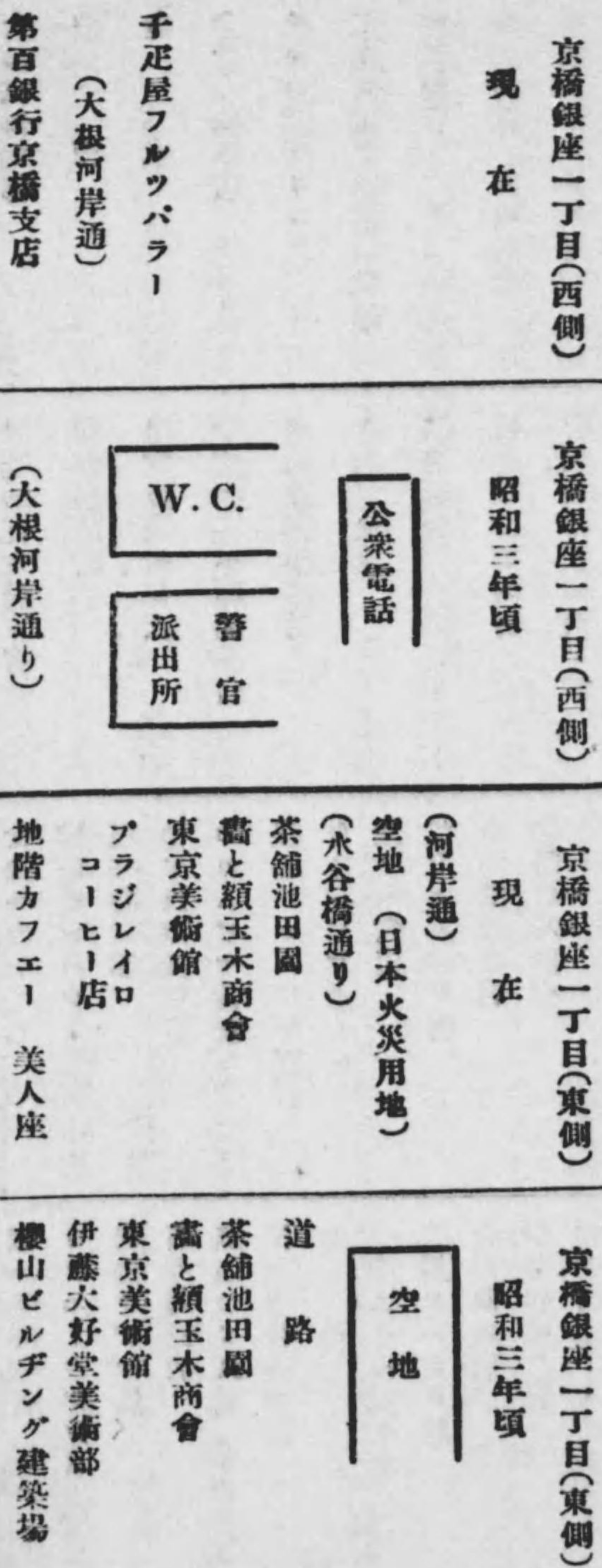
### (二) 銀座一丁目の機構と變遷

所謂、銀座八丁の中で、歡樂境としての要素が稀薄なのは、何んと云つても一丁目である。事實一丁目は、他のどこよりも、料理飲食店の數に於ても少なく私の調査によると、東西兩側を入れて五十二軒しかない。最も大カフェーとしては、大根河岸の千疋屋フルツバラ、キリンピヤホールとの二軒があり、而かもレストランでは、高級なヤマトがあり、又喫茶店としては、ブラヂレイロヤ、ギンバレーヤ、ABC食堂の如き可なり大規模なものがあるが、しかし、それにしても全體か

ら見ると歡樂境の設備に於て、他の丁目に劣る處がある。

處で、これを表通りに就いて、過去七八年間に於ける變遷狀態を見るに、そこには可なり激しい移り變りがある。

全く僅かに七八年間ではあるが、斯くも激しい變化を示してゐるのは、過去に於ける銀座が、歡樂境建設の最後を飾るものであることを物語るものでもある。



大銀風俱樂部	川崎第百京橋支店	食堂みのや	銀座堂時計店
帯源	帯源銀座店	喫茶ギンペレー	カフェーパツカス
空家	旭電氣株式会社	石井時計店	田邊ラヂオ店
(九十)陶器店	(九十)小柳陶器店	つゞれ屋織物店	石井時計店
チキン、グリル	西村象彦漆器店	コロムビヤ食堂	銀座つゞれ屋
三光堂蓄音器部 靴部	銀座三光堂	銀座コロムビヤ賣店	日本蓄音器支店
谷澤靴店	谷澤靴店	キリンビヤホール	空地
株式会社 山崎商店	貴金屬山崎商店	佐々木商店	つやふきん佐々木
鷺塚高等ダンス店	鷺塚高等筆筒店	益川エハガキ店	益川エハガキ店
日東蓄音器東京營業所	日東蓄音器	金田屋眼鏡店	金田眼鏡店
陸屋敷物店	敷物室内裝飾陸屋	伊勢伊時計店	伊勢伊時計店
洋服三新商會	三新洋服店	銀座アスター	支那料理アスター
安田銀行銀座支店	安田銀行支店	陶雅堂陶器店	陶雅堂陶器店
		吾妻屋洋品店	吾妻屋洋品店
		伊藤書畫道具店	伊藤書畫道具店
		銀座の大新	金ふら大新
		トラヤ帽子店	改築中

比較的歡樂境としての成分に、稀薄な一丁目ですら既に以上の如き、大なる變化がある。即ち西

側に就いてこれを見るも旭電氣會社が、喫茶サンパウとなり又喫茶銀座となり、單に「銀」ともなり、今又空家となつてゐる。一軒おいて西村象彦が、チキングリルとなつてゐる。

更らに東側になると、これ以上の變化がある。即ち伊藤大好堂がなくなり、櫻田ビルデングが出来て其の地階が、ブラチレイロコーヒー店となり、而かも、田邊ラヂオの店跡が、食堂のみのやだと思ふし、日本蓄音器店が、喫茶コロムビヤであつたが、今日では代が替つて——となり、更らに空地であつた處に、ビルデングが出来て、それが淺野式の經營する處のカフェーユニオンとなり、其の後岡本氏の經營となつてマルと改稱され、今又キリンビヤホールとなつてゐる如く、ここ七八年間には、可なり眩まぐるしい變遷を示しつゝある。

最も佐々木商店以下には、一軒も變つてゐないが、しかし、それにしても全體から見ると、可なり激しい變化を見出すことが出来る。

まして裏通りになると、恰も猫の眼玉のやうに、時々刻々と動いてゐる。だがしかし、其の動きは、料理飲食店の建設許りではない。消滅、推移、其の他凡ゆる方面の動きを含んでゐる。

例へばカフェーバーの名稱には變りがなくとも、其の經營者に變りがあつたり、カフェーがおでん屋になつたり、又實質本位であつたカフェーが、エロサーピスの殿堂と化したり、バーがつぶれ



てしもた屋に替つたりするのは決して珍らしいことではない。  
殊に、現在の歡樂境銀座は、過度期に立つてゐるので、今後と雖もまだ一層繁昌ならしめるもので、銀座に動きがなくなる時がある。否、其の變化こそ、銀座をして、更らに一層繁昌ならしめるもので、銀座に動きがなくなる時が來たら、それは歡樂境銀座の破滅の時である。少くとも行き詰つてどうにもならない時である。だから動くことは、歡樂境銀座にとつては決して悪いことではない。

(三) 銀座二丁目の機構と變遷

銀座二丁目。少くとも其の表通りは、歡樂境として、世界的な存在だ。夜に見る銀座の美も、蓄し二丁目に至つて、斷然輝いてゐる。

宏壯な美を物語る幾多のネオンサイン。珍奇と、怪奇を偲ぶ幾百萬のライト、ビジョンの輝き、それ等の美しさが、特に二丁目の表通りに於て、斷然頭角を抜いてもゐる。

流星は世界的な社交場だ。光りと音の銀座。それも二丁目から四丁目にかけて、相交錯し、もつれ合つて、ひどく其の美しさを増してゐる。

殊に、二丁目の西側には、最近支那料理の第一中華樓が出來、日本屋が喫茶部を開き、越後屋ど

ルの地階には魚がし料理の大增が出來たことによつて、多少暗さを感じさせてゐた此の附近も漸く明るくなり、歡樂街の目抜き場所として君臨した。まして越後屋ビルの隣家が此の間まで空家になつてゐた海老屋足袋店の跡が、今では食器屋の元祖十一屋の營業所となつて、ウインドを飾つてゐるので、層一層其の美を増してゐる。

とりわけ東側には、喫茶紫煙莊、グランド銀座會館、オリンピック、キリンなどの大カフェーやレストランドが軒を並べてゐる。又喫茶店としては、三共の喫茶部があつて、歡樂境銀座の偉大さを雄辯に物語つてゐる。

銀座二丁目(西側)

現在

- 山田金庫店
- 天地堂靴店
- フランスバー (階上)
- 英章堂文具蓄音器店
- ブレイガイド
- ブルマン

銀座二丁目(西側)

昭和三年頃

- 山田金庫店
- 貸店建築中
- 英章堂文具店
- ブレイガイド
- 食料品大橋食堂

銀座二丁目(東側)

現在

- 喫茶紫煙莊
- 石丸毛織物店
- 社交場 グランド銀座

銀座二丁目(東側)

昭和三年頃

- 安田松慶銀座店
- 石丸毛織物商店
- 服部時計店

シンガームシン陳列所	シンガームシン	銀座會館	第百支店改築場
銀座金鳳堂	平野時計店	(小路) 至銀座東仲通	カフェー クロネコ
銀座大増	越後屋呉服店	オリンピック新館	オリンピック
羽毛工業 株式會社	海老屋足袋店	オリンピック	酒井硝子鏡店
十一屋	大成堂雜誌店	カフェーキリン	カフェーキリン
瀬古大成堂	明治屋東京支店	カフエーキリン	遠藤銅器店
(小路) 至銀座西仲通	柴田絨店	カフエーキリン	菊秀本店
日本屋食料品店	米田屋洋服店	カフエーキリン	銀座三共藥局
日本屋米販賣所	川本陶器店	カフエーキリン	三共藥局
柴田絨店	大倉組	カフエーキリン	
米田屋洋服店		カフエーキリン	
第一中華樓		カフエーキリン	
大倉組		カフエーキリン	

以上によつて、先づ西側の變遷を見るに、英章堂の二階に、フランスバーが出来、一軒おいて現在アルマルの處が喫茶ラインであり、而かも、其の昔は大橋と云ふ大衆食堂であつた。つまり極く安直な飯屋だつたのが、ラインと改められ、階下が喫茶店となり、二階がハレムと云ふバーとなつ

た。そして、それが三年程前に、二階のバーが廢され、階下と共に喫茶ラインとなつたのである。處がそれも變つて現在の如くアルマンとなつたのだ。

それから又、前にも一言したやうに、越後屋ビルの地階へ、魚がし料理の大増が進出し、明治屋の跡へ、日本屋が出来、更らに日本屋が、喫茶とレストランを兼ねるやうになつたのである。そして、又川本陶磁器店の跡へ神田の神保町から、支那料理の第一中華樓が進出して來たのである。

其の隣りの大倉組の建物は、銀座に於けるビルの元祖で、明治末期に於て建築されたものである。だから其の建築年代から云ふと、無論、皆川ビルよりも古い譯けだが、しかし、此のビルは建築當初から、貸事務所を目的としたものではなくて、自家用の事務所として建てられたものであるから、貸事務所を目的として建てられた點に於て、皆川ビルが其の嚆矢を爲すことになるのである。

東側に於ける機構は、各々其の建物が大きいだけに、軒數も少なく、又變化も比較的少ないが、しかし、それでも服部時計店のあつた場所が、ブランド銀座となり、第百銀行の跡が銀座會館となつてゐる。最も此の銀座會館は、嘗つて箱の箱と云つたカフェーの一部を占領したものだと思ふがしかし、何れにしても二丁目の東側は、其の頃から歡樂境としての發展を開始しつゝあつたのは争

はれない事實である。

更らに西側の裏通りになると、歡樂境の裏面を物語るにふさわしく、カフェー、バー、其の他の料理飲食店が軒を並べ、夜に見る全貌は、殆ど天國にのみ見られる存在である。

だからこれを過去五十年前の明治初年に見ると、全く夢の如き感さへある。つまり新道と云つた當時から、今日の盛況を見ると、誰れしもそれが現實な變化とは考へられない程の激しい變り方だ何故なら其の頃の新道は、其の名の示すやうに、全くの新道で、飲食店など一軒として見ることが出来なかつたものだ。夜分など眞暗な通りで、殆ど人影など見當らなかつたものだ。それが今日殆ど不夜城の感さへあつて、繁昌の極みを盡してゐる。

二丁目の料理飲食店の總數は七十八軒で、五丁目の百五軒と八丁目の九十軒に、次ぐ場所である。だから二丁目は、案外歡樂氣分の濃厚な場所と見なければならぬ。

#### (四) 銀座三丁目の機構と變遷

銀座三丁目も亦、二丁目と共に、歡樂境銀座の最も潤達な場所で、同時に又、四丁目と共に、商業銀座の中樞を爲す部分でもある。

全く三丁目と四丁目とは、昔から銀座に於ける中心を爲す場所で、江戸時代銀座屋敷も亦こゝにあつたものだ。

今日に於ける機構は、半ば商業地で、半ば歡樂境としての存在で、其の機構形態は誠に適當な按分になつてゐる。即ち東側には、デパート松屋があり、伊東屋があり、明治製菓其の他の大商店があつて、商業銀座の粹を發揮しつゝある。

又西側にしても、古い歴史を持つ十字屋樂器店があり、丸八の松澤商店があり、玉屋があつて、何れも其の老舗を誇つてゐる。殊に丸八は江戸時代からの店で、銀座に於ける老舗でもある。玉屋に十字屋も亦、明治初年からの店で、殊に、玉屋の如きは、明治時代とても繁昌した家だ。

料理飲食店としては、現在、エビスビヤホールに、アトラスレストランなどで、四丁目と共に、比較的歡樂氣分が稀薄である。それから又洋品雜貨の三枝商店も古い店で、これ又明治初期頃からの店である。

かう云ふ風に三丁目は、歡樂境と云ふよりも、寧ろ商業の中樞場所と云つた場所である。

銀座三丁目(西側)

現在

- ナショナル金鐘登録器株式會社
- 鐘紡サービスステイション
- 十字屋樂器店
- 東京瓦斯銀座陳列所
- 銀座堂蓄音器店
- 銀座井上ラヂオ商會
- 銀座ホリドリルストマー
- 加藤エハガキ店
- 丸八松澤商店
- 池田屋毛皮洋傘店
- 時計 測量器玉屋商店
- コロムビア陳列所
- 銀座サエグサ
- 野村銀行支店

銀座三丁目(西側)

昭和三年頃

- 細川洋紙店
- ナショナル登録店
- 十字屋樂器店
- 伊東屋文具店
- 支那料理ギンブラ
- 紅屋牛ふり店
- 大和屋シヤツ
- 加藤エハガキ店
- 松澤筆器店
- 池田屋洋傘毛皮
- 玉屋時計店
- アンドリウス商會
- 三枝雜貨小賣部
- ラヂオ林商會

銀座三丁目(東側)

現在

- 靴鞆アチキ商店
- 營業所本建築中
- オーキー洋装と材料
- 高等玩具大黒屋
- 松島眼鏡店
- 明治製菓銀座賣店
- 篠原靴店
- 伊東屋文具店
- 松屋吳服店

銀座三丁目(東側)

昭和三年頃

- アチキ靴鞆店
- サツボロヤ食料品
- 大黒屋玩具店
- 松島眼鏡店
- 明葉賣店
- スズコー婦人小供服
- 篠原靴店
- 伊東屋文具店
- 松屋吳服店

先づ以上によつて、其の變遷を見るに、西側では、支那料理のギンブラがなくなつて、アトラスレストランが出来、而かも、それが現在の如くになつてゐる。又伊東屋が、本建築の落成によつて、東側へ移つてゐる。それから又、ラヂオの林商店が、野村銀行になつてゐるが如く、こゝにも可なりの變化がある。が、しかし、概して店舗が大きいので、比較的變化が少ない。殊に此の街は、食堂が少なく殆ど其の總てが商店で、四丁目の西側と共に、どうくたる商店街の繁昌さを偲ばせてゐる。

東側にしても、サツボロや食料品店が、カフェーナ、となり、今又オーキー商店となつてゐるし、婦人小供服のスココーが、明治製菓の賣店に買収されて、四階建てのビルになつてゐる。

何れにするも三丁目は東西兩側共、どちらかと云ふと商業地で、歡樂境としての設備は、至つて稀薄であるが、其の代り近代人が割愛する處のデパート其の他の大商店が軒を並べてゐる。だから此の意味に於て三丁目は盛り場の中樞地と云ふことが出来るし、又事實、大衆の數に於ても、其の中心地たる資格を失はない。東側に於ける料理飲食店としては、デパート松屋の食堂、伊藤屋の地階に於ける千疋屋のフルツパラ、明治製菓の喫茶と食事などである。

又裏通りにしても、銀座八丁中での歡樂氣分が、おゝ溢した二丁目の連続であるから、従つて華